

第三回講義へのコメント

今回の講義のテーマは、論文の書き方と web 情報の利用方法を含めた出典の探し方についてであった。

具体的には、「論文を書く上で必要なことは、1 具体性、2 文長、3 見直し、4 考えながらである。1 の具体性については、『どんな?』や、『たとえば?』といったより詳しい説明を添えるということ、2 の文長は、箇条書きではなく、起承転結をつけ、起はテーマ、承で『例えば』、転で『しかし』を使って反対意見を述べる、最後に結に『それゆえ~、つまり~』と結論・結果を提示するということである。また、引用する際は、出典を明らかにすることと併せて、受身形の文体にならないこと、主語をはっきりさせる必要がある。」といった内容であった。

論文を書く上で、具体性が必要だということが分かった。文章を書く理由は、他者に自分の意見や考えをつたえるため、具体性はそれを助ける。わかりやすい文章とは、具体的な文章である。例えば、「とてもたくさんの人」を「1000 人」と実際の数字に言い換える。具体性がある文章で、相手の知り得ない自分の意見をより正確に知ってもらい、理解してもらうことができる。

今回の授業では、情報の匿名性について学んだ。ネット社会である現代は、誰でも自由に意見を発信できるが、その分危険性も大いにある。例えば、個人を特定されにくいため、誹謗中傷で傷つく人がいたり、誤った情報をうのみにして、トラブルになったりもする。したがって、それらを踏まえても、氏名を書かなければならないページをもっと広めるべきである。インターネットを使って調べるとき、ほとんどのひとが一番上にくるページを開く。それは、[Wikipedia](#) である。Wikipedia は利用者がかなり多いが、情報源は信ぴょう性に欠ける。その点で論文などを扱う学術系のページは、個人が責任を持って情報を発信する。しかし、そのようなページを閲覧したことがある人は少ない。その理由には、敷居が高いなどの意見があるに違いない。故に、そういった信用性のあるページを簡略化し、身近なものにするべきである。

今回の講義で書いてはならない魔法の言葉というものを学んだ。「思う」「いろいろ」「考

コメント [y1]: 反対の立場 (氏名を公開することのデメリット) を踏まえて検討するようにしよう。

コメント [y2]: 匿名だからです。

コメント [y3]: 根拠となるデータなどを示しましょう。

コメント [y4]: 根拠を示しましょう。

コメント [y5]: 具体的にどのようにするのか書いてください。

えさせられた」「~と知って驚いた」などである。確かに僕もこのような言葉を書いていた。しかしその言葉を書くと、自らの根拠や理由を書かなくても気にならないくらい自然な文章になってしまう。具体的な根拠や理由を書かなければ上辺だけの内容の薄い文章になってしまう。なぜそう感じたのか、何に驚いたのか、そのようなものを記した上での文章であればある程度信用説得力も出てくる。そして、書かなければならない接続詞というものも学んだ。それは「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」である。それを書くことで文章にまとまりが出てくる。さらに引用をする上での注意点も学んだ。普段ウィキペディアを使っているがあまり使わないほうがいい。なぜなら出典が書かれていないことが多々あり、信用できるものかどうか分からないからである。ウェブで書かれている情報は基本的に匿名が多い。そして大概のウェブの記事には出典が書かれていない。なので出典が書かれていないものはその匿名主が自らの主観で物事を一方的にしか見ていない考えであることが多い。そのようなものはきっかけとして利用するのはよいが、引用はやめておいたほうがいい。その個人の意見であり、信用のあるものではないからだ。そこに「出典が書かれていればそちらを」参照するのがよい。

自分もこのようなことを知ったのは今回の講義が初めてだった。このことを忘れずにより良い論文を書いていきたい。

レポートを書く上では「思う」、「感じる」、「考えるなどの根拠や理由を伴わない曖昧な言葉は使わず、適切な理由や根拠を考え、正しいものとして意見を主張することが重要である。というのも、そのような言葉を使った文章は説得力に欠けるからだ。また、「いろいろ」、「さまざま」、「ある程度」などの抽象的な言葉や出典の明らかでない内容を含むものも同様だ。

さらに、文章の構成には起承転結の流れと、その中で使われる「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」といった接続詞も欠かせない。

ウェブページからの引用では制作者、サイト名、URL、閲覧日の4つの情報をこの順で明記する必要がある。匿名やペンネームでの制作が許された客観的に正しい内容とは限らないページもあることから、利用には注意が必要だ。

今回の講義では、まず、引用を用いた文章の書き方を学んだ。

何度も言われていることだが、理由や根拠を書かずにごまかしてしまうため「思う」や「考える」は使ってはいけない。また、出典を調べて正確な情報かどうか確かめずに「聞いたことがある」と書かない。「いろいろ」「ある程度」などの抽象的な表現も避けるべき

である。これらを見ると、レポートや論文は、あいまいな表現を嫌うことが分かる。

一方、「考えさせられた」と書く場合は、何を考えさせられたのかを具体的に書くべきである。そして、起承転結を表すために「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つを書かなければならない。

次に、ウェブページを利用する際に信用できる情報を見分ける方法を学んだ。

信用できるかどうか確かめるには、製作者を確認し、名前をウェブで検索してみるのがよい。出典が書かれていれば、そのウェブページの情報をそのまま参照するのではなく、そちらを参照する。しかし、ウェブ情報は、あくまできっかけとしての利用が望ましい。最後に、ウェブ情報の調べ方を学んだ。

正確なデータを入手するには、政府や調査機関が行っている統計や、新聞記事のデータベースなどを参照するとよい。現代社会においては、最も信用のおける情報は、学術雑誌に掲載された学術論文とされている。論文は、図書館の論文検索システムや CiNii、Google Scholar を使って検索することができる。Google Scholar では、英語論文が探せる。英語論文を利用すれば、飛躍的に多くの情報を手に入れられるので、英語だからといって**倦厭敬遠**することなく探してみるとよい。それは自らのレポートや論文の内容をより深くし、充実させることに繋がる。

内容はよくまとまっています。あとは実践練習です。頑張ってください。

学生の多くは、レポートを書く際に、書いてはならない魔法の言葉を安易に多用している。レポートには「思う」と書いてはならない。理由や根拠を考えなくても気にならなくなるからである。「思う」の代わりに「考える」「感じる」「印象を持った」と書き換えても同じである。

レポートの書き方のポイントの一つに「接続詞を入れる」というのがある。文章は短く切って作成し、接続詞を使うことで文と文との関係を示さなければならない。基本の接続詞は「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つだ。レポート作成の際には、これらの接続詞を、「起承転結」に注意しながら、必ず用いるように心掛ける。

今日の授業では、web の利用の仕方についても学んだ。匿名のウ**ェ**ブページ、出典の書かれていない情報は信用しないようにする。また、ウ**ェ**ブ情報は、きっかけとして利用するようにする。

今日の授業では、レポートをかく際の注意点とウェブページを利用する際に気をつけるべきことについて学んだ。レポートをかく際の注意点としては、「思う」をかかず理由や根拠をかくことや、抽象的な言葉を用いず具体的なことをかく、引用する際は出典を明記す

コメント [y6]: 受け身表現は基本的に避けた方がよい、と説明しました。

ることが重要であるとわかった。また、ウェブページを参照、引用する際には匿名でないものを参照、引用すべきだと学んだ。しかし、実名であっても信用できるとは限らないため、名前を検索することにより、信頼できる情報源かどうか見極めることができると知った。そして、基本的に政府や調査機関などのデータや学术论文を見るのがよいということがわかった。以上のことから、参照、引用する際には、ウェブページよりも本を参照すべきである。なぜなら、本は出版社をとおしてだされており、実名でかかっているものもおおいからだ。そのため、ウェブページよりも本のほうが信用性が高いといえる。

しかし、本よりもウェブページのほうがより簡単に情報を手に入れることができるのは事実である。ウェブページではいつでもどこでもだれでも容易に情報を手に入れることが可能である。それに、比べて本は書店や図書館に向かなければならないという手間が生じる。また、ウェブページもすべてが全部にせの情報であるとは限らない。

よって、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースなどの信頼できる情報はウェブページからあつめ、それ以外の情報はできるだけ本を使って集めるべきである。また、**新聞をとって**新聞の記事の情報を参照、引用するというのも一つの手であろう。そうすることによって、より信用のできる情報をあつかい、にせの情報に惑わされることなくレポートがかけるであろう。

コメント [y7]: 新聞を取ることは、「一つの手」というよりは、学生として必須のことだと言いました。

論文の文章を書くときには注意しないとけないことがある。「考える」「感じる」「印象を持った」など具体的でなく、理由や根拠もない曖昧な言葉や感想を使ってはならないということや出典が書かれていない情報は信用してはならないことだ。匿名で書かれる記事には責任がなく、嘘偽りが書かれているものが多いので、信用が十分にある学术论文が掲載されている学術雑誌、新聞、政府や調査機関が行っている統計データから情報を得るのが良い。

「PS4で海外ドラマや人気映画を見るのに最適な動画配信サービスはNo.1はどれ?」(金子翔「BLOG.KS・PRODUCT.COM」<https://ks-product.com/ps4-video/>、2018年4月30日観覧)以前使用する動画配信サービスを迷っていたところこのような記事を見つけたが、様々な動画配信サービスを紹介する記事であるはずなのに一つの動画配信サービスに焦点を当てて紹介していた。

コメント [y8]: この人はどういう人なのか調べましたか?

このように匿名でなくても個人の独断と偏見で何の根拠もない記事を書いている人や個人や企業の利益のために記事を書いているページがあるのでインターネットでの情報収集は学术论文や新聞、政府や調査機関が行っている統計データなどの信用できる提供者からの情報を選ぶ必要がある。

レポートを書く際、参考にする文献選びはとても重要であると言える。自分の主張を説得力のあるものにするためには、より正確な情報から引用する必要がある。主張の根拠としている情報が信憑性のないものでは、読み手が納得がいくレポートとは言えないからだ。まず、正しい文献選びの際に注意しておくべき点として挙げられるのは、「情報の鮮度」である。出版年が最近のものであるほど、その情報は新しいのであり、「鮮度が高い」と言える。古い情報より新しい情報による根拠を示された時の方が説得力がある。特に、実際の数値を出して証拠を示す場合は、よりそれが新しいものほど相手の理解を得られる。

しかし、鮮度の高い情報を優先することは大切ではあるが、必ずしも新しい方が良いというわけではない。「情報の鮮度」より重要なのが、概説書を読んでその分野における「学評のある文献」、「古典的文献」がどのような文献かを知り、まずはそれらを読むことである。そこで、文献を調べる際に気軽に利用できるのが、ウェブでの検索である。だが、ウェブ上の情報は嘘でいっぱい、信用できる情報の見分けが難しい。そこで着目するのが「出典の有無」である。出典が書かれていない情報は信用せず、また出典が書かれている場合は、その出典の方を参照する。そうした上で、最終的にはウェブ情報をそのまま引用せずに、その情報の源である出典の方を引用する。つまり、ウェブで調べる際に必要なのは、ウェブ情報を鵜呑みにするのではなく、ウェブ情報を情報収集の「きっかけ」として利用することである。

レポートを書く際に使ってはけない言葉がいくつかある。それは、「思う」という言葉だ。この言葉は無意識に日頃からよく使っているもので、今まで書いてきた文章には必ず出てきた。「思う」という言葉は、断言できない主張をしている自分に安心感を与えてくれる、頼れる存在だ。しかし、レポートは自分の「思ったこと」ではなく、意見や事実を述べるものである。それゆえ、「思う」という言葉で自分の主張を濁してはならない。自分の意見を断言したうえで、またその根拠を示す必要がある。そこでポイントなのが、参考文献である。正しく文献を選び、引用できることが、よりレポートらしい文章を書けることに繋がる。したがって、文献の選び方は身に付けておくべき重要なものであると言える。

今回の授業では、論文の書き方と論文を書く際のウェブの利用の注意点について学びました。まず、論文の書き方は「思う」とは書かずに理由や根拠を書き、「思う」と書いてしまったときは「である」に直しますそれを消して、理由や根拠を書くようにします。「いろいろ・さまざま」は消して具体的に書き、「聞いたことがある」は消して出典を調べます。さらに、箇条書きではなく、接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」を用いて文章として構成することが重要です。

また、論文を書く際のウェブの利用の注意点としては、匿名のウェブページや出典の書

コメント [y9]: これは学生のコメントです。

かれていない情報は信用せず、制作者名があればそれを検索し、出典があれば出典を参照します。ウェブ情報はあくまでもきっかけとして利用し、統計データや論文を探すことが必要です。加えて引用する本の選び方としては「その分野で定評のある文献や古典的文献」がどのようなものかを知り、まずそれらを読み、専門の先生に聞くことが有効です。

論文の書き方について学び、それについての意見を提出しなければならないことを、先生が生徒側だったとしても困ると思うのであればそれを生徒側にさせる意味がわかりません。

今回の講義ではレポートを書く上で引用すべき文献の選び方について学んだ。最も普遍的な文献である本については必ずしも新しいものが良いというわけではないことを教わった。加えて、初めに概説書を読み、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を知り、それらを読むことがよいと知った。またデータは政府や統計機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースなどの信用に値する情報を利用することがよいと学んだ。また、レポートの書き方については接続詞を使うことで理解しやすいレポートを書くことができるということが分かった。

現在、データの引用元である新聞記事が近年誤った情報が記載される問題や、新聞社によって記事の内容のニュアンスが異なることによる読者の先入観を生み出している問題が存在している。最近で言えば、今年3月に産経新聞が自社の事実不確認による欠陥記事で沖縄の新聞社二社を批判した問題(<https://news.yahoo.co.jp/byline/egawashoko/20180215-00081657/>)や、2014年に朝日新聞が報じた朝鮮慰安婦における「吉田調書」の問題(<https://news.yahoo.co.jp/byline/furuyatsunehira/20140911-00039035/>)があげられる。マスメディアは政府等の権力の暴走を監視すべきだが、誤報が存在する中で私たち国民の監視の目も必要である。

レポートを書くにおいて、「思う」や「考える」などと書くのは禁止で、理由や根拠を書かなければならない。そして具体的に、出典や接続詞、起承転結に注目して書かなければならない。接続詞においては「例えば、しかし、それゆえ、つまり」が基本である。

引用するときには、ウェブの情報を引用することが多々あるだろうが、ウェブには嘘が多く、その内容が信頼できるか見分けるのが難しい。ウェブの情報を扱うポイントとして出典の書かれていない情報は使用しない、出典があればそちらを参照する、ウェブ情報はきっかけとして利用する、という3点があげられる。

コメント [y10]: 「ひょっとしたら困るのかもしれませんが」とは言いましたが、自分が学生だったらとくに困ることはありません。授業の内容をまとめるだけでも十分に意味のあることです。

コメント [y11]: どういう意味でしょうか？

コメント [y12]: 新聞が誤報するのは近年特有の問題ではありません。誰も誤る可能性はあります。「マスコミであれ誰であれ、絶対誤らないようにする」ことは不可能なので、誤ったときに自由な批判と訂正が行われる体制が大切です。

コメント [y13]: 具体的にだれがどのように監視するか考えてください。

レポートを書くにあたって必要になってくる参考文献の選び方はまずその分野の概説書を読みそこで紹介されている参考文献を読む、または専門の教授に相談するというのが最も良い方法である。そしてその参考文献をうまく活用し、コピペではなく引用とするために必要なのが出典表示、名良区分性、主従関係である。これは文献だけではなく web ページにもいえることである。

web ページの引用で特に注意すべき点は(製作者、サイト名、URL、閲覧日)の 4 つの情報をこの順番で記載する必要があるという点である。また、製作者が信用に値する人物かどうかを調べるのも重要である。これらの条件を満たさない場合は引用するべきではないということである。しかし引用に適さないページであっても自身の考えるきっかけとし、正確な情報を文献で調べるといような使い方は可能である。

そしてこれらの情報を論理的に伝えるためには、「思う」「考える」「感じる」など**主張の断言を避ける理由や根拠を書かずにごまかす**言葉を使わない、「いろいろ」「様々」「ある程度」「なんとなく」「いわれている」など具体的な**名言明言**を避ける言葉を使わない、「楽しかった」「驚いた」など感想文にしない、そして「考えさせられた」など自身の意見を主張しない文体を使用しない、というのが大前提である。

論文・レポートは、理由や根拠をもって自分の意見を提示するものである。単なる感想を書くのではなく、自分が考えたことについて具体的に書き、引用した場合は出典を明記することが必要だ。特に、引用は定評のある文献や古典的文献、政府や調査機関が行っている統計データ、学术论文という信用できる情報を用いなくてはならない。そして、これらを自分の目に複数入れ、情報を偏って得ている状態にならないようにすることも重要だ。そうすることで、自分の意見を別の視点からも見直すことができ、より多面的で、説得力のある主張ができるようになる。

十分な知識を持っていなくても、誰でも書き込めるウェブページには、正しい情報も正しくない情報も混交されている。それゆえ、ウェブページの誰が書いたか分からない情報、出典が明記されていない情報は信用するべきではない。また、制作者が書かれていても、その制作者が正しい情報を提供しているという保証はない。つまり、ウェブページの情報は信用できる情報だと言い切れない。よって、ウェブページの情報はきっかけとして利用し、さらに詳しく調べたい時には定評のある文献や古典的文献、政府や調査機関が行っている統計データ、学术论文といった信用できるものを用いるのがよい。もしウェブページの情報に出典が明記されていた場合は、その出典の方を参照するべきである。客観的で論

理的な主張をするためには、信頼できる情報を見極め、正しく引用することが重要だ。

今回の授業では、本の選び方、レポートや論文を書く際に使ってはならない言葉と使うべき接続詞、そしてウェブ情報の使い方を学んだ。

今までは何か調べ学習をするとなると、私も含めクラスメイトみんなが Wikipedia に書かれていたことを参考にして提出していた。そのたび先生から「ウェブサイト、特に Wikipedia は嘘が多いから使ってはいけない」と指導があった。「本のほうが信憑性は高いし、嘘ばかりのウェブサイトは参考にならないかも」と思った私は、次第にウェブを活用しなくなっていた。

しかし授業で政府の調査機関の統計データや、論文の載ったページがあると教わった。このようなしっかり管理された公式のデータを上手く活用すれば便利であるし、何より正しいデータがたくさん得られる。また、ウェブで見つけた情報を「きっかけ」として利用することで、そのウェブサイトに記載された出典から、ちょうどいい本が見つかる可能性もある。出典が書かれていなければ信用しなければいい。ウェブを上手に活用すれば、自分が探しているレポートや論文の内容にあった本やデータを見つけられるということだ。

また本を読むことでも情報を得ることができる。私はもともと、「本は買うもの」という認識だったので先生が「本は買いましょう」とおっしゃったときは大賛成した。一冊の本から得られることは多く、意外なところでその本が活用できることもあるし、何度でも期間を気にせず読むことができるからだ。面白かった本の著者が参考にした本を辿って読んでいくことでどんどん情報を増やしていくこともできる。授業スライドの「本の選び方」では「教員に相談する」という方法で本に出会えることも知った。玉石混交のウェブ情報から信頼できる情報と莫大な数のある本から必要な本を見つける方法がよくわかった。

[たくさん本を読んでください。](#)

論文・レポートには書いてはならない言葉がある。それは「いろいろ」や「さまざま」「ある程度」という言葉だ。このような言葉は文章を曖昧にしてしまう表現であるため、このような言葉を使うのではなく、具体的な数値を示す必要がある。また、「楽しかった」や「〜と知って驚いた」など自分の感想は書いてはならない。他人の感想は評価することができないため論文には不適切であるのだ。

そして、箇条書きではなく文章にして書くのが論文である。そのためには短い文章を繋ぐ接続詞を用いるのだ。論文の構造は「起・承・転・結」が基本である。論文のテーマを示した上で、「たとえば」と具体例を述べ、「しかし」と反対の事例を示す。「それゆえ」と

文章の結論を述べ、「つまり」と文章をまとめるのだ。このように適切に接続詞を用いて文章を進めることで、論文の構造をはっきりとさせることができる。

また、論文を書く際に重要なことは調べるということであり、情報を収集する際は基本的にウェブ、本、論文が用いられる。高校までの調べ学習では、ウィキペディアというサイトの利用頻度が最も高かった。しかし、そのサイトには多くの情報が載っているが、誰が書いているかわからない。そのような情報は信用できるとは言えないのだ。ウェブ上のサイトでは、出典の表記があるかどうかでその記事の信憑性が分かる。もし出典があればその出典の方を参照し、より信憑性の高い情報を収集することが重要である。

文章を書くことが苦手な人であっても起承転結を意識して書くことによりおのずと抽象な文章から具体的な文章へと変化させることができる。

起承転結の例として最もわかりやすいのは**絵本**である。絵本は、少ないページ数でありながらもしっかりと長年受け継がれ、そして人間の心に残っている。それは、文章構成がしっかりとしたものであるからだ。

しかし、起承転結を意識するという事は、ただ単に言葉を並べるといっわけにはいかない。文章を何度も推敲し練り直していくということが必要となってくる。それゆえ、文章を書くということは簡単なことではない。そのため**文章を書くという力を今後の授業において身につけていかなければならない。**

文章を書く際、今自分の持っている情報を確かな根拠にするためには、信頼することのできる情報源の統計データなどを網羅することが必要となる。また、それをそのまま使うのではなく**今現在持っている知識と組み合わせる**ことが必要である。

また、論文にもランク付けがされており、信用度の高い学術論文を複数対比することにより自分の主張のしっかりとした土台にすることができる。これらを効果的に利用することでよりよいオリジナルのレポート・論文を作成することができる。

このようなことから、私は文章とは、順番に言葉を並べていくのではなくまずは全体像を決め、構成していくものであると主張する。

今回の授業では、論部・レポートを書く前の情報収集の段階で重要なことと、書く段階での注意点を学んだ。

まず、論文・レポートを書くには、学問的に問う価値のある問いに関して、複数の情報源を使用し調べることと、書くことを繰り返す必要がある。問いに関して調べる手段として、ウィキペディアを使用してはいけないという意見がある。しかし、その意見は正しい

コメント [y14]: 絵本は意見を主張するためのものではなく物語ですから、レポートや論文と同じではありません。

コメント [y15]: 具体的には、「文を短く切る」と、「すべての文の間に接続詞を入れる」練習をしてください。

コメント [y16]: 具体的にどのようにするのですか？

ものではない。なぜなら、信憑性とは、出典で決まるからだ。ウィキペディアにも出典を明示している場合がある。しかし、ここで重要なことは、出典を明記しているからと言って、1つの文献だけを安易に鵜呑みにしてはいけないということである。いくつもの文献を読み、比較して、自らが矛盾点を探せるようにならなければいけない。この矛盾点が、学問的に問う価値のある問いなのだ。このように、ウィキペディアなどのウェブ情報は、きっかけとして利用することに意味がある。

次に書く段階での注意点である。論文・レポートは、接続詞を使って書く必要がある。接続詞を使っているということが、箇条書きとの違いとなる。基本となる接続詞は4つある。1つ目は「”たとえば”」である。「”たとえば”」を使って例を述べ、具体的に書かなければならない。2つ目は「”しかし”」だ。反対意見や反対事例を述べ、より考えを深めていくことができる。最後に結論の中で、「”それゆえ”」「”つまり”」を用いてまとめとする。論文・レポートの中では、「”また”」や「”ところで”」といった話の内容を広げてしまう接続詞は使わない方がよい。1つの意見がぶれてしまう恐れがあるからだ。

「”」や「”」の使い方にも注意が必要だ。「”」を用いた文の場合、句点の位置は、必ず一番最後になる。理由は、「”」の手前に句点を打つと見にくくなるからだ。(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室』新曜社、2013年、6ページ)。

このように、論文・レポートには、具体性、確実性が求められるのだ。

今回の授業では、文章の構成の仕方や、本やウェブページの活用方法を学んだ。まず、書いてはならない言葉として、「思う」が挙げられた。思うと書いてしまえば根拠や理由を書かなくてもいい気になり、断言した言い方をしにくい時にも用いられるからだ。「思う」の代わりに理由や根拠を考えて書く。また、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」という言葉も使ってはならない。きちんと具体的に書く。さらに、「聞いたことがある」「言われている」のような主語のはっきりしない受身の言葉も使わずに、きちんと出典を自分で調べて書かなければいけない。「楽しかった」などの単なる感想は評価ができないため用いない。反対に、書かなければならない接続詞がある。文章は短く切って接続詞でつなげてまとめる。基本の接続詞は「例えば・しかし・それゆえ・つまり」である。これらを用いて起承転結を考え書いていく。「ところで・さて」などの話題転換はあまり用いないほうがいい。あちこちに焦点を向けすぎると、自分が導き出した正解についての内容が薄っぺらいものになってしまうからだ。

調べた時には、必ず出典を書くようにする。ウェブサイトの場合は製作者・サイト名・URL・閲覧日の4つを忘れずに明記する。本の場合は、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を知り、読む。本選びは教員に相談するのもよい。本の場合は著者・タイトル・出版社・出版年・ページを明記し、論文の場合は著者・タイトル・掲載誌名・

コメント [y17]: その場合は、出典の方を参照しましょう、と言いました。

出版年・ページを明記する。ひとつでも抜けているとコピペになってしまうため気を付けなければいけない。ウェブには嘘がたくさんあるので信頼できる情報を見分ける必要がある。まずは、製作者を確認する。

誰が書いたかわからない情報は危険だ。製作者をウェブで検索し確かめる。内容は出典がないものは選ばない。ポイントは、出典の書かれていない情報は信用せず、出典が書かれていたら出典のほうを参照する。あくまでウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。

ウェブで調べるときに孫引きするのではなく、統計データを調べてみる。論文を検索する時に「信頼できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。「学術雑誌」に掲載されているものもある。これはCiNiiで探す。欧文雑誌を検索したいときはGoogle Scholarで検索する。

情報社会である今身近にたくさんの情報があふれており、何かを調べたいときにスマホやパソコンですぐに情報は手に入る。しかし、便利な一方で正しいことばかりが書かれているわけではない。レポートを書くときには一つの情報をうのみにせず、正しいかどうかを判別して引用しなければならない。

今回は、前回の授業の内容もふまえて論文を書く上で大切なことをより深く学んだ。前回では主にコピペと引用の違いについて学んだが、今回はレポート内で使っても構わない言葉と、書いてはならない魔法の言葉やウェブ上で正しい情報を見つける方法について学んだ。

中でも、レポートで参考にする情報の探し方は今まで以上に情報の信憑性について気を付けなければならない。高校までは、調べ学習をするときにはとりあえずインターネットで調べて、その補助や補足として図書館へ行き文献を探すという流れが多かった。(山口先生がおっしゃられたようにウィキペディアは使うなど中学の頃から先生に言われていたため、ウィキペディアを使うことはなかったが)。しかし、インターネットの情報は書籍などと比べて、作者の匿名性が高い。つまり、誰でも簡単に情報を流すことが可能なのである。そんなウェブ上の情報は信憑性が低いため過信信用できない。ウェブの情報はあくまでもきっかけとして利用するのがよいのだ。ただし、ネットでも政府の統計データを調べることができ、それをもとにして自分でグラフを作成することもできる。政府が公式に発表しているものなら信用しても構わないだろう。

近年、政府による文書の改ざんが問題となっている。先に述べたが、政府が公式に発表している情報は基本的に信頼度が高いはずだ。しかし、その信頼できるはずの情報が間違っていると、これから情報を探す際により一層の注意が必要だ。

コメント [y18]: 「絶対間違いでない情報」を、「政府が発表している」「学術雑誌に書いてある」などの形式面から判断することには限界があります。内容から判断できるようになるのが理想です。そのためにはたくさんの本を読み、なるべく大きな知識の体系を作り上げ、「知恵」ある人に育っていくしかありません。がんばってください。

レポートの書き方には決まりがあり、カギカッコや句読点など細かい所まで気をつけないければならない。レポートにおいて自分の考えを展開させるとき、「思う」を含めるなど曖昧さがある言葉を使うのではなく、具体的な根拠を示すことで曖昧さを消して断定するようにしなくてはならないことで自分の意見として成立する。また、接続詞を正しく使うことで文章の起承転結がはっきりし、読み手にとって読みやすい文章になる。

自分のレポートの制作にあたり情報を得る必要があるが、そのとき出典や情報制作者の氏名などが書かれていないものは信用性に欠ける。このような情報はきっかけとして利用すべきだ。信用性が高い情報は政府や調査機関、新聞社、学術論文などであり、これらを活用するのが良い。しかし、これを鵜呑みにするのではなく、賛否の両方を見て自分の意見に説得力を持たせるように使用する必要がある。

コメント [y19]: 単に「読み手にとって読みやすい」だけでなく、書いている自分自身にとっても、接続詞を使うことは、考えを整理し明確なものにするために必要です。

全然前回の授業で接続詞に関して勉強した。レポートに接続詞が無いと因果関係をきちんと示さないの、接続詞はレポートに対してとても大事な存在である。そして、どうやって外部の文章を引用するか、どうやってコピーを思われないに関してしっかり勉強した。特に外部の文章の信憑性に関してどうやって判断することを学んだ。

レポートの書き方に関して学校だけではなく、社会人になってもかなり効くと考えられる。綺麗なレポートは社会人にとって不可欠な技能だと考えられる。

コメント [y20]: 勉強した中身を具体的に書いてください。

コメント [y21]: そう考える理由を書きましょう。

今回の授業は、文章の構成の仕方とウェブページの活用方法を学ぶことができた。「思う」はマジックワードであり書いてはいけない。「思う」と書くのではなく、代わりに理由や根拠を考える。自分も高校までよく「思う」と書いていたので直していかないといけない。また、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」のような起承転結接続詞は書かなくてはならない。

引用をするためにウェブで調べるときは注意しなければいけないことがたくさんある。ウェブには嘘があふれているので閲覧するサイトの情報を正しいか判断しなければいけない。ウィキペディアは使ってはいけない。理由としては、だれが書いたかわからない情報は信用できないからである。信用できる情報の見分け方としては、出典が書かれているかどうか、また出典が書かれている場合はその出典のほうを参照する。あくまでウェブの情報はきっかけとして利用するのがよい。これまでウィキペディアの情報を頼りにしていたのでこれからは、正しい情報が欲しいとき以外は使わない。

今日の総合科学入門講座では、文章を書くときの注意点、文章構成、ウェブページの活用方法について学んだ。

文章を書くときの注意点は、段落分けをすること、カギかっこの後の句点の打つ場所について学んだ。

文章構成については、起承転結に分けること、そして文章が長くないようにするために「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」という四つのいった接続詞を使うことを学んだ。

ウェブページの活用方法については、ウィキペディア、yahoo 知恵袋のような出典出典の書かれていない情報は信用性が低いことを知った。また、出典が書かれていた場合も、出典のほうを参照するようにすることを気を付けなければならない。

1 レポートの参考文献については、出版年ができるだけ新しいものに優先度を置く。また、文章は短く切って接続してつなぎ、「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の四つを基本として使う。文章の構成としては起承転結が基本である。まずテーマを書き、テーマに関する具体的な例をあげ、反対の事例を取り上げ検討し、最後にまとめをする。抽象的な言葉で逃げずに具体的なことを書く。またコピペにならないように、出典は必ず書く。

2 自分は今まで「思う」「考える」「感じる」などの言葉で逃げていたということが身にしみてわかった。

3 今まで自分の意見を書くときに具体的な根拠を書かずに抽象的な言葉や「思う」などの曖昧な表現で物事を深く考えるなどことをせず、書いてはいけない魔法の言葉をつなげて書いたような文章だったから。

句読点を書くようにしましょう。

今回の授業でコピペと引用には出典を明確に示すか否かで分けられており、引用には明瞭区分制性、出典表示、主従関係の三つを柱として成り立っているの作法があるということが理解できました。

出典明示の手法には大きく分けて三つある、という説明をなさったことと、引用箇所ごとに出典を表示する、記号をつけて最後尾に出典を羅列する、の二つはノートに書いてはいたのですが、最後の一つが書ききる前にスライドが流れてしまったので確認できません

コメント [y22]: これは学生のコメント。
「新しければよいというわけではない」と
応答しました。

でした。ですが個人的に記号をつけて最後尾に出典を羅列するというやり方が良いと思うので、自分はそれでまずやります。

書いてはならない言葉に関しても、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」に具体性が欠けているということを理解しました。

しかし自分の中では、「納得がいく」ということはあっても「疑問に思う」ということがほとんどありません。今回の授業に関しても特に疑問に思うこともなく、メモ力の欠如故に受信できなかった項目を除けば理解はしているつもりです。疑問を持つためには反対の意見を持つ書籍やサイトなどを見なさいということは理解しているのですが、上の授業内容に関しての反対意見を持つ論文・公式書籍を検索するための検索ワードに見当が付きません。それについて教えていただきたいです。

今回の講義も論文・レポートの書き方の基礎についてだった。まず、書いてはならない言葉、書かなければならない接続詞についての説明があった。

「思う」という言葉は理由や根拠を書かなくても気にならなくなる言葉だが、理由や根拠の無いものは意見ではなく単なる感想になってしまうので、「思う」は使用せず、理由や根拠を書いて断言しなければならない。「考える」、「感じる」、「印象をもった」というような言葉も上記と同じ理由で使ってはならない。また意見の内容が不明瞭になると言う理由で「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」という言葉を、主語や出典が無いと言う理由で「聞いたことがある」「言われている」という言葉を、単なる感想でしかないという理由で「楽しかった」「~と知って驚いた」という言葉を使用することは避けた方が良い。対して、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」といった接続詞は論文・レポートの起承転結を整えることができるので使用しなければならない。

次に、引用に際してのウェブの使い方について解説があった。ウェブにはウィキペディアなど情報が詰まったウェブサイトがあるが、それらは匿名の場合があり、情報の信憑性に欠けるため使用してはならない。出典がある場合はその出典の方を参照することが確実な情報を得ることができる。ウェブは調べる際のきっかけとして利用するのが良い。また、政府や調査機関、新聞記事のデータを参照したり学术论文を検索したりするのに利用できる。

これまで、総合科学の基礎 C も含めて、4 回授業コメントを書いたが、自分は言葉を尽くせていないと判断した。前回のコメントで自動車の排気ガス問題を話題に挙げたとき、「少子化と若年層の車の所有意識の低下によって日本の自動車排気ガスの量を減少するだろう」という結論を想定していたが、問題を考察する際に少子化、所有意識の低下を意識するという言葉だけに留めてしまった。また、哲学の方のコメントで、宗教戦争を話題に挙げたときも、あくまで教義が時の為政者の利権争いなどに利用され、それに巻き込まれ

コメント [y23]: 授業用スライドはウェブに掲載して復習できるようにしています。また、教科書『コピペと言われないレポートの書き方教室』にも書いてありますから、復習しましょう。

コメント [y24]: これまでの三回の授業は、「レポートや論文の書き方のルール」についての説明なので、理解でき、次回から実践できるのであれば、とくに疑問に思う必要はありません。

た人々も多かったと分かっていた筈なのに、そうと分かる記述を怠った。

これらのことから、自分は考えを全て適切に記述することができていないと判断した。主張を盤石なものにするため、言葉の中に不明瞭になっている部分がないか意識し、書く練習を続けたい。

ぜひそうしてください。そして、「書く練習」は大切ですが、「たくさんの本を読むこと」もそれに劣らず大切です。期待しています。

レポートにおける参考文献では、より確かな情報が書かれたものである出版年が最近の本の情報を優先する。だが、「新しいものがよい」といは限らず、まずは概説書を読み、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を読むのがよい。

文章を構成する上でレポートや論文には適当でない言葉が存在する。理由や根拠を示さずに済む「思う」、「考える」等だ。また、具体的な内容を述べない言葉や「楽しかった」といった主観的な単なる感想も評価ができないので適当でない。

一方でレポート、論文の起承転結をつなぐ「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」は書かなければならない。

ウェブから引用するときに注意しなければならないのが「信用できる内容であるか」だ。これは出典が書かれているか否かでも判断できる。出典の書かれていない情報は信用すべきでない。書かれていれば参照するのは出典元である。

ウェブ情報は、政府や調査機関が行う統計データや、新聞記事のデータベースを調べることや、論文の参照のきっかけとして利用することにもなりうる。

今回の授業では、論文を書く際の言葉の使い方や、使うべき接続詞などを具体的に学んだ。

これまでの授業で、論文では自分の考えや意見に根拠や理由が不可欠であるということを学んだ。それは、論文は読者を納得させるためのものであり、根拠や理由がないと納得させることができないからだ。それゆえ、「それはよくないと思う」という書き方をしてしまうと、筆者が思っているからそれ以上の根拠や理由が気にならなくなる。そうしてしまうと、論文としては失格である。

まず、問いを考えるとき、自分だけでなくみんなにとって価値のある問いであるかどうか

コメント [y25]: 学んだことを具体的に書いてください。

かを考えなければならない。また、自分の意見に関して、根拠のある判断であるなら、曖昧な表現を使わず、はっきりと断言できるはずである。

本の選び方に関して、常に新しいものがいいとは限らない。例えば、定評のある文献や、古典的文献などを参考にするのもいいだろう。また、教員に相談してみることも大切である。

そして、レポートや論文を書く時の NG ワードがいくつかある。例えば、「考えさせられた」である。何を考えさせられたのか、それを具体的に書かなければならない。具体的に書いていくうちに、謎も生まれてくるのである。また、「聞いたことがある」「言われている」も NG ワードである。基本的に受け身の表現はよくない。そして、情報が曖昧であり、記憶も怪しいのでこの内容は信用できない。つまり、その情報が正しいのかどうか、きちんと調べるべきである。

接続詞を正しく使うことも重要である。一文は短くし、接続詞を用いて文と文をつなぐことを意識しなければならない。

そして、情報を集めるといっても、ウェブには嘘の情報もたくさんあるので見極めることが必要である。例えば、匿名のものは基本信用してはいけない。ほかにも、目立ちたがりの人で実名を出している人もいるので気を付けなければならない。では、どうすればいいのだろうか。まず、出典のないものは信用してはいけない。出典のあるものについては、その出典を参照するべきである。そして、ウェブの情報は、あくまできっかけとして利用するのがいいだろう。

正しい情報源としては、政府の統計データや、新聞記事を活用したり、論文を参照したりするのがいいだろう。しかし、その論文に書かれていることが本当に正しいかどうかはわからない。だから、複数の論文を調べることも大切である。

内容はよくまとまっています。あとは実践練習を繰り返してください。

意見を主張する際、理由と根拠を説明する必要がある。その際行うことが引用である。引用を行うためには信頼性のある情報を入手することが重要である。情報の入手先として想定されるものとしては、「本とインターネットと論文」(注 1)がある。

本を選ぶ方法は主に 3 つある。1 つ目は「概説書を読んで、その分野における定評があるもの、古典がどのようなものかを知り、まずそれらを読む」(注 2)こと。2 つ目は、『奥付』を確認」(注 2)して著者について調べること。3 つ目は教員に相談することである。

インターネットの情報の入手先は『『政府や調査機関が行っている統計データ』『新聞記事のデータベース』』(注 3)と学術論文である。

論文においては学術論文である。

情報の入手において特に重要視して行うべきことは同じテーマにおける複数の数値=統

計を調べることである。理由は2つある。第1に、数値は対象物を数という普遍的なもので表すことによって誰にでも同じ内容として伝わるからである。

例えば、「A村の羊は多い」と言われた場合、それが多いのかどうかは分からない。なぜなら、多い少ないという感じ方は人によって異なるからである。地理的な条件から羊が5匹しか発生しないような土地に住んでいる人なら10匹の羊が発生した場合はそれを多いと感じる。また、羊が100匹発生する土地に住んでいる人なら10匹は少ないと感じる。これに対し、「A村の羊は100匹、B村の羊は10匹、C村の羊は5匹、よってA村の羊は多い」というように数値による比較を行えば誰にでもA村の羊が多いということを伝えることができる。よって数値という普遍的なものを情報源とすることが重要である。

第2の理由は前述の「同じテーマにおける複数」の数値を得なければならない理由へとつながる。数値は普遍的である。しかし、それは計測された範囲内において成り立つことである。計測された数値が正確であっても計測する範囲対象を間違えていれば、導き出される答えは間違ったものとなる。

目線の振幅を計測する眼鏡がある。眼鏡をかけている人の目線の振幅がグラフに表されるものである。グラフに映し出された曲線の細部には細かい振動がある。自身はこれを目線の細部の振幅と考えていた。しかし、他者から眼鏡その物の振動の可能性を指摘された。自身は計測する範囲対象を間違えたのである。この場合、眼鏡そのものを固定した状態で振動を計測することで『目線のブレを計測する』というテーマにおける「複数」の数値を得ることができるのである。

以上2つの理由より、情報を調べるときは統計を調べ、さらに同じテーマにおける複数の統計、計測を調べることが重要である。

次の課題は得られた数値をどのように読み解くか、そして「同じテーマにおける複数」の数値をどのように選択するかである。

参考文献(注1) 山口裕之 sih 道場総合科学入門講座 2018年4月24日

p3 スライド2

(注2) 山口裕之 sih 道場総合科学入門講座 2018年4月24日

p2 スライド1

(注3) 山口裕之 sih 道場総合科学入門講座 2018年4月24日

p3 スライド5

今回の講義のテーマは、レポート・論文を書く際の、文章の構成の仕方とウェブページの活用方法についてだった。正しい意見を述べるために、「思う」という言葉を使わず理由や根拠を書くことの重要さは染みついた。また、「いろいろ」という言葉も使わず、どこが理解できていないのか特定するなど具体的に書くことや、文章は短く切り「たとえば、し

コメント [y26]: 「羊が発生する」という日本語はいささか奇妙です。

コメント [y27]: 数字の適切さは、利用する目的との関連で判断する必要があります。単に羊の生息数を比較するだけなら絶対数でかまいませんが、その場合でも村の面積という要素は考慮する必要があるでしょう。

コメント [y28]: この例の場合、「メガネをきちんと顔に固定しないで得た値」は間違いだということになるでしょうから、「複数の値が必要」という結論にはならないのではないですか。

コメント [y29]: 授業のスライドは「参考文献」に挙げなくてもよいです。自分が独自で調べた文献について挙げてください。

かし、それゆえ、つまり」などの接続詞でつなぐことも学んだ。ウェブページを使うときには、匿名のものは信用せず、**記名の場合には**制作者の名前を検索し、出典の書かれている情報については出典の方を参照するなど、調べてすぐ現れる情報から一步踏み込んで信用性の高い情報を手に入れることが重要だ。

「いろいろ」という言葉は今までで数えきれないほど使ってきた。小学校から高校まで、行事や授業の感想で大活躍した「いろいろ」。しかしこれは自分の意見をあいまいにしてごまかすための危ない言葉だ。今回の講義を受けるまで、「いろいろ」の危険さにはほとんど気が付かなかった。小学校から高校まで「いろいろ」をいくら感想文や調べ学習での文章に書いても注意されることはなかった。高校から大学での、レポートの書き方の切り替えが難しい。高校のうちに、いろいろの多用を減らす努力をすれば、大学生になって書くレポートで書き方について迷うことも少なくできる。その努力を怠って大学生になったので、何より調べ、知り、書き、書き直すという反復練習がやはり重要だ。

がんばってください。

文章の構成をする上で、書かなければならない接続詞は四つある。それは、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」だ。これらをベースに起承転結のルールに従って書く。まず、「起」では、テーマを書く。次に、「承」でテーマに関する具体例を書く。そして「転」では、それと反対の事例を取り上げて検証する。最後に、「結」で結論を導き、まとめをする。こうすることで、具体的に根拠のある文章が作れる。しかし、文章の構成で書いてはならない言葉がある。それは、「思う」、「いろいろ」、「考えさせられた」~~+~~などの、書けば具体性なくなる言葉だ。他にも、「言われている」というような主語が明確でなく、その情報が信じられるかわからない言葉だ。

web 上の情報は全て正しいとは限りない。そのため、出所表記として制作者、ページのタイトル、URL、閲覧日時が示されていれか確認する必要がある。情報の信頼性があるかどうかを調べるには、政府などが行った統計データや、新聞記事のデータ、また今までの自分の体系的知識を用いることだ。

今回の授業の内容は、「文章の構成の仕方」と「ウェブページの活用方法」だった。

「文章の構成の仕方」では、レポートに書いてはならない言葉や書かなければならない接続詞を習った。書いてはならない言葉編では、初回から言われてきた「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」に加え、「いろいろ」「さまざま」、「ある程度」「何となく」、「考えさせられた」、「聞いたことがある」「言われている」、「楽しかった」「~と知って驚いた」

などが挙げられた。これらの言葉は、具体的でなかったり、出典が不明だったり、単なる感想でしかないので、レポートにはふさわしくない。書かなければならない言葉編では、文章を、起承転結をつけて分かりやすくするように、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」が挙げられた。文章は一文が長ければ長いほど読みにくくなる。一文一文を短く切って接続詞でつなげることで、読みやすい文章を書くことができる。

「ウェブページの活用方法」では、引用で用いるウェブページの見極め方を習った。ウェブページは本と違って、誰でも作れて情報を発信しやすい。しかし、だれが書いたのかわからないような情報は信用できない。ウェブページの場合、製作者が何者であるかを知るために、名前を検索してみるとよい。ウェブページの製作者がペンネームであればそのウェブページは信用できないし、企業であればその企業に有利な情報を目立たせている「広告」である可能性が高い。ウェブ情報を使うには、「データ」や「論文」を調べるとよい。「データ」とは、政府や調査機関が行っている統計や新聞記事などのことである。

今までの、高校の「調べ学習」では、誰が作ったのかわからないようなウェブページの情報を鵜呑みにしていた。しかし、官界の授業で、それがいかに危険であるか分かった。信憑性のない情報からは信憑性のないレポートしか生まれない。

内容はよくまとまっています。あとは実践練習です。

レポートを書くときには決意表明型はやめるのがよく、引用する際のカギかっこの後の「。」は文の最後に入力することが分かった。また、自分の主張を「思う」「考える」と表現せずに断定することが必要だ。そのためには自分の主張が根拠のある正しい判断であることを示すために多様な情報を得る必要がある。そうすることで「問うべき問い」をつかむことができ、レポートをより良いものに仕上げることができる。また、レポートに必要な情報を得る際における本の選び方は、まずは概説書を読んで、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」がどのような文献であるかを知り、それを読むのがよい。次により確かな情報である出版年が最近のものである鮮度の高い情報に優先度をおくのがよい。

また、「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」といった言葉は使ってはいけない。なぜなら、そのような言葉を使うことによって、理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまうからである。他にも使ってはならない言葉がある。例えば、「考えさせられた」や「いろいろ」「さまざま」である。何を考えたのか具体的に書いていないからだ。「聞いたことがある」「言われている」を書かずに出典を調べる。単なる感想である「楽しかった」「~と知って驚いた」は評価できない。

一方で書かなければならない言葉もある。それは接続詞だ。文章を短く切ってつなぐことでレポートが読みやすくなる。「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の四つが接

コメント [y30]: これは学生のコメント。授業では「新しければよいとは限らない」と応答しました。

続詞の基本だ。起承転結の、起でテーマを書き、承で「たとえば」とテーマに関連する具体例を挙げる。転で「しかし」と反対の事例を取り上げて検討し、結で「それゆえ」と結論を導き、「つまり」と最後のまとめをすることで文章を構成する。

また、ウェブサイトによって引用する際、製作者、サイト名、URL、閲覧日の四つの情報が必要である。しかし、だれが書いたのかわからない情報は信用できないため、ウェキペディアやヤフー知恵袋は使ってはならない。また、企業のHPは客観的に正しい情報源ではなく基本的に広告であるため引用にはふさわしくない。信用できる情報を見分けるには、まず製作者を確認し、その製作者の名前をウェブ検索してみる。そうすることで**内容制作者**が信用できるものであるかどうかを見分けることができる。信用できる情報のある場所は、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースがある。さらに、論文を検索する際、現代社会において「信用できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。「学術雑誌」に掲載された論文もよい。しかし、ウェブはきっかけとして利用すべきだ。

レポートを書く際、あいまいな言葉を使って自分の主張をあやふやにせず、自分の主張を正しいと根拠づけるものが必要であり、そうすれば杞憂することもなくなるということが理解できた。また、私はこれまでウェブは引用に適したものだとして理解していた。しかし、そうではなくウェブをきっかけとして利用し、出典が書かれていたらその出典のほうを確認することでより信用でき、確かな情報であることが分かった。今後、よりよいレポートをつくるために上記を実行する。

レポートで書いてはいけない言葉は、「思う」「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」「聞いたことがある」「言われている」などの、具体的でなく抽象的で、理由や根拠がないものだ。また、単なる感想である「楽しかった」や「知って驚いた」、意見表明の言葉なども書いてはいけない。そして、書かなければならない接続詞がある。それは「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」だ。起承転結の文章の中にこれらの接続詞をきちんと入れることが大切だ。承に「たとえば」を、転に「しかし」を、結に「それゆえ、つまり」を入れる。「さて、ところで」は話題転換なので、短いレポートには使わない。「～で、～で」と連用接続を使うのではなく、文章を短く切り、読み手に分かりやすいものにする。接続詞をうまく使えるようになるために、全ての文と文の間に接続詞を入れるという練習をすれば良い。以上が今回の授業で学んだ文章の構成の仕方についてだ。

匿名や出典の書かれていないものは引用してはいけない。なぜなら誰か書いたかわからない文章は信用できないからだ。また、ペンネームは匿名と同じことなので、信用できない。企業のホームページも、自分にとって都合の悪いことは書かない広告なので注意が必

要だ。大事なのは、ウェブ情報はきっかけとして利用し、出典が書かれていない情報は信用せず、出典が書かれていたら出典の方を参照することだ。製作者の名前をウェブで検索して確かめることも大切である。また、データを調べるときは、政府や調査機関が行っている統計データ、新聞記事のデータベース、学術論文を見るのがよい。図書館や Google Scholar で見られるようになってきている。最後に、本は概説書をまず読み、その分野の中で定評のある文献や古典的文典がどのようなものかを知る。そして、その本の奥付を見たり、教員に相談するなどして本を読んでいく。。新しいからといって、良い本とは限らない。以上が今回の授業で学んだウェブページの活用方法や本の選び方だ。

文章は起承転結(承で「たとえば」、転で「しかし」、結で「それゆえ、つまり」)で書くより、起転承結で書くほうが良い。つまり、最初に序論で自分の言いたいことを簡単に示しておき、次に「確かに〜」と書き、反対意見をきちんと自分が理解していることを示す。その後で、「だが〜」というふうに自分の意見を説明していく。ここで「たとえば」を使って詳しく説明し、最後の結の部分で「それゆえ、つまり」と続ける。この書き方が良い。なぜなら、起承転結の順では自分の意見を言い、具体例を述べた後に、反対意見を述べるからだ。どういうことかということ、文章の一番の要である結の部分と直接関係のある承の部分が、結と離れ、逆に反対意見である転の部分が近くなっている。そうすると、読み手には承の印象より転の印象が強くなる。結と関係が深いのは承の部分であるから、承の部分と転の部分を入れ替えるのが良い。

反対意見を取りあげて検討しているのであれば、文章の構成は好みで作ってもらってかまいません。

私は、文章を書くことに対する苦手意識を以前から抱いていた。その理由について、これまで考えもしていなかったのだが、1つの理由が、具体例を書かなかったことにあるということが分かった。例えば、この総合科学入門講座で山口先生が、「論文やレポートの書き方が分かったからといってすぐに書けるようになるわけでない」ということの例に、「野球のルールが分かったからといってプロ野球でホームランが打てるようにはならない」ということを何度かおっしゃっていた。この例は、文章を実際に書いているわけではなく、口頭の説明で用いられていたものである。しかし、相手に自分の伝えようとしていることを分かりやすく伝えるために用いているという点で、文章を書く上でも、このように具体的な説明を加えていくと、より分かりやすく、より説得力のある文章になるはずである。

また、信憑性の高い情報を得るためには、まずは概説書を読み、その中で引用されている定評のある本や、古典的文献をあたってみるのが最も確実な方法である。その他に、ウェブページの制作者や、本の著者について調べてみるという方法もある。一般的に、「大学の教員が自分の専門分野について書いたものであれば信用できる」のである(山口裕之『コ

コメント [y31]: 『コピペと言われないレポートの書き方』にはちゃんと文章で書いてありますよ。

ビペと言われないレポートの書き方教室』新曜社,2013,p.48)。ウェブページの場合は、制作者の名前をインターネットで検索して、制作者がどういった人物なのかを知り、その情報の信憑性を確認する。本の場合は、巻末に載っている著者紹介の欄を確認する。そうすることによって、自分の得た情報の信憑性が確認でき、自信を持って自分の意見の理由や根拠として引用することができるのである。

レポートを書く際は引用と出典を明記する。その際にウェブ情報だと制作者、サイト名、URL、閲覧日を書く。本の場合だと著者名、タイトル、出版社、出版年、ページ、論文の場合だと、著者名、タイトル、掲載誌名、出版年、ページを書く。**基本的に**出典が書かれていない情報**よりもは信用せず**、書かれている情報を信用する。Web で全てを調べようとせず、きっかけの1つとするのが良い。情報やデータは政府や調査機関が取り扱っているものを使うと良い。

政府や調査機関が取り扱うには細すぎるもの、例えば町や村の病気の人数などは、どのようにして知るのか。

自らその地に出向いて、調査をする。

コメント [y32]: その市町村が統計データを持っているはずですよ。

コメント [y33]: 社会学系のコースに進んで調査実習に行くなど機会を利用して、社会調査法を学んでください。

今回の授業は、文章の構成の仕方とウェブサイトの活用についてだった。「**思う、考える、感じる、印象をもった**」と書いてしまうと理由や根拠を書かずにごまかすことができる。このことは前々回から言われていることで、それに加えて、「**いろいろ**」や「**さまざま**」など具体的に書くことを避けるワードを使うことは良くないと学んだ。また、ウェブサイトが信用できるポイントは、出典が書かれていることとこのことだった。

レポートや論文では、自分の意見を「正しい」と主張しなければならない。この時必要になるのは理由や根拠である。そこで、**ウェブサイト**をうまく利用することができれば主張できる。その力を身につけるには繰り返し繰り返し練習する必要がある。だから、まずやってみることから始める。

コメント [y34]: 具体的にどのように利用するのか説明しましたが、理解しましたか？

レポートを書く際に用いる文献は出版年が最近である**鮮度の高いものを選ぶ**ことが大切だ。しかし新しければ良いというわけでもなく、その分野において定評のある文献や古典的文献を自分で読んでみるべきだ。なお匿名で出版する人はいないので本の選び方としてインターネットのように匿名の情報は信じない、というような方法はとれない。しかし大

コメント [y35]: これは学生のコメント。

学の教員が自分の専門分野について書いた本であれば信用できるといえる。

そして理由を述べずに「思う」「考える」「感じる」と使うのは良くないが、逆に書かなければいけないものもある。接続詞である。具体的には「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」等を使い相手にわかりやすい文章を作ることを心がけるべきだ。

私も接続詞がある文章は読みやすい。接続詞が次に述べる事が例文なのか、補足なのかなどの道しるべとなるからだ。私が書くときも人に分かりやすいと感じてもらえるように意識して接続詞を使いたい。

最後にウェブを利用する際は誰が書いたのか、出典が書かれているかを必ず確認するべきだ。さらに出典があるなら出典の方を参照すべきだ。

ウェブに出典があればそちらを参照するというのはこれまで知らなかった知識だった。しかし講義を聞いてとても納得した。なぜなら元の情報の方が正確なのは当然だからだ。

今回の講義では本の選び方、文章構成の仕方、ウェブページの活用方法を学んだ。本は新しい文献が一番鮮度の高い情報とは限らず、定評のある文献や古典的文献から読むことを勧められた。確かに古い文献は著作権が失効し、私たちのレポートや論文を書く際に比較的参考にしやすい。しかしながら、時間とともに、社会も大きく変容している。例えば、10年前ではまだガラパゴス携帯が主流に使われていたが、今ではスマートフォンが主流に使われている。つまり、新しいモノがでると以前に使われていたものが使われなくなる。資料や文献も新しいものを積極的に取り入れていくべきだ。

文章構成においてはだんだん「思う」を使ってはいけないという意味が分かってきた。その理由は、根拠がはっきりと書かれているのに文末に「思う」と書かれていたのならば、確固たる意見を作れていないように読み手が感じるからだ。しかしながら、一部の大学生は「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」と書いているのはなぜだろうか。その理由は、自分の意見を述べる練習が不足しているからである。私もまだまだ自分の意見を書く練習が足りていない。何事も「質より量」だ。多くの課題をこなしていき自分の意見を上手く書けるようになりたい。

多くの学校ではウィキペディアを調べ学習では使ってはいけないという教育をしていることに驚いた。確かにウィキペディアの情報が正しいとは限らないが、ほかのウェブページの情報も正しいとは限らない。大切なのは、出典を明記することだ。ウィキペディアも出典を多く記載すればより信頼度の高いウェブページになるだろうが、出典元を参照してレポートや論文を書く時の参考にしていきたい。

コメント [y36]: 自分自身が考えを整理するためにも接続詞が必要です。

コメント [y37]: 著作権の問題ではなく、「古典的文献」はその分野における重要文献として学者の間でも定評のある文献だから、まず読むべきなのです。

コメント [y38]: テーマとの関連で適切な文献を選択することが大切です。「新しい方がよい」「古い方がよい」などの形式的な面のみから適切な文献かどうかを判断するには限界があります。

今回の講義ではまず、正しい本の選び方を学んだ。自分にはまだ「知識体系」が備わっておらず正しい本を選ぶ基準が何か全く分かっていない、しかしだからといって本を読まないままではいけない。その問題が今回の講義で解決した。新しい本が良い本とは限らない。まずは概要書、次に定評のある文献や古典的文献を読む。本の奥付けを確認したり教員に相談する。これらは大学での学びが始まったばかりの私でもできる事である。

次に書いてはならない魔法の言葉を改めて学んだ。魔法の言葉とは具体性がなく、根拠や理由をばかす言葉である。例えば、「ある程度」や「聞いたことがある」などである。これらの言葉は自らの主観的考えや、記憶をもとにしており、情報源として成り立たない。だから書いてはならないのである。また、文章は短く、接続詞を多用する事も重要である。接続詞とは、「例えば」「しかし」「それゆえ、つまり」である。またレポートレベルで使用するべきでないのは「転換」の接続詞、「さて、ところで」である。なぜならレポートレベルでは転換は内容にブレが生じてしまうからである。

そして最後に、ウェブページの利用について学んだ。「今までコピペをやってはならない」と耳にタコができるほど言われているが、それ以前にそのウェブページ内容の信用性はどうのように見極めるのか、という疑問が解決された。方法としてはまず、出典を見る。そして、その出典元を見る。である。その事からも分かるように、出典の記載のないものは初めから信用できない。また、ウェブ情報はきっかけとして利用する事も大切である。

これから、レポートを書く機会がどんどん増えていく。この授業のコメントもそうであるが毎回頭を悩ませるので、毎回頭を悩ませてとにかく練習していくことを頑張りたい。

苦労して得たものだけに価値があります。労せずして得られるようなものは、誰でも手に入るから。

前回の授業で、「思う」「考える」という表現は論文を書く際には使ってはいけないことを学んだ。その代わりに、根拠のある正しい判断であるなら「～である」という断定表現を使用する事が可能である。その正しい情報を得るためにはウェブページから探し出すのが便利な方法だが、ウェブページには出典や作成者が記載されていない場合が多く、信用できない。もし書いている場合は、その出典の方を参照するべきである。ウェブ情報の使用方法としては、統計データの検索や論文の検索などがある。

今回の授業で、新聞を読むと社会的基礎力や知識が身につくについて面接の際にはそれらが身につけているか否かが歴然とするということを聞いた。私には入試で面接が課される友人がいたが、彼女は毎日新聞を読んでおり、新聞から得た情報を元に話をしていた。新聞を読んでいることで大きな差が目に見えるということに気づいた時から、私は毎日ではないが時間が出来た時にはなるべく新聞を読むようにしている。このことが自分の将来に良い影響をもたらすことが再確認できた。

時間を作って毎日読みましょう。

今回の授業の内容は、本を選ぶときは、教員に相談し一日で読めそうな新書から読んでみるようにするということと、インターネットの情報は、きっかけにするにはいいがすべて信用せずに、出典が書かれている場合は出典を参照するべきである。ただし、政府のデータなどは活用するには適切であるということ。加えて、論文やレポートを書くときは、感想や情報源の怪しいことは書かずに接続詞や引用を用いる必要があるということでした。

このことから考えると、**小学校や中学校の時から感想文とは別に論文を書く練習をさせるべきだ**。理由は、大学生になってからでは遅いからだ。

例えば、英語は既に小学校から始めるものとなっている。

しかし、論文を書く練習を取り入れることによってその他の勉強が疎かになるという反論があるかもしれません。

それゆえ、論文の練習は一年間に数回程度にし、まずは慣れることだけを考えることにするのが適当である。

つまり、小学校や中学校の時から論文に慣れるために、小学校や中学校の時から感想文とは別に論文を書く練習を一年間に数回行うべきである。

本日の講義ではレポートにおいて留意すべき**基本的な書き方、ウェブの利用法、情報源の選び方**を学んだ。

書き方については「。」の正しい使い方、出典や引用について、理由や根拠のない安易な表現、さらには書かなくてはならない接続詞などを学んだ。

ウェブの利用法では、ウェブ情報の引用法、真偽の確かでない情報が多いためきつかけ程度にしておくなどを学んだ。信用できる情報源として学術雑誌に掲載されている学術論文があることも学んだ。

この講義を通じてレポート作成は一朝一夕では成らないことを知った。従来私たちが行ってきた感想文や小論文では主観によるものが多くなる。しかし論文やレポートでは確かな情報、根拠を示さなければならない。本日学んだ様に、ウェブの情報も根拠としては弱い。自分の主張の裏付けとなる情報はすぐに出てこないのだ。しかし裏を返せば時間をかけるほど自分の主張に厚みが出るということだ。質の高いレポートを作るには**時間をかけることが必須**だ。

コメント [y39]: 以前の授業で同様のコメントを取りあげ、「なんでもかんでも早いうちから始めた方がよいというわけではありません」と応答しました。

コメント [y40]: 具体的にどのような方法なのか書くようにしましょう。

コメント [y41]: もちろん、きちんと調べるには時間がかかりますが、単に時間をかければよいというものでもありません。授業で説明した方法を意識して、それを実践練習するという目的をもって時間を使うことが必要です。

文章を構成するとき、「思う」という言葉を使いがちだが、そうではなく理由や根拠を述べるのが良い。また、「いろいろ」や「さまざま」という言葉を使って曖昧にするのではなく、具体的に書くべきである。また、「聞いたことがある」と書くのではなく根拠を示すためにも、きちんと出典を調べて書いておく必要がある。そして、たとえば・しかし・それゆえ・つまりなどの接続詞を使って、文章は短くきる。

ウェブを利用するときは、政府や調査機関が行っている統計データなどの情報のありそうな場所からデータを調べ、匿名のウェブサイトや出典に書かれていない情報は信用しない。あくまでウェブ情報はきっかけとして利用するべきである。

今現在ますます進んでいる情報化社会によって、便利にはなったがネット上には嘘の情報も含まれている。文章書くときに自分の意見の根拠として引用するときには、1つの情報を鵜呑みにせず、色々な情報と比べてどれが正しいのか判断する、情報リテラシーがこれからますます必要になっていくだろう。

文章を書く際には、「“～と思う”」という書いて具体的な記述を避けるのではなく、理由や根拠を書くようにする。具体的な記述をし、出典を必ず明記する。また、文は短く切つて接続詞でつなぎ、起承(たとえば)転(しかし)結(それゆえ)が基本である。

引用する際に使用するウェブには誤った情報が掲載されていることがある。Wikipediaや知恵袋などの匿名で誰が書いたか分からないものは信用信頼性に欠けている。必ずそのウェブの制作者を確認し、実名の場合であってもその名前を検索にかけて調べる必要がある。また、ウェブ情報はきっかけとして利用するものであり、出典の書かれていない情報は信用せず、出典が書かれていたらその出典のほうを参照にする。情報のありそうなサイトやデータを調べたり、信用できる記述である論文を調べたりするのも利用したりする。

レポートの文章は主語を明確に短く切り、接続詞でつなぐと分かりやすい。「思う」「さまざま」「聞いたことがある」などの曖昧な表言は避け、具体的に書くと良い。構成の仕方は、はじめの段落にはテーマを書く。次に「例えば」とテーマに関連する具体例を書く。そして「しかし」と反対の事例を取り上げる。最後に「それゆえ」と結論を導き、「つまり」と最終的なまとめをする。このとき、決意表明で終わらないように注意する。レポートを書くにあたり沢山の文献を調べることは大事だが、信用できるか確かめる。企業のホームページやペンネームで書かれたブログを鵜呑みにするのは危険だが、学術雑誌に掲載された論文は信用度が高いと言える。また Web で調べるときは英語で調べると情報量が多い。

文検索では、英語論文を調べることも有効である。

論理的な思考で、論理的な文章を書けるように、学んだ点に注意したい。また、今回の講義で聞いたことを身に着けるのは一朝一夕ではできない。論文・レポートを書く上で、反復練習が重要になってくるということが改めてわかった。

今回の講義を振り返ると、論文・レポートの書き方においては、「思う」「考える」という言葉を使わずに、理由を明示する。あいまいな感じに済ませずに具体的に書く。伝聞の文章は必ず出典先を明示する。接続詞で文章をつながなければならない。そして大事なことは、引用の仕方と引用先である。引用の方法は制作者などの出典先を必ず明示し、引用先が信用に値するかはまず制作者が必ず書かれていること。そして、制作者の経歴などを見て判断することである。

私は引用するときのインターネットの信用について述べる。例えば、「Wikipedia」は、ネット上では実名は公開されておらず、そこに載っている文章が必ず正しいものであるとは限らない。このようなときは、授業で述べているように引用してはならない。他に「ブログ」、「Twitter」は匿名及び権威のない一般人であることが多くこれらもまた引用してはならない。

では、ネットで信用性のある文章とは何なのだろうか。それは学問的権威の高い文章である。例えば、ある大学生が論文を書く際に自分の意見を述べる。その時意見の論理を確かなものにするには「引用」が必ず必要である。しかし、引用先が自分と同じ大学生の論文やよく分からない出典先では論理性を高める効果としてはない。「現代社会において、『信用できる記述』は最終的には『学術論文』である」(山口裕之、総合科学入門授業用プリント p4 スライド 1)と言っているように学者が執筆した論文は比較的価値が高く引用先に適している。

論文の大事なことは「自分の意見を述べること」である。引用が論文の良さを左右することになるため、引用の質を上げていくことが大切である。それが論文を上達させるための第一歩である。

今回の講義では「[『F』文章の構成の仕方](#)」「[『F』ウェブページの活用方法](#)」について学んだ。まず「[『F』文章の構成の仕方](#)」については、レポートを書く際に具体性をもたせるため、「思う」や「考える」といった理由や根拠から逃れる言葉の使用を避ける必要がある。また、ただ単に文を羅列するのではなく、起承転結に応じ接続詞を使い分け文章を展開させることが大切である。

次に「[ウェブページの活用方法](#)」については、前回の講義と同様、コピペではなく「引用」をするのであり、前回の講義で習ったように「出所表記」を欠かしてはならない。大事なことは、出典が書かれていない情報は信用しないことと、本やウェブ上で引用されている場合はその本やウェブページを参照するのではなく、その[出典](#)のほうを参照すべきであることだ。なぜならそれは、引用した著者と自分自身の間には解釈の違いがある可能性があるからである。現代社会で信用できる情報は「学術雑誌」に載っている「学術論文」であり、徳島大学付属図書館のウェブページから調べることができる。またウェブページに惑わされないために信用できるデータを知る必要があるが、それらは政府や調査機関が公開しているデータや、各新聞社が公開しているデータベースから得ることができる。学術論文と同様、徳島大学付属図書館のウェブページから調べることが可能である。

前回と今回の講義で「学術的発想と書き方」の授業は終わった。「引用」と「コピペ」の違いについてや、引用の際での決め事、文章の構成の仕方、ウェブページの活用方法を学んだが、これを右から左へと受け流すのではなく、実際にこれからのレポート作成の際に活用できるようひとつひとつ意識して書くことが大事である。

今回の授業では、前回と同じレポートの書き方について学んだ。参考にするものにおいて、常に新しい情報を優先するのではなく、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を参考にすることも忘れてはならない。参考にするものにおいてだが出典の明記がされていないものは絶対に信用してはならない（[きっかけとして利用するのがよい](#)）。現代社会において「信用できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。次に、実際に文章を書くときについてだが、意識するのは「起承転結」だ。ここで重要になってくるのが「接続詞」である。長い一文を書くのではなく、文章に適した[接続詞](#)によって短く切ることで文章を読む人によりわかりやすく伝わる。

自分だけがわかる文章それはただのメモにすぎない。読み手がより理解できる文章を書くという意識を常に持たなければならない。

今回の講義でウェブの利用方法について学んだ。引用する際に信用できる情報かどうかを見分ける力が必要である。

前回の復習になるがウェブページを引用する場合は製作者、ページのタイトル、URL、閲覧日時を出所表記に示すべきである。しかし、ウェブページの引用となると製作者がわからない場合も多い。この時それらの内容を引用してはならない。なぜならば誰が書いたかわからない情報は信用できないからである。では仮に製作者の名前が分かるとする。

コメント [y43]: 具体的にどんな接続詞をどのように利用するのか、理解しましたか。

その時は必ず製作者の名前を検索することが大切である。その行為がその人の情報が信用に値するかどうかの判断材料になるのである。ここで気をつけておきたいことはペンネームである。ペンネームは匿名と同じで信用してはならない。結局は誰が書いたかわからないということだ。更に企業のホームページもだ。なぜなら企業のホームページは客観的な正しい情報源ではなく、基本的には広告であるからだ。つまり、都合の悪いことは書かれていないのである。

それゆえに情報を多く集め比較していくことが大切なのである。内容が信用できるかどうかの判断は自分の知識体系がどれだけ大きいかに関わってくる。それらを判断する能力は元から備わっているものではなく自分自身で反復作業をこなし地道に努力することによって身につくのである。

文章は「思う」を書いてしまったら理由や根拠を書かなくても気にならなくなるので、「思う」と書いてしまったらそれを消して代わりに理由や根拠を書くようにする。また、「いろいろ」、「さまざま」や「考えさせられた」を消して具体的に「書く」ことも大事だ。「聞いたことがある」などと書かずに書いた場合はそれを消してきちんと出典を調べてきて調べたことを書く。「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の四つの接続詞で短く切った文章をつなぐ。

ウェブサイトの利用については嘘の情報が載っている場合があるので、それが信用できる情報なのかを出所を調べ製作者についてインターネットで検索してみることで調べる。もし自分の見ているものに「出典の懸かれて書かれていない情報があるのならばその情報は信用しないほうがいい。出典が書かれていたならその出典の方を確認してみよう」ことが大事。結局のところウェブ情報はデータを探したり、論文を検索してみたりなどのきっかけとして利用するのが良い。

私も今まで文章を書くなかで「いろいろ、さまざま」であったり「聞いたことがある」や文末には「思う」を多用していたので、それらを使うとなぜダメなのか、またどうやってそれらを消して文章を書いていくのかが知れて今回の授業は為になりました。

本を選ぶ際、まずは概説書を読み、次に定評のある文献や古典的文献を読むのが良い。また、参考文献には「出版年が最近のものを優先する」。論文では理由や根拠のある意見を具体的に書き、文章を短く切って「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つの接続詞でつなぐ。インターネットの情報を引用する際は、政府や調査機関の統計データや新聞記事のデータベース、現代社会において最も「信用できる記述」である学術論文を利用する。

コメント [y44]: これは学生のコメント。

論文やレポートを作成する際には、立場の異なる複数の情報源を調べ「問う価値のある問い」を見出しその答えを導くために引用を根拠として利用する。自分の意見を明確に相手に伝えるためには文章構成の基本をふまえた書き方、ウェブページの活用方法を身につけるべきだ。

まず文章の書き方として「思う」という表現を使わずに理由や根拠を示すこと、「いろいろ・さまざま」等のあいまいな表現ではなく具体的な事柄を書くこと、受身表現を避け出典を調べることがあげられる。そして接続詞を用いて短い文章をつなぎ起承転結の型にあてはめることが重要である。

次にウェブページの活用方法としては雑誌論文や新聞記事、統計データを検索することがあげられる。それらを利用する注意点は出典の書かれていない情報を信用しないことや出典がサイト内に書かれている場合は出典のほうを確認することである。そしてウェブ情報はあくまできっかけとして利用するという点にも注意が必要だ。

以上の事柄をふまえて、自分の意見とその根拠が明記されたレポートや論文を作成すべきであると学んだ。

今回の授業で学んだ文章の構成において「起承転結」の「転」の段落で反対の事例を取り上げて自分の意見を検討することが重要である。なぜなら反対の事例を述べるためには多面的な知識や物事のとらえ方、情報収集能力が必要であり、そして「問う価値のある問い」をつかんでいることが前提にあるといえるからだ。自分の意見と反対の意見とを比較することで自分の意見をより深めることができる。「起承転結」のそれぞれのパートがもつ役割を理解したうえで論文やレポートの作成に挑むべきだ。

第 3 回目の講義では、前回提出したレポートの書き方もふまえ、文章の構成の仕方と良い情報も悪い情報もあるウェブページの活用方法について学んだ。

内容に関しては、カギカッコの後に句読点の「。」を打つことや、段落で区切ること、そして、まだ「○○しよう」「○○しなければならない」といった決意表明型の文章になっている。とのことであった。文章は「○○である」という断定した形で書くのが望ましく、その為にも自分が自信を持って断言出来るように調べぬくこと。また、せつかく 2000 字も書けるのだから起承転結などの文章構成を使ってレポートを書く。その際文章のつなぎとして句読点の「、」を使いがちなので、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などの接続詞を使い、文章は短くすること。

論文は断定的に書いてある。(Cinii 論文森脇弘子他)「給食の提供・資料の配布及び管理

コメント [y45]: なぜこの論文が「論文が断定的に書いてある」ことの出典として指示されているのか不明です。見たところそのような内容ではありませんでした。また、論文の出典の記載方法を教科書・授業ファイルで確認しておいてください。

栄養士の介入が大学生の食意識・食行動に与える影響』、『[県立広島大学人間文化学部紀要](https://ci.nii.ac.jp/naid/120006402395)』13、21 - 34、2018年著者森脇弘子他 <https://ci.nii.ac.jp/naid/120006402395> 4月30日(タゼス)。なぜなら著者が徹底的にその事柄について調べたからであり、自信を持って言えるからである。断定的に書くことによってあいまいさをなくし、説得力のある文章が書ける。

次にウェブページの活用方法について、まずネットで調べものをするときに調べたい単語を検索すると上の方にウィキペディアが出てきて、そこに詳しい情報が載っているが、実はウィキペディアで調べた中には誤情報もあって、私たちはそれを正しいと思い、引用してしまう。ウィキペディアに限らず、他のウェブサイトでも誤情報を掲載したものがあつたのだ。間違つた情報を書かない為にも、自分が引用しようとする[サイトの制作者](#)について十分に調べる必要がある。その制作者の本名、所属、文献など、独自の考えをサイトに掲載してないかを調べてから引用する。ちなみに、政府や調査機関が調査したデータは信用度が高いので正確な情報が得られる。

ウェブページはこのようにして利用するほか、徳島大学の図書館ホームページで新聞や学術論文を調べてみるのもよい。論文は主に英語で書くことが多いので、読みこなすのは大変かもしれないが、決して読み解けない訳ではなく、大まかな大意だけでも分かればよいので、進んで読んだ方がいい。

その都度その都度知識を身につけるのもいいが、日ごろから知識は入れておくべきである。その方が、レポートや論文を書く際により内容の濃い話が出来て、有利だからである。それゆえ、本を日ごろから読むこと。新書が好ましく、一日で一分野読めるくらいの概説書を読むのが良い。[新書は読み重ねていくと、次第にどんな本を読むべきか分かるようになる](#)。定評があり、かつ古典的なものから読む。本はたくさん読むことが大事で、定評のある本を読むと、その本に関連したい本を芋づる方式で見つけることが出来、古典的な本は、古いが物事の本質を知るために重要だからである。

今回の講義の要点は、レポートを書く際の根拠を具体的に示し、接続詞の「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を使用する文章の書き方である。また、ウェブ情報を参考資料としてレポートを書く際の注意点である。

ウェブに掲載されている情報は誰が書いたか分からないものが多いため、信用出来ない場合がある。しかし、レポートを書く際にウェブでは瞬時に情報を得る事が出来る為、私はよく利用している。『コピペと言われないレポートの書き方講座』によると、「数万件にも上るであろうウェブページのうち、上位に表示されたものをざっと見て、授業の課題に一番関連がありそうだと思うページを参照する」学生が多いようだ([山口裕之](#)『コピペと言われないレポートの書き方講座』[山口裕之](#) 新曜社、2017年、pp.25)。前回の授業レポ

コメント [y46]: それに加えて、本文に引用と出典が記載されてあるかどうかともチェックすべきと言いました。

コメント [y47]: 新書を読んだら、読むべき本(古典的文献や定評のある文献)が書いてあるはず、と言いました。

ートのフィードバックを見て、ウェブにはたくさんの情報が掲載されているにも関わらず、ほんの一部分の情報しか見ていなかったと気付いた。

よって、今回の講義で学んだようにウェブは「きっかけとして利用」し、信用出来る情報か分析していきたい。

コメント [y48]: 具体的にどの部分を見て、どうして気づいたのか説明してください。

コメント [y49]: 具体的にどのようにするのか、授業で説明しました。理解しましたか？

今回の講義では、論文・レポートを書くとき「~と思う」という言葉は使わず、代わりに理由・根拠を示すことや、「いろいろ・さまざま」ではなく具体的に述べること、さらに文章は短くして「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」などの適切な接続詞でつなぐことを学んだ。それぞれの根拠として「さまざま・~と聞いたことがある」に関しては、情報源が疑わしく、記憶力的にあいまいであるからだ。この場合はしっかりと出典を示し正しく引用すべきだ。また、適切な接続詞を使用すべきと述べたが、反対に「ところで・さて」の使用は控えるべきだ。なぜなら話題の転換により話がそれてしまう恐れがあるからだ。

今回の文章構成の仕方やウェブページの活用方法に関してやこれまでに学んだことの中でも、多面的な情報の収集が最も重要だ。論文やレポートは感想文とは異なり、その場で考えたことや思うことを述べるだけでは不十分であり、文献や学術論文または新聞・雑誌から情報を得なければならない。しかし、どれに関しても人間が書いたものであり、客観性が十分なものはないといえる。それゆえ調べる側はそのことを考慮し、多面的な情報収集が必要だ。また、ウェブサイトからの引用においても書かれている製作者が正しいものか、どのような人物かということの把握のためにもさらに調べる必要性がでてくる。ウェブ情報はあくまでもきっかけとして利用すべきということを忘れてはいけない。

以上より、論文・レポートを書くうえで多面的な情報の取得が必要不可欠である。

レポート・論文を書く上で、まずは書きたい学問（→テーマ）についての概説書を読めば、や「定評のある文献」、「古典的文献」が紹介されているので、を調べてそれを読む必要がある。そこで、良い文献を判断するには本の奥付を確認し、著者が何者かを知り、またその学問を専門にしている先生に相談することも大切なことである。ここで重要なのは、新しい本や文献がいいとは限らないことである。

そして、実際にレポート・論文を書く際に書いてはいけない言葉ある。それは、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」などがある。これらのどこがいけないかというと、すべて抽象的であるところである。書くのであればもっと具体的に、どこが・どれくらい・どうしたなどと書かなければいけない。他にも、「聞いたことがある」「言われている」も出典の明示が必要であるし、「楽しかった」や「~と知った」と

いうのもただの感想であるので書いてはいけない。

逆に、書かなければいけない接続詞というものもある。それは「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つである。それぞれを起承転結に照らし合わせてみると、起→テーマ、承→たとえば(テーマに関する具体例)、転→しかし(反対の事例を取り上げ、検討)、結→それゆえ(結論を導く)・つまり(まとめる)となる。レポート・論文は箇条書きで書いていくものではないので、文を短く切って接続詞でつなぐことが大切なのだ。

もし分からないことがあった場合、現代ではインターネットで調べたりすることが主流になっているが、その中でも信用していいものとそうでないものがある。信用してはいけないものの例として、WikipediaやYahoo!知恵袋があげられる。なぜ、この2つが挙げられるかという点、匿名で書かれているからである。誰が書いたか分からないものは信じるべき情報ではない。また、ペンネームも匿名と同じである。他にも、企業のホームページは一見信用していいものに見えるが、実際は基本的にその会社の広告であることが多いので、その会社の不利なことが書かれていない可能性が高いので、鵜呑みにしてはいけない。

だからといって、制作者の本名出典が書いてあればいいのではなく、名前出典が書かれていれば、まずはその制作者を検索してみて、本当に信用できるか判断しなければいけない。

出典が書かれていたら、出典の方を参照する。インターネットは「きっかけ」として扱うという言い方が最も当てはまる。

では有効な情報がありそうな場所はどこなのかというと、「政府や調査機関が行なっているデータ」と「新聞記事のデータベース」がある。政府や調査機関は国民の莫大な量の情報を手に入れているので、知りたいことがあれば調べれば出てくることが多い。

現代社会において「信用できる論文」とは「学術論文」、「学術雑誌」に掲載された論文である。かといって、1つの論文を読んですべてを判断するのではなく、複数のものを読み比べて自分の考えと同じものや正反対のものにあたることが重要である。

今回の講義では文章の構成の仕方とウェブページの活用方法を学んだ。初めに、レポートにおける参考文献についてだ。出版年が最近で鮮度の高い情報に優先度を置くべきだ。しかし、新しいものが必ずしも良いとは限らないため、概説書を読み、その分野における「定評ある文献」や「古典的文献」がどのようなものかを知り、まずはそれらをよむべきだ。また本の著者が何者なのかを確認するために最後のページの著者の紹介を見ることも大切だ。本は匿名では出版できないが、ウェブページには製作者が匿名のものもある。だれが書いたかわからない情報は信頼できないので、匿名のウェブページは信用してはならない。製作者が記載されている場合は製作者の名前をウェブで検索して、どのような人物かを確認する必要がある。ウェブ情報を利用するにはさらに注意すべき点があり、それは出典が書かれているかどうかだ。出典が書かれていないものは決して信用してはならな

コメント [y50]: これは学生のコメント。

い。出典が書かれている場合は、出典の方を参照する。ウェブ情報はきっかけとして利用するのが良く、政府や調査機関の統計データや新聞記事のデータベース、学术论文や学術雑誌に記載された論文を検索するのに使うべきである。その際も一つの情報だけでなく、複数ものを調べて情報を得ることが必要である。ちなみに欧米雑誌論文を探したいときには [Google Scholar](#) を使用すると良い。

次に、「。」を打つ場所についてだ。引用した部分を「」でくくり、それに続いて(著者『タイトル』出版社、出版年、ページ)と記述するが、句点は()の外につけなければならない。()の後に、句点なく次の文章が始まるとわかりにくくなるので注意が必要だ。

最後に、書いてはならない魔法の言葉についてだ。一つは「思う」だ。「思う」を書く代わりに理由や根拠を考えなければならない。他にも、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」や「考えさせられた」には具体性がないので使ってはいけない。そして、「聞いたことがある」「言われている」を使わず出典を調べなければならないこと、「楽しかった」「~と知って驚いた」というように単なる感想にならないようにすることに注意する必要がある。接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」を使った文章で、自分の意見を「正しいもの」として主張し、具体的な結論を出さなければならない。

1.授業内容

引用をするときは句点の位置に注意する。カギカッコの中に引用をし、カッコの中に出典を明記するのだが、そのカッコを閉じた後に「。」を入れる。レポートの参考文献は新しいものが良いとは限らず、「定評のある文献」や「古典的文献」を選ぶと良い。「思う」という言葉は書いてしまうと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまうので、書かずに理由や根拠を考える。

書かなければならない基本の接続詞は、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つである。

引用する際、ウィキペディアなどのウェブサイトで誰が書いたか分からないものは信用できないので使ってはならない。また、出典の書かれていない情報は信用しない。出典があれば参照するようにする。ウェブの情報は「きっかけ」として利用すると良い。

データを調べるときは政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースなどの情報のありそうな場所を調べる。論文を検索するときは、[CiNii](#)や[Google Scholar](#)などの論文検索サイトを利用する。出典があれば出典を参照する。また、「信用できる記述」とは最終的に「学术论文」に至るということを意識する。

2.意見と根拠

ウェブページの情報は「きっかけ」として利用するということに納得した。

ウェブページは、匿名のものや出典が明記されていないことが多く、引用には使わない

方が良いとこれまで学んできた。しかし私たち学生にとってウェブページは扱いやすく、検索もしやすいのでどうにか利用したいという気持ちは少なからずある。

文献や学術論文を探す前にウェブページの情報を「きっかけ」として利用することで、幅広い意見や見解、知識を取り入れることができ、どの情報が自分に必要かを明確にすることができる。また、明確にできたことで文献や学術論文を探しやすくなり、その「きっかけ」は大いに役立つのだ。

今回の講義で論文・レポートを書くときの注意点について学んだ。ただ自分の意見を書くだけでなく、複数の立場から見た情報を調べ、誰にとっても「問う価値のある問い」について理由と根拠を示すことが大切である。また、信用できる情報を見分けることも重要だ。Webには信憑性の薄い情報が溢れているため、出典の書かれていない情報は信用すべきでない。これらを踏まえ、論文・レポートを書くのだ。その際、カギカッコの使い方や引用の仕方などを理解し、正しい文章で書かなくてはならない。

私は、文章を書く事が苦手だ。考えがまとまらないし、そもそも何を書けばいいのか思い浮かばない。だから、「思う」「感じる」「考える」といった表現で誤魔化してしまうことが多い。しかし、これは、具体的に書かないことが原因だと分かった。これを解決するには、「思う」「感じる」などの言葉を使わず、言い切ることで、具体的に理由・根拠を書かざるを得ない状況を自分で作り出すことが必要である。これを繰り返すことで、論文・レポートを書くときに必要な文章力や学術的思考が身に付くはずだ。

レポートや論文を書くときは、接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」を使って文章を構成する。そして、「思う」と書くのではなくその理由を書き、「いろいろ・さまざま」と書くのではなく具体的に書き、「聞いたことがある」と書くのではなく出典を調べるなどのように、書いてはいけない言葉には注意する。またウェブページの情報はきっかけとして利用するのはよいが、匿名のウェブページは信用してはいけない。もし出典が書かれていたら、その出典のほうを参照して、信用できるかどうか判断する。統計データを探したり、論文を検索したりするのも一つの手段である。

レポートや論文を書くときに、ウェブページの情報を安易に信用してはならないという意見に私も賛成だ。しかし私もネットで調べるときに、ウェブページの情報を安易に信用して利用してしまうことがよくある。「ウェブページは日々、書きかえられている。ウィキペディアはかなりの頻度で更新されている」(山口裕之『コピペと言われたいレポートの書き方教室』新曜社、2013年、9ページ)。**このことから改めて、ウェブページの情報は信用**

コメント [y51]: 一般的に言って、更新されることで信用性が増すのはないですか？

性が低いということが分かった。つまりウェブページの情報を安易に信じるのではなく、その情報の制作者や出典のほうをしっかりと参照する必要がある。

また、制作者の名前が匿名であることが多いということも分かった。しかし今の私では、その名前が匿名だということに気づかずにその制作者の情報を信用してしまう。それゆえ、**制作者が匿名で情報を発信できないようなシステムづくり**を進めるべきだ。たとえば、その制作者が特定できるように、出典を義務付けるというような解決策もあるのではないだろうか。つまり、制作者の身元が特定できることで情報の信用度が高まるので、まずは今の私には匿名かどうかを見極める判断力が必要だ。

以上のことより、ウェブページの利用には信用度の高い情報かどうかを見極める判断力が必要だ。この判断力はレポートや論文を書く上で欠かすことができない。

コメント [y52]: コメント y1 を参照。

今回の授業もレポートの書き方について学んだ。まず参考にする本の選び方について、概説書をよんでその分野の定評ある文献や古典的文献を知り、それらを読むのがいい。

次に書き方について、「思う」「感じる」「考える」等は理由・根拠を曖昧にしてしまうので書いてはならない。「いろいろ」「さまざま」「聞いたことがある」等も同様である。「考えさせられた」と書く場合は何を考えたのか具体的に書く必要がある。また文章は接続詞を使って短く切り起承転結に分ける。接続詞は「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」が基本である。忘れず出典も明記しなければならない(ウェブの場合、製作者・サイト名・URL・閲覧日)。

最後に論文の検索について、使用するウェブサイトは CiNii や Google Scholar がよい。注意点として、必ず出典が明確なものを選ぶこと、製作者を検索して信用できるかどうか確認すること、出典が書かれていたら原文の方を参考にする。

初回から 3 回にわたって山口教授によって行われた学術的発想・レポートの書き方についての授業は、大学においてどういう姿勢で学ぶべきかをわかりやすく解説されていて非常に有意義なものだった。

あとは実践練習です。がんばってください。

今回の講義では、文章の構成の仕方やウェブページの活用方法について学んだ。

まず、「思う」と書くのではなく理由や根拠を書き、「いろいろ、さまざま」のような曖昧な言葉ではなく具体的に書かなければならない。「文章を書くのが苦手」なのは、具体的に書かないからである。また、文章は短く切り、基本的に接続詞の「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」で構成することが重要である。

ウェブページを活用する際、誰が書いたかわからない情報は信用できないため使ってはいけない。そして、制作者の名前が書かれていてもウェブで検索してみて、信用できる人物かどうかを確認する必要がある。もし出典が書かれていたら、その出典の方を参照すべきである。また、ウェブから直接引用するより、ウェブ情報はきっかけとして利用すべきである。

ウェブ情報を根拠を調べず信じてしまいがちだが、その姿勢を改め、統計データなどをみて根拠を調べた上で引用しなければならない。統計データや新聞記事、学術論文などを見ることを習慣づけることで、曖昧な情報に振り回されることはなくなる。

今回の授業では、文章の構成の仕方とウェブページの活用方法を学んだ。文章を書く際には「思う」と書くのではなく、しっかりと理由や根拠を書く必要がある。また、代わりに「考える」や「感じる」なども書いてはいけない。他にも「いろいろ」「さまざま」など抽象的な言葉は使わず具体的な言葉で書かなければならない。そして文章を構成する際は、起承転結に沿って「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などの接続詞を使えばまとまりがよくなる。次に、ウェブの利用に関しては、匿名のウェブページを信用しない、出典の書かれていない情報を信用しない、ウェブ情報はきっかけとして利用する、といったことに気を付けなければいけない。

良い論文は、具体的でありかつ自分の意見がしっかりと書かれているものである。そのような論文を書くためには、接続詞を使ったり、適切な言葉を使うといった基礎的なことに注意し、自分の知識を増やすためにたくさんの本を読む必要がある。

文章を書いていて、何らかの文献から内容を引用した後、出所表示を示し「。」を打たなければならない。「。」を挿入することで、文章が平らになり読みやすくなる。また、文献等の引用をする際は、引っ張り出してきた情報の情報源を確認することが大切である。情報の源を辿っていくことで、より自身の見解の説得力が高まり、さらには新事実の発見があるかもしれない。情報を辿ることにより、必然的に引用を頻繁に書かなければならず、手間がかかるように思われるが、注に書いたり、文献一覧を作成することで、さらなる効率化が見込まれ、読み手に配慮された文書になるだろう。

文章のまとまりをよくするために、四つの接続詞「例えば・しかし・それゆえ・つまり」を工夫して使用することは必須かつ基本的なことであり、起承転結を意識して書かなければならない。また、自分の意見を述べる際は、そのまま放置するのではなく、理由や根拠を明示する必要がある。

コメント [y53]: 読点の打ち方について注意しましたが、誤解しているようです。もう一度、授業ファイルや教科書を復習しておきましょう。

コメント [y54]: 何を効率化するのはか？出典を示す3つのやり方について説明しましたが、誤解しているようです。もう一度、授業ファイルや教科書を復習しておきましょう。

文献・ネット・新聞等様々な情報がこの世には溢れているが、どれも玉石混交である。ネットはもちろんのこと、今日では新聞でさえも虚偽の情報を掲載していると云われているから、慎重になるに越したことはない。例えば有名なネット上大百科の「wikipedia」は一見正確で完全無欠な情報に見えるが、実際は匿名のボランティアによる個人的な投稿に過ぎない。例えペンネームが記載されてあっても、実質的な匿名であるのであてにはならない。仮に本名が記載されていた場合は、制作者名を WEB 上で検索し、見極めなければならない。つまり、情報の整合性を確認するためには、出典がかかれていない情報は信用せず、出典の記載があればそちらを参照することが必要である。直接正確な情報にアクセスしたいなら、政府統計や、調査機関の統計データベース、または学術雑誌に掲載された論文を検索してみるのも一つの手だ。

いままでは「wikipedia」やネット上の作者不詳の辞典を読んで正確な知識を得たつもりになっていましたが、それは大間違いだということを改めて思い知らされました。どんな情報でも、信頼できる出典元があってはじめて情報になる、このプロセスは意外と軽視されてしまいがちですが、実は一番重要だったのです。企業の HP は客観性がないということをおっしゃっていましたが、確かに私もそう思います。例えば「お客様満足度 No1」・「業界 No1」といった宣伝文句を目にすることは多いですが、誰に・どのような方法で調査したか・どういった意味で満足しているのか etc...ということが明確に記載されているものは見たことがありません。ああいったものは明らかに実績を誇張した誇大広告ですが、**法律に抵触することはないのでしょうか。**

コメント [y55]: 調べてみましょう。

今回の講義は、如何にすれば自分のレポート・論文を第三者に対しても説得力のある構成、内容にできるかといった内容でした。

以前の講義でも繰り返し取り上げられたように、自分の論説に根拠を持たせ、噂やただの見聞に頼らず、学術的価値のある論述に推敲するには、自分の頭の中の考えや思い込みを頼らず、正当な手順を踏んで資料を引用し、己の論説に対しての説得力や学術的な価値を持たせることが重要なことだと学んできました。今回の講義ではそこからさらに一步踏み込み、私たちは論文・レポートを書く際にどのような資料を探し、そして引用すべきなのか、そして資料や文献を選ぶ基準は一体どこで判断すべきなのかといったことについて学ぶことが出来ました。

そして今回この講義を受け、私が思い起こしたのは高校時代に提出した読書レポートの記憶です。たった一冊の本に関してですが、自分の感想や考えを文字として書き起こす課題でした。自分の力不足に苦しみを覚えながらなんとか文字をひねり出し、しかし拙いながらも自分の論説に対して責任を持ち、説得力をつける為に手当たり次第にでも関連の有りそうな本を読み漁りました。**文章を継ぎ接ぎしながらも仕上げていく過程**は、確かに楽

コメント [y56]: 具体的にどのような過程だったのでしょうか。それは、今、論文やレポートの書き方の講義を受けた視点から見ても、妥当なものだったのでしょうか。そうした点を具体的に反省し、それを文章化することで、自分のためにもなるし、この文章を読むほかの学生のためにもなります。

しいだけの作業ではありませんでした。しかし、覚束ないながらも納得いく形に文章を練り上げ切った時の喜びもひとしおでした。

これから先、自分の学術的な興味をさらに衆目に耐えうるようなレポートや論文へと仕上げていくには、高校時代のただの宿題とは比べられないほどに、情報の正確性、信頼性について細心の注意を払いながら資料を読み取り、そして正しい手順を踏んで資料を引用しなければなりません。そこには学生の身ではありますが、学問に関わるものとして持つべきモラルなども含まれています。

しかし自分が何を他者に伝えたいがために文字を起こすのか、そして自分は何のために論文を書くべきなのか、そういった初歩的な問いにもこれからの学生生活の中で重要視すべきものがあるのではないかという考えに至りました。

コメント [y57]: 具体的にどのような点に注意を払うのか、どのような手順を踏むのか、書いてください。

コメント [y58]: なぜ至ったのか、理由を説明してください。

今回の授業は、レポートでの文章では主語をはっきりさせるため受身は使わない、起承転結で「例えば、しかし、それゆえ、つまり」を使うこと、企業のホームページは客観的には正しくない基本的に広告であること、インターネットでコメントをする人の中で本名を名乗っている人もいるが、だからといって信用するのではなく名前を検索しないといけないことなどを学んだ。

欧米英語版の Wikipedia はしっかりしているので、日本の Wikipedia もみんなで協力して質の高いものにするべきだ。先生や親は皆新聞を読み、インターネットの情報を信じてはいけなと言ひ、それが正しいこともよく分かってはいる。

しかしインターネットが昔以上に身近なものになり、ニュースもスマートフォンで簡単に調べられるようになった今日で、わざわざお金を払ってまで情報を集めようとする人はよっぽと意識の高い人でないとしなひ。現に私の周りで新聞を読んでいる友達はほとんどいない。

なので、インターネットでの情報を正確にするべきだ。

コメント [y59]: 「なので、意識を高く持って本や新聞を読むべきだ」と結論すべきでしょう。

「インターネットの情報を正確にするべき」と言っても、自分でできることはほとんど何ともありません。現実は何も変わらないでしょう。それに対して、本や新聞を読むことは、自分でできます。自分の能力を高めるといふ効果が期待できます。

今回の講義の主旨は、論文・レポートを書く上での文章の構成の仕方と、情報を得る際のウェブページの活用方法についてだった。

論文を執筆する上で重要なことは、「個人的な主張や思い」だけを載せてはならないことである。「私はこう思う」、のように書いてしまえば、具体的に理由や根拠を示さずに終わってしまう。「そう思った理由や根拠」を列挙し、客観的かつ説得力のある主張を完成させて初めて論文となる。「いろいろな話」、「ある程度のこと」、「考えさせられた経験」などのように、曖昧な表現を使うのではなく、それらを具体的に示すことが、論文・レポートを

作法に沿った書き方で完成させる第一歩である。さらに接続詞を文中に用いることで、起承転結の効いた論文を作成できる。

ただ、「・・・に、・・・で、・・・」のように連用接続を使った文を書くと長い一文となるため、論文を見る人にとっても読みにくくなる。文章を短く切って接続詞でつなぐことも、論文・レポートを書く上で作法となることである。

論文・レポート中に「引用」を示す際、ウェブサイトの情報源とすることがある。信用することができる情報源を正確に判断するには、「制作者の記名」と「出典の有無」がカギとなる。制作者が匿名のまま記載されているウェブ情報は、制作者が何者であるか判断できないため、記載された情報が真実かどうか確認ができない。また、その記載された情報をどこから入手したのかも確認ができない。ウェブ情報を検証する上で大切なことは、制作者が何者であるか情報をつかむことと、出典の書かれていない情報は信用しない、ということだ。出典の書かれたウェブ情報があった時、その出典そのもの書かれてある情報を参照するのがよい。ウェブ情報はあくまで情報を得る「きっかけ」として利用すること。論文・レポートに嘘の情報を引用することは言語道断である。

論文やレポートを書く際に「引用」は欠かせない要素となる。その時に「情報が真実か否か」を判断するには、その情報に関する文献や書物を沢山読んで検討する必要がある。書物から情報を引用する際、書物の後ろの方のページに著者の紹介が載っている。

もしその書物の著者が大学教員であって、書物自体のテーマが著者の専門分野に関するものであったとすると、その書物の情報は信用できるかどうか。「一般的に言って、大学の教員が自分の専門分野について書いたものであれば信用できるということになっています」(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室』新曜社、2013、p.48)。たった一つだけの情報源の引用によるレポート制作は、説得力や客観性において薄弱である。だからこそたくさん情報源に触れる必要がある。しかし、レポートや論文を書くことに慣れていない場合は、大学教員が書いた「著者の専門分野に関するテーマで書かれた書物」から触れてみるとよい。「自称」を名乗った著者や、科学的に見て信じられない事実が記された書物やウェブ情報を見て引用するよりも、引用する上で確実性のある指標となる書物を二、三冊持っておいた方がよい。

コメント [y60]: 二、三冊といわず、なるべくたくさん持っておいた方がよいでしょう。

授業コメントは抽象的ではなく具体的に書く。「。」を打つ場所は横書きの場合注意する。本の選び方はより確かな情報である出版年が最近のものである鮮度の高い情報に優先度を置きたいが、新しいものがよいとは限らない。また、「思う」を書かずに理由根拠を書くべきだ。文章を短く切って「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」でつなぐ。誰が書いたかわからない情報は信用できないため、ウィキペディアやヤフー知恵袋を使ってはならない。そのためウェブを使うときは制作者の名前を調べたり、出典のほうを参照したりする。

コメント [y61]: どのように注意するのかわかりましたか？

政府など情報のありそうな場所で調べる。英語のウィキペディアは信用してよし。

政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを使って調べるべきだ。

コメント [y62]: 「英語だから信用する」のではなく、出典が示されているかどうかを確認し、出典の方を参照しましょう。「ウェブ情報はきっかけとして利用する」ことが基本です。

今回の講義では、論文を書く際に「思う」を使わずに理由を書くこと、「いろいろ・さまざま」を消して具体的に書く、接続詞を使って文章を構成することや、引用をする際に引用する情報の出典を確認し、より信頼できる情報を使用することなどを学んだ。

信頼できる情報とは山口講師によれば、出典がちゃんとある情報や、参照している情報であれば参照された元の情報などであると言っていたが、そうであれば実際に私が引用する際に用いている Web 上の情報はどの程度の信頼性なのだろうか。まず、「情報の信頼性を考える上で、誰がその情報を発信したのかは重要な判断材料の一つである。」¹ といえる。そのうえで「現実の世界であれば、誰が発言しているのかを確かめる術はあるが、ネット上では、それが困難になってくる。特に、CGM では、どこの誰だか分からない人が発言をしていることが普通であり、情報発信者の信頼性を評価することが難しい」² ということ、やはり、どこの誰が情報の発信者であるかわからない、または誰が発信者であるかわかったとしても、その人が信頼できる人でない場合は講義の中であったように「きっかけ」としてしか利用できないようである。

コメント [y63]: 主語と述語が一致していません。

コメント [y64]: 具体的にどのような情報なのかを特定したうえで検討しないと、一般論で論じても意味がありません。

コメント [y65]: 授業でも言ったことですか（「匿名の情報は信用しない」）。なぜ、あえて他の資料を参照しているのですか？

¹ 2(人工知能学会研究会資料 SIG-SWO-A602-01 情報コンテンツの信頼性とその評価技術 Credibility of Information Content: Concepts and Evaluation Technology

² 加藤 義清*1, 黒橋 禎夫*2*1, 江本 浩*1 Yoshikiyo Kato, Sadao Kurohashi and Hiroshi Emoto

³ *1 情報通信研究機構 National Institute of Information and Communications Technology *2 京都大学大学院情報学研究科 Graduate School of Informatics, Kyoto University、3.1 発信者に基づく情報の信頼性評価、発信者の識別、1 から 2 行目、9 から 11 行目、Google Scholar より「信頼できる 情報」で検索、加藤義清、黒橋禎夫、江本浩 - ei.sanken.osaka-u.ac.jp)

コメント [y66]: 出典の表記に制作者が記載されていません。出典の表記や文献表の書き方については、教科書を復習してください。

今回の授業の内容は、レポートを書くときに覚えておかなければならない注意事項についてだった。

1 つ目は、本の選び方についてだった。参考文献は、確かな情報を得るために出版年が最新のものを選ぶといい。但し、その分野における定評のある文献や古典的な文献を読み、その分野の基礎知識を身につけておく。

コメント [y67]: これは学生のコメント。

2つ目は、レポートを文章として質の良いものにするための注意事項だった。まず、句点を打つ位置についてだった。句点はカギカッコのすぐ後ろにつける。例「...することができる」。また、カギカッコの後ろにカッコがつく場合、カッコの後ろにカギカッコをつける。例「有害廃棄物の低減ができる」(ウィキペディア「ハイブリッドカーWikipedia」)。

3つ目は、レポートを書くときに使ってはいけない言葉についてだった。よくあるのは、「思う」だ。これは、書いてしまうと理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまうマジックワードである。しかし、理由や根拠を書かずに文を断定で終わらせてしまうと、違和感を感じてしまう。文末に「思う」と書いてしまったら、それを消して、理由や根拠を書かなければならない。「考える」「感じる」「印象を持った」も同じ理由で書いてはいけない。書いてはいけない言葉は他にもある。例えば、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」などで、これらは具体的な要素が全くない言葉なので、読み手に何を伝えたいのかははっきりしない。これらの言葉は使わず、読み手に具体的に伝えたい内容をきちんと書くようにする。それから、「聞いたことがある」「言われている」は出典を書かず気を失わせるかずにごまかす言葉なので、書かずに出典を明記し、引用する。さらに、「楽しかった」「～と知って驚いた」などは、ただの感想であり、レポートに書くことではないため、評価されない。

4つ目は、書かなければならない接続詞についてだった。読み手にとって読みやすい文章にするために、文章は短く切って接続詞で繋ぐ。「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本。一方で、「ところで」は、話の内容がガラリと変わるので、使わない方がいい。また、起承転結も押さえる。起 テーマを書く。

承「例えば」とテーマに関連する具体例を挙げる。転「しかし」と反対する事例を取り上げて検討する。この時、両者の主張を支える根拠を検討することで、学問的な興味を満たすレポートになる。結「それゆえ」と結論を導き、「つまり」と最後のまとめをする。

5つ目は、インターネットから引用するときの注意点だった。まず、匿名の記事は絶対に引用してはならない。誰が書いたのか分からない情報は信用できないからだ。ペンネームも匿名と同じである。実名があれば、その人が何者なのか検索してみる。その結果、その人が学者で、自分の専門分野について論じたものなら信用できる。また、出典が書かれていたら、その出典を参照し、そこから引用する。孫引きはしてはいけない。

今回の授業は、前回の振り返りとしてコピペと引用の違いなどからコメントの細かい書き方、句点の位置の説明などを聞きました。句点の打つ場所は私も間違えて覚えていたので注意を心がけます。

授業の内容としては、何度も言われていますがまず「思う」を書く代わりに理由や根拠

を明確に述べること。同じように具体的に書くために書いてはいけない言葉として「さまざま」「ある程度」「聞いたことがある」などを挙げ、どれも具体的に書くようにすることを学びました。反対に、書かなければいけない言葉として「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の四つの接続詞とともに文章の起承転結を学びました。最後にまた初回から少し**ずぶ**つ言われているようにコピペと引用の違いを**細かく**学びました。今回は、調べる際の注意として日本のウィキペディアや企業のホームページ、出典の書かれていないものを使わずに調査機関や新聞のデータや出典に上がっている論文を検索してみるなどを学びました。

意見は特にありません。

今回の授業で習った文章構成の仕方では書かなければならない接続詞がある。この接続詞を使うと読みやすい文章を書くことができる。まず、文章は短く切って接続詞でつなぐ。そして起承転結で文章を書く。起:テーマを書く。承:例えば、とテーマに関連する具体例をあげる。転:しかし、と反対の事例**えお**を取り上げて検討する。結:それゆえ、と結論を導き、つまり、と最後のまとめをする。

次に、レポートにおける参考文献はより確かな情報である**出版年が最近のものである鮮度の高い情報**であるものを選ぶ必要がある。最近の方が新しく加わった情報が書かれているからである。例えば、自分の検索したいことが数年前の情報しかないときがある。だが、**なぜ**、新しい方が良いとは限らない。**のか?**新しいだけだと、情報の正確さの信頼性がない。それゆえ、**出版年が最近のものであり、かつ**正確な情報の文献を見つけなければならない。つまり、その分野の「定評のある文献」や「古典的文献」を**知る**必要がある。

今回の授業ではまず、レポートを書く際に書いてはいけない言葉がいくつかあるということをお教わった。まず、「思う」は理由や根拠を書かずに誤魔化してしまうため使ってはならない。「いろいろ」「ある程度」「考えさせられた」なども使わず、具体的に書く。「聞いたことがある」ではなく、出典を調べて書く。「楽しかった」なども単なる感想でありレポートを書く際に相応しくない。また、レポートを書く際は長い文章ではなく、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」といった接続詞を用いて短く区切った文章を書く。

次にウェブページの活用方法についてお教わった。ウェブページを引用する際はその情報が信用できるのかどうか見分ける必要がある。そのためにはまず制作者を確認し、ウェブで検索する。次に内容が信用できるのかどうかを見分けるために、出典を確認する。出典が明記されていない場合その情報は信用しない。出典が明記されている場合はその出典の方

コメント [y68]: 具体的にどんなことを学びましたか?

コメント [y69]: これは学生のコメント。

コメント [y70]: どのようにしたら知ることができるか、説明しましたが、理解しましたか?

を参照する。

普段ウェブを利用する際、その情報が信用できる情報なのか気になっていたが、どうすれば見分けられるのか知らなかった。レポートを書く際だけでなく普段使用する際も、制作者や出典を確認し、正しい知識のみを身に着けるべきである。

コメント [y71]: 正しい知識かどうかを見分ける力を身につけるべきです。

論文やレポートを書く際には正しく引用をした上で、構成についても考えなければならない。論文やレポートは今までの感想文や小論文とは違い、単なる感想では評価されない。また理由や根拠を示す必要があるため、「思う」「感じる」と書くべきではない。一方で「いろいろ」「さまざま」と大雑把ではなく、ひとつひとつ事例を取り出し具体的に書く必要がある。また、接続詞や出典も書くべきだ。接続詞は、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の4つを基本とする。それらを使い、起承転結を意識しながら短い文章でつないでいくことで、テーマを掘り下げることができる。そうすれば文章を書くことに対しての苦手意識は少しずつ改善される。

また、前回の授業でも学んだが、出典の明記によって「コピペ」ではなく「引用」となり、自分の意見に説得力を持たすことができる。「引用」には、簡単に用いることができるウェブページの情報をそのまま使いたくなる。しかし制作者や出典が不明であったり、企業のホームページは客観的な情報を伝えるのではなく広告であったり、と信用できるとは言い切れない。そのため、出典の書かれていない情報は信用せず、ウェブ情報はあくまできっかけとして利用するのがよい。ウェブ情報の使い方の例としては、データを調べることや、新聞記事や論文を検索するといったことが挙げられる。

第三回総合科学入門では、文章構成の仕方とウェブページの活用方法について学んだ。

まずは文章構成の基本的な部分となる言葉について。レポートを書く際に使っていけない言葉の1つに「思う」という言葉がある。「思う」という言葉は、その根拠となる情報が無いことをぼやかすために使う言葉である。だから「思う」という言葉を書いてしまいそうになったら、そう考えた根拠や理由が無いということなので、根拠や理由になるものを探し、つけ足してみると良い。こういったことは「考える」「感じる」「印象を持った」も同様である。もう1つ使ってはいけない言葉として「いろいろ」「ある程度」「考えさせられた」「聞いたことがある」などといった抽象的な言葉がある。これらの言葉も先程の「思う」と同様に具体的な数字や根拠、そして具体的に誰から聞いたかなど、具体性に欠けている。こういった言葉を使わないためにも、まずはその根拠となる正しい情報を見つけ出し、ちゃんとした数字や人物を明示すると良い。また「楽しかった」「~と知って驚いた」などと

いった単なる感想もレポートでは評価できないので具体的に書いていかなければならない。

次に文章構成するにあたって大切な接続詞について。接続詞の役割は文と文の関係を明示することと、文章同士を短く切ってつなぎ、読者にとって読みやすくするという 2 つである。接続詞は「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の 4 つが基本となっている。「たとえば」は文章構成の「起承転結」の中の「承」にあたる部分でテーマに関する具体例を挙げるために使う。「しかし」は「転」にあたる部分で反対の事例を取り上げて検討する際に使う。「それゆえ」と「つまり」は「結」にあたる部分で結論を導き、最後のまとめをする際に用いる。これらの 4 つの接続詞を使いこなすには文と文の間に 1 回 1 回接続詞を入れる練習をするが良い。

文章構成のポイントの最後は引用について。レポートに関する情報を手に入れたら、忘れずに出典を書く。ウェブサイトから引用した場合は、「制作者・ページのタイトル・URL・閲覧日時」を、本の場合は「著者・タイトル・出版社・出版年・ページ」を、論文の場合は「著者・タイトル・掲載誌名・出版年・ページ」を忘れずに明示すること。また、よく「ウィキペディアを引用してはいけない」と言われるが、それは匿名性であるために誰が書いたのかわからず、信用することができない情報であるからだ。それはウィキペディアでなくても、ペンネームを使った場合も同様である。そして、企業のホームページも自分の会社の利益になるような情報を主に発信しているので、こちらも同様に完全に信用できる情報ではない。では信用できる情報を得るにはどうしたらよいのか?まずは制作者の名前を実名で検索してみて、その人がどんな人物なのかを調べてみる。そうすることで制作者の経歴が知れるので、それで情報の信憑性を判断する。文章を作っていく上で情報を使用する際は、「出典の書かれていない情報は信用しない」、「出典が書かれていたらその出典を参照する」、「ウェブ情報はきっかけとして利用する」の 3 つのポイントがある。

次にウェブ情報の使い方について。まずはデータを調べてみる。データがある場所として、政府や調査機関、新聞記事などが挙げられる。新聞記事は大学の附属図書館のホームページから探すこともできるので活用してみると良い。こういったデータを用いてエクセルでグラフを作ると説得力もあり、見やすいレポートができる。ウェブ情報はデータの他にも論文を検索してみるのもよい。もしその論文に出典が書かれていたら、その出典の方を参照する。また、現代社会において、「信用できる記述」は最終的には「学术论文」である。「学术论文」は「学術雑誌」に記載されているものである。また、「CiNii」「Google Scholar」などと検索すれば海外の論文も読むことができるので、そういったものを引用してみるのもよい。

質問

結局のところ、ウィキペディアを使ってもよいのか?

意見の根拠

ウィキペディアで調べた際に、制作者の名前も明示されていて、その人の経歴もしっかりしていて、参照されている情報も調べてみた結果正確なものであったら、ウィキペディ

コメント [y72]: 「ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい」というのが答えです。

コメント [y73]: ウィキペディアでは制作者は匿名です。

アから検索したものであっても信用できる情報であるから。

自分なりの回答

上に挙げた条件が満たされていればウィキペディアのものでも引用してよい。

「信頼性を言えば、ウィキペディアに限らず、どんな優秀な学者が書いた文献であっても、間違っていることがあります。ですから私は「ウィキペディアは信頼性がないから使わない」という指示は不適切であると考えます。まず大切なことは、ウィキペディアであれ何であれ、情報源(出典)を明示することです」(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室』新曜社、2017年、7ページ)。

今回の講義では、文章の構成の仕方とウェブページの活用方法について学んだ。

文章を書く際、「思う・感じる・考える・印象を持った」「いろいろ・様々」などの抽象的な言葉を使わずに、理由や根拠、具体的な内容を書くということを再確認した。そして、長すぎる文章は短く切り、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」といった接続詞で繋ぐということも新たに学んだ。

ウェブページの活用方法としては、信用できる情報の探し方を学んだ。制作者の名前が明記されているもの(制作者がどれほど信用できる人物かも調べる)、出典の書かれているもの、政府や調査機関が取った統計データ、新聞記事のデータベースを探す。論文もインターネットで検索できるということも知った。

現代ではインターネットが普及し、誰もが手軽に情報を調べられるようになったのと同時に、誰もが情報を発信できるようになってしまった。それには便利な面もあるが、噂やデマもすごい速さで拡散されてしまうという大きなデメリットがある。中学・高校で「インターネットリテラシー」という言葉やその意味を学ぶが、ほとんどの人が十分なインターネットリテラシーを身につけているとは言い難い。それはTwitterやその他SNSで間違った情報を鵜呑みにし、拡散している人が大勢いることから明らかだ。レポートや論文を書く際にはもちろんだが、普段の生活から信頼できる情報を探す、探す練習をするということが大切だ。

今回の授業の要点は二つある。一つ目は、たとえば・しかし・それゆえ・つまりなどの接続詞を有効的に活用すること。二つ目は、学术论文や学術雑誌、また、定評のある文献や古典的文献など、信用のできる文献を参考にしてレポートを作成するということだ。

たしかに、接続詞を有効的に活用することは文章をうまく組み立てていくうえで重要である。なぜなら、接続詞が無いと一文が長くなり、読み手からすると、とても読みづらい

からだ。また、信用のできる文献を参考にすることは重要である。なぜなら、信用のできる文献を参考にすることで、レポート自体も信用度が上がるからである。だから、接続詞を有効活用し、信用のできる文献を参考にすることは重要である。

前回の総合科学入門講座では、コピーと引用の違いについて学習した。引用をする際には、出所表示・明瞭区分性・主従関係の3つの要素を守れば良い。しかし、ここで注意しなければならないことがある。それは、出所表示の方法である。出所表示には、本文中に差し込む方法、注を付ける方法、そして、文献一覧による方法の3つがあるが、どれかひとつの方法を選んで、統一された文章を書かなければならない。

また、レポートや論文を書くために本を選ぶ際には、概説書を読み、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」がどのようなものかを知り、まずはそれらを読む必要がある。新しい文献が必ずしも良いとは限らないため、注意すべきだ。

そして、今回の講義の目的は、文章の構成の仕方とウェブページの活用方法を学ぶことだ。

最初に、文章の構成の仕方についてまとめる。レポートを書く際に、書いてはならない魔法の言葉がある。まず、「思う」という言葉。この言葉は、講義で何度も書いてはならないと言われ続けてきた。なぜなら、「思う」は理由や根拠を書かなくても誤魔化してしまうマジックワードだからだ。「考える」「感じる」「印象をもった」も「思う」同様、マジックワードであるため、使用してはならない。その他に、「いろいろ」や「さまざま」、「ある程度」や「何となく」といった言葉がある。文章を書くのが苦手という人がいるが、それは具体的に文章を書かないからである。このような言葉に頼るのではなく、具体的に書くことが重要だ。逆に、書かなければならない言葉もある。それは、接続詞だ。「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つが基本となる。起承転結を意識し、これらの接続詞を用いて、文章をまとめると良い。

次に、ウェブページの活用方法についてまとめる。引用のために、ウェブページを調べる場合がある。しかし、ウェブには嘘の情報も多いため、匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は信用してはならない。出典が書かれていた場合、その出典の方を参照する必要がある。そして、ウェブ情報はきっかけとして利用するのが良い。政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースなど、正確な情報がありそうな場所や学术论文にアクセスすると良い。

現代の社会は、情報社会であり、沢山の情報で溢れている。さらに、誰もが情報を容易に発信することが可能である。つまり、正しい知識を持っていない人が間違った情報をウェブ上に書き込むこともできてしまうのだ。私たちは、レポートや論文を書く際、自分の意見に説得力を持たせるために、ウェブページなどを調べたりして、引用をする。そこで、

重要になるのが、その調べた情報が正しいかどうかを見極める力である。1つの情報を見るのではなく、複数の情報を見比べて、どれが正しい情報なのか判断しなければならない。ウェブ上の情報をすべて正しいと鵜呑みにするのではなく、この情報は本当に正しいのだろうか、**いつも疑問を持って臨む姿勢**が大切だ。

コメント [y74]: 制作者を調べる、出典が書いてあるかどうかを見る、出典が書いてあればその出典の方を参照する、という三点を意識し、実践しましょう。

今回の授業では、主に文章の構成の仕方と、Web ページの活用法について学びました。授業で学ぶ前には当たり前のように使っていた言葉・表現がレポートを書く上では、使ってはいけないものであったとわかりました。

まず最初に文章の構成の仕方についてです。文章を書く上ではどの言葉を使っても良いわけではなく、書いてはならない魔法の言葉というものがあります。この魔法の言葉の中には高校生の時まで、作文や小論文の中でよく使っていた言葉もありました。例えば、「考えさせられた」という言葉です。私はこの言葉を高校時代のプレゼンの時などに使っていたので、レポートを書く時にも使ってよいものと思っていました。それゆえ、前回までの授業コメントにも多くこの表現を使ってしまっていました。そして、文章には書いてはならない言葉とは反対に、書かなければならない言葉があります。それは、接続詞です。文章を長々と書き続けているは、読んでいる相手にレポートで伝えたい事が伝わりません。そこで、文章を短く切って接続詞でつなぐことを行うことにより、相手にも内容が伝わり易くなり、さらに書いている側の打ち間違いも減り、一石二鳥となります。

そして、Web ページの活用法についてです。Web ページを活用してもよいと言っても、そのまま検索した内容を載せていては、「コピペ」になってしまいます。そこで、「コピペ」をするのではなく、「引用」をします。「引用」では必ず「**製作者・サイト名・URL・閲覧日**」の4つの情報が必要です。しかし、「引用」を行う上での注意点は、もう一つあります。Web 情報が信用できるかです。検索結果の情報だけを、鵜呑みにしてその情報だけを書くのはとても危険です。情報が信用できるかどうかを見きわめる**ポイント**は、出典の書かれていない情報は信用しないことです。そして、Web の情報を信じきってレポートに書くのではなく、情報をきっかけとして利用することが大切です。

コメント [y75]: 制作者を調べること、出典が書かれていれば出典の方を参照すること。

今回の授業では、上に示したことだけではなく、本の選び方も学ぶことができたので、これらのことを、次回からのレポート提出の時に生かしていきたいです。

今回の授業は、レポートの書き方と引用の際の注意点についてであった。「。」を打つ位置や、思う、考える、感じる、などで文章を終わらないようにすることについての注意があった。

レポートでは、定評のある文献や古典的文献を参考文献として利用することを学んだ。具体的に書き、単なる感想とならないようにすることがわかりやすいレポートを書くためには必要である。起承転結を意識し、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」などの接続詞を使うと読みやすいレポートが書ける。

レポートでコピペにならないようにするためには、引用元がウェブサイトの場合は製作者、サイト名、URL、閲覧日。本の場合は著者、タイトル、出版社、出版年、ページを。また、論文の場合は著者、タイトル、掲載誌名、出版年、ページを記載しなければならない。出典の書かれていない情報は信用しないこと、出典が書かれている場合は出典のほうを参考すること、また、ウェブ情報はきっかけとして利用することが重要である。

データは政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを調べ、ウェブページだけを鵜呑みにしてはならない。

最後に、現代社会において、「信用できる記述」は「学術論文」であるので、「学術雑誌」に掲載された論文を引用する必要がある。

今回の授業で、レポートに書いてはならない魔法の言葉と書かなければならない言葉について学んだ。書いてはならない言葉は、前回の授業でも言われていた「思う」「感じる」などは代わりとして理由や根拠を考えて書く。今回の授業では新たに、「考えさせられた」と書くなら具体的に何を考えたのかを書く。「楽しかった」「~と知って驚いた」などは単なる感想になるので書かない。書かなければいけないのは、接続詞であった。「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を起承転結の文頭書いて文と文をつなぎ、文が長くなりすぎないようにする。しかし、話題転換の「ところで、など」は使わない。ということ学んだ。

また、引用する情報がウェブサイトからであるときの注意点についても学んだ。例えばウィキペディアやヤフー知恵袋などの誰が書いたか分からない情報は書かない。ペンネームも匿名と同じである。企業のHPは基本的に広告であるので悪いところは書かれていない。だから、出典が書かれている情報の出典の方を参照する。または、政府や調査機関が行っている統計データ、新聞記事のデータ、論文に書かれている情報を使う。ということも学んだ。

今回は文章の構成の仕方、ウェブの活用方法について学んだ。

文章を構成する時は、「思う」や「考える」などの言葉を避け、具体的かつ論理的に書くことを心がけなければならない。また、文章は短くし、接続詞で繋げていく。その際に使うのが「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の四つである。それぞれ起承転結にそつ

て使うことで順序だった文章が書けるようになる。

ウェブ情報の活用で気をつけなければいけないのが、コピペではなく引用をすることと、ウェブの情報が正しいかどうか見極めることだ。制作者が書かれていない情報は正しいかどうか判断出来ないため信用しない方が良い。また、新聞記事や論文、統計データなどを利用し、あくまでウェブ情報はきっかけとして活用することが好ましい。

今回の講義での質問したいことがある。ウェブ情報はきっかけとして活用するのが良いと学んだが、具体的にはどのような範囲までかきっかけになるのだろうか。引用をしすぎる事はあまり好ましくないと以前習ったため、レポートの多くが引用になるときっかけではないと考えられる。実際に先生がきっかけと感ずるのはどこまでの範囲か教えていただきたい。

コメント [y76]: 大部分のウェブページは単に読むだけにして引用はしない、ということです。引用してよいのは、学術論文や統計にもとづくデータなどだけです。

前回の講義でコピペと引用の違いや小論文と論文の違いについて確認した。論文やレポートとは立場の違う複数の情報源を調べ、「論じるべきこと」「問う価値のある問い」をつかみ、自分の意見を正しいものとして主張し、その理由や具体的な根拠として文献などを引用することを学んだ。語尾に「思う」や「考える」を書くことを避け、断言する。そのためには、自分なりの主張や理解ではなく誰にでもわかるような客観的であり、説得力があるような理由や根拠を提示する必要がある。また、「いろいろ」や「さまざま」や「何となく」「聞いたことがある、言われている」なども書いてはならない。

自分は無意識によく使ってしまうが、これらは客観的にみても分かりにくく、すべてにおいて曖昧である。自分がそれを見て、何を思い、何を感じたかを具体的に書かないと説得力のあるレポートと言うには程遠い。なら説得力のあるレポートを書くにはたくさんの本やウェブを引用すれば良いかというそうではない。本の選び方については、出版年が最近のものであるものや社会的に定評のある文献などを優先させるべきである。ウェブは手軽に知りたい情報が手に入り、利便性があり、重宝するものであるのは事実だが、誰にでも自由に書き込むことが出来るという面もあるのでそれは本当に正しい情報かどうかを慎重に吟味するという情報リテラシーを身につけないといけない。

コメント [y77]: これは学生のコメント。

これらはより良いレポートを書くためには必ず知っておかないといけないことであり、気をつけるべきことである。ひとつの情報に頼らず、幅広く知識を増やし、慎重に情報を抜き出さないといけない。

コメント [y78]: 具体的にどのようにすればよいのか説明しました。

「思う」を書いた場合は消して根拠のある理由を書き、接続詞を上手く使用して具体的な内容の文を書くようにすることが書き方の要点である。また、ウェブを~~の~~利用して調べ

る場合は、ウェブには信用できない情報で溢れているため出典や制作者を検索して確実な情報かを確かめ、統計データや論文を参照することが重要である。

ウィキペディアに書かれていることはすべて正しいものと信用していたが、誰が書いたか分からないことは必ずしも信用できるわけではないため慎重に扱う必要がある。レポートなどを書く際は自分の言っていることが断定できるように多くの情報を集めて真偽を確かめてから利用することが大切である。

今回の授業も前回に引き続きレポートの書き方についての内容でしたが、要点は「レポートは感想ではないので明確な根拠と意見を述べなければならない」というところでした。

大学生になるまでレポートを書いたことはなかったので、今年大学に入学してから課題として出されたいくつかの短いレポートにも「__だと思った」「__したいと考える」というようなただの感想文を提出してしまっています。書きながらこれはよくないなと思っていましたが、どのように改善すればよいかもわからなかったため考えないようにしていました。

しかし今回の授業で、「__だと思う、と感想として書いてしまうのは断言するための理由を用意していないからだ」と言われ大変納得できました。高校までの小論文は調べずにその場で書いてきた理由を用意してくるという発想がありませんでした。

また、一つのタイトルについて賛成なのか反対なのか、単に自分がそうだと思った方を書くのではなく、両方のメリットデメリット、根拠などを集めてから客観的に納得される方を書くのがレポートだということも初めて学びました。

今回の授業を聞いて、今までよりはレポートの書き方がわかってきましたが、ルールを聞くほど難しいなと思ってしまいます。今も書き方が浮かばなくて思うと書いてしまいました。まずは語彙力の強化と、たくさんレポートを書き続けてルールに慣れなければいけないかもしれません。少し先にある文字数が多いレポートの提出には、もっと上手にレポートが書けるように頑張ります。(決意表明)

がんばってください。

論文を書くときは、「いろいろ」「ある程度は」「考えさせられた」「聞いたことがある」などの言葉は使ってはならない。例えば、「考えさせられた」という言葉は、何を考えたのが具体的に分からない。よって論文を書くときは、上記のような言葉を使って曖昧な表現にするのではなく、具体的に書くことが重要である。また、「例えば」「つまり」「それゆえ」「しかし」などの接続詞は、文章を短く切って次につなげるために必ず使わなくてはな

らない。

また、ウェブには嘘がいっぱいあるため、信用できる情報を見分けなくてはならない。まず出典表示が書かれていない情報は信用できない。だからといって製作者の所にペンネームを書いているのは、匿名を書いているのと同じである。そのため、出典表示が書かれていたとしても、その出典表示が正しいのかウェブで調べなければならない。したがって、ウェブを使うときには出典を明確にして、正しい情報と正しくない情報を自分で見極めなければならない。

レポートを書く際は引用をした後に「。」をつけなければならない。なぜなら、引用部分と出所表示の間につけてしまうと、まとまりが分からなくなり、読みづらくなるからだ。根拠があって正しい意見は断定して書く。「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「考えさせられた」などの言い回しは具体的でないので使用してはいけない。また、「聞いたことがある」「言われている」と書くときは記憶も情報源も曖昧なので使用してはいけない。文章を書くのが苦手というのは、具体的に書いていないだけである。メモを見返して文章を構成するのは誰でもやればできる。起(テーマを書く)承(テーマに関連する具体例)転(反対意見の検討)結(結論・まとめ)の構成を立てる。そして、一文が長いと読みにくく、論理的でないので、「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などの接続詞を用いて一文を長すぎないようにする。

本を選ぶときはなるべく新しい本を選ぶ。定評のある文献や古典的文献を読んだり、先生に聞いたりするのも良い。

ウェブで資料を探す際はペンネームが本名であることを確認する。しかし、ただの目立ちがりの可能性もあるので著作者の名前を検索してみることも必要である。まともなページには文献がついているものなので、出典が書かれていないものは信用できない。また、出典があれば出典のほうを参照する。

データを調べるときは政府や調査機関が行っている統計データを参照する。

今回の講義のテーマは、文章の構成の仕方と、ウェブページの活用方法を学ぶことである。

まず書いてはいけない言葉の代表例として、「思う」という言葉がある。これを使うと根拠や理由なしで主張できていると錯覚してしまう。そう書くのではなく、根拠や理由を考えて書くべきである。

また、文章は具体的に書くようにし、単なる感想にならないように気をつけ、箇条書き

コメント [y79]: カギカッコの外に、です。次の文との切れ目がはっきり分かるように、次の文の直前に。を打つ、と考えると分かりやすいかもしれません。

にならないように接続詞でつなぐことが大切だ。そうすることで読みやすく、説得力のある文章に仕上がるのだ。

次にウェブページの活用方法として、匿名のウェブページは信用せず、出典を調べる必要がある。ウェブページはあくまで「きっかけ」として利用するのが理想的だ。

信用できる記述として、学術雑誌に掲載された学術論文や、政府や調査機関が行なっている統計データがある。これらを参照すると正しいデータが得られる。

今までの講義を通して、自分の書いた論文やレポートが意図せずして過去に膨大な数の学者や学生が製作した論文やレポートと内容が被ってしまうことはないのだろうか、と疑問を抱いた。

長文になればなるほど内容の多くが被る可能性は限りなく低くなると思うが、ゼロではないはずである。

もちろんそうならないために「引用」しなければならないのだが、もし過去に同じ内容の文献が発表されていることに気づかなかつたらそれもパクリとして扱われるのだろうか。

自分が製作しようとした内容の論文やレポートと同じようなものがないか調べることが必要であるため、論文やレポートを作ることはとても大変な作業である。

今回の授業ではレポートや論文の書き方とウェブの利用について学んだ。まず、書き方の話では、書かなければいけない接続詞として「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」があるということが要点である。これまでに実際自分が書いた授業コメントを見てみると、今回の授業で聞いた接続詞は使用しておらず、文章も短く切れていなかった。自分が書いていたコメントがうまくまとめられていない原因がはっきり分かった。今まで自分は接続詞というものは重要なものと考えてこなかったが接続詞を用いることで起承転結とまとめることが出来ると今回の授業で理解できた。

次に、ウェブの話では「出典の書かれていない情報は信用しない」「出典が書かれていたら出典の方を参照にする」ということが要点である。論文やレポートを書く際には、引用が必ず必要になる。そして、引用した場合にはその出典を書く必要がある。しかし、引用をした物に出典がない場合それは引用してはいけない。なぜなら、その情報が本当に正しいかどうかかわからず信用することが出来ないからである。つまり、必ず出典が明記されているものを引用しなければならない。そして、引用したものに出版が書かれていたら出版の方を参照にすべきである。出版を元にして、自分が引用したいと思った部分を制作者の人が書いているのであるから、出版の方を見ることで自分が知りたい情報などを得るきっかけになるだろう。

引用 [山口裕之「SIH 道場総合科学入門講座 学術的発想と書き方 2」](http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/scienceandhumanity/2018/20180427_IAS)
http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/shin-kokusai/scienceandhumanity/2018/20180427_IAS

コメント [y80]: 内容も表現も全く同じなら疑われるでしょうが、そういうことはまずありません。杞憂を抱くよりは練習しましょう。

コメント [y81]: 大変な作業だからこそやりがいがあるのです。

コメント [y82]: 授業の復習コメントなので、授業スライドを出典として示す必要はありません。

レポートを書く上で、自分の考えを述べる時に理由や根拠は必須である。そして、その理由や根拠となる部分に「引用」する情報の正しき及び信憑性をとことん突き詰めることが重要となってくる。自分の意見を作るのに多くの情報を調べたとしても、間違っただけの情報を基にしてしまっただけでは、正しい知識を積んだとも言えないし客観的に根拠づけられている意見とも言えないからである。

しかし、ウェブには思った以上に間違っただけの情報が多くある。そこでウェブの利用において、質の高い情報を得るために、ウェブの製作者・出典は必ず確認すべきである。また出典が書いてある場合、その出典の方を参照する。レポートで「出所表記」を示すのは前提として、以上の確認を済ませ、本当に信用できる情報を探れるようにすることがこれからの課題である。そして、政府や調査機関が行っている統計データ、あるいは新聞記事のデータベースは、正確な調査結果が示されているため参考資料に適している。論文では学術論文や学術雑誌に掲載された論文が信用できる情報である。ウェブ上ではこれらの正しい情報源をたどり、間違っただけの情報の修正を自分で判断してできるような力をつけるべきだ。

もしこのように情報を深く調べなかった場合、レポートに意見を書き出す時、論理的な文章が書けなくなる。例えば、「思う」「考える」「感じる」などの表現は、その意見について具体的に調べないためにおこる。これは根拠がはっきりとしない誤魔化しの言葉となるため、使ってはならない。付け加えて「聞いたことがある」「言われている」などの受身形は、断定を避ける言い回しとして使ってしまうがちだが、主語が曖昧となり誰の意見かが分からない。そのためしっかりと出典を書くように気を付けるべきだ。正しい情報を探ったところでようやく根拠づけられた文章が書けるのである。

また文章の構成として大切なことが他にある。接続詞を上手く使い、短い文で読みやすいものにする事だ。そこで起承転結のパターンを使う。「起」のところでテーマを述べ、「承」のところで「たとえば」などと書き、テーマに関する具体例を述べて主題を展開する。「転」では逆説の接続詞を入れ、反対意見を取り上げて主題を違った角度から見る。最後に「結」で「つまり」などとして具体的な結論を書き出す。そうすることで、複雑な文の構成となりにくく、一つの意見としてまとまりができる。

こういった正しい情報の探り方、文章の書き方に気を付けることで、より具体性が深まり「客観的に見て正しい」と言えるレポートが作れるのである。また、レポートを書く中で身につける力は社会に出た時にも大きく影響を及ぼす。自分の意見にしっかりと理由や根拠があることで、他人に意見を伝える自己主張ができるのだ。大学ではレポートを書く機会が増えるが、このように社会に対応した力をつける良い機会として捉えてこれから取り組むべきだ。

内容はよくまとまっています。あとは実践練習です。がんばってください。

今回の授業では、レポートの書き方、出典、ウェブの利用の仕方について学んだ。

まず、レポートでは「いろいろ」「さまざま」などの抽象的な言葉は使わず、具体的に書かなければいけない。また、「思う」「考える」は自分の主張に自信が無いから使うのであって、十分な根拠を調べ上げれば、自ずと使わなくなる。

また、出典には著者の詳細が書かれている物が信用性が高いことも学んだ。

レポートを書くと言われて、も何から手をつけていいかわからなかった私にはこの 3 時間の授業はとても有意義だった。

前回の講義の振り返り

コピーとは出典を示さないものであり、引用とは出典表示や明瞭区分性、主従関係がなされているものである。このように、引用して根拠をのべるレポートなどには「思う」「考える」は使わず「~である」と書き、自分の意見を書くのが適切である。

本の選び方

レポートにおける参考文書を選ぶ場合は出版年が最近のものを選べば良いというわけではなく、まずは概説書を読み、その分野における「定評のある文献や古典的文献」がどのような文献かを知り、まずはそれらを読むのが良い。

書いてはならない言葉と書かなければいけない言葉

書いてはいけない魔法の言葉の例として挙げるなら「それはよくないと思う」である。「思う」は書くとき理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまう。そして、「それはよくない!」と言い切ったら収まりが悪い気がしてしまう。もし「思う」と書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考える。感想なども評価できないため具体的な根拠に元づく意見のべる。そして、書かなければいけない言葉は「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」などの接続詞である。たとえば、起承転結の起でテーマを書き、承で「たとえば」とテーマに関連する具体例を挙げる。そして、転で「しかし」と反対の事例を取り上げて検討し、結で「それゆえ」と結論を導き「つまり」と最後のまとめをする。

ウェブページの引用

ウェブページなどは誰でも書き込めるがゆえに信頼性のある情報は少ない。よってあまり活用すべきではない。しかし、どうしても使いたい場合はそのウェブページの信用性をみきわめる必要がある。そのみきわめ方として、まず出典の書かれていない情報は信用しないこと、そして制作者の名前が記載されていないページも信用に足らない(ただし、実名

を調べるときには、政府や調査機関の統計データ、新聞記事のデータベース、「信用できる論文」として「学術論文」や「学術雑誌」の論文を利用することだ。論文の検索では「CiNii」、欧文雑誌論文の検索では「Google Scholar」の利用がおすすめだ。

毎週、学んだポイントに気を付けて、レポートにて調べたり主張を書いたりしていると、前までは1つのサイトで済ませていたことが、1つのサイトで満足せず、サイトの制作者や出典も意識するようになった。また普段、新聞の読者の声欄や、他の学生の文章を読むとき、書き手がどれだけ根拠をもって主張文を書いているのかや、書き手の曖昧な表現に注意して読むようになった。今回の講義で例にあったように、仮に「きっかけ」として企業の文献を読むときでも、一つの見方で判断しないためにも、複数の文献を読むことは大切である。

内容はよくまとまっています。普段から意識して他の人が書いた文章を読むようになったことで、期待しています。

今日の講義で今までの文章の書き方、ウェブの利用の仕方を振り返ることができた。私は「いろいろ、さまざま」といった抽象的な言葉を使って文章を書きごまかしてしまうことがよくある。しかし、それでは抽象的で読み手に伝わらず、大学で書く論文、レポートは通用しない。だからそれらを書かず、その「いろいろ、さまざま」の内容を具体的に書くことが大切である。また、接続詞の「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を自分では使っているつもりでも上手く使えておらず、読み手に伝わりにくい。文章をわかりやすくするためにも接続詞を使い文章を構成することも大切である。

今までウェブを使う時、Wikipedia や Yahoo 知恵袋の情報の信頼性が低いことをわかっていたが使ってしまった。しかし、それではいけないことが今回の講義を受けて理解した。そのため、出典の書かれていない情報を信用せず、信用できる情報を得て、引用することが大切である。そのためには信用できるかどうかという見分ける力も必要だ。私はまだその力は身につけることができていないため、匿名のウェブページは信用しないこと、複数読むことを心がけていくことから始めることにする。

今回の講義は、大きく三つの大事なことが言われました。一つ目には杞憂は無駄であること。二つ目には「思う」は禁句であること。三つ目にはウェブの情報は主にきっかけとして利用するものであってネットの情報より論文や新聞などを引用先として利用したほうがよいということです。

なので自分はなぜ引用がいけないのかを分かりやすく解釈をしたいがために例を考えて

みました。例えばですが、山口先生が僕の隣に座っている子にこの問題に対して自分の考えを述べてみよと指名したときに僕は優しいので自分なりの見解を隣の子に聞こえるようにささやきます。隣の子はとても慌てていたので僕の見解をそのまま声を大にして先生に発表しました。先生はその意見にとっても興味を持ってその子を気に入るようになりました。隣にいた子は僕の意見であることを隠して先生に気に入られるようになりました。自分の財産である知識を他人に譲ってしまったがために自分に入るはずだった利益はうばわれてしまいました。

この**実体験例**を打ちながら**打ちながら**、この例は**引用に関してふさわしくない**のではないかと考えました。それは、自らが相手に対して無断でこの情報を利用していいよと言わんばかりに何の条件もなしに情報開示をしている点です。なので僕は自分の見解を述べる前に知的財産権関連の許諾契約書などを用意しておけば少しは引用に対する例示に一步近づいたと思います。隣の子がたとえ威張っていたとしても自分が「この見解は私のものです。」と許諾契約書とともに見せられるからです。その素晴らしい意見はこの僕から引用しましたという部分が**いい例示**になっているからです。

コメント [y83]: 口頭で示唆を受けた場合には、「〇〇氏にご教示いただいた」などと書くことで、もともと誰の意見なのかを示すようにします。

今日の授業では、**2つのことを学んだ**。

1つ目は、はっきりと自信をもって書けることしかレポートに書かないことが大切だということだ。これまでの授業で、「思う」「考える」などの遠回しな言い方はしてはいけないということを学んできたが、どうしても「思う」「考える」を使ってしまいそうで不安だった。しかし、**自信があること**を言うときに「思う」という表現はたしかにしない。今日の授業で、ようやく今までの不安が解消された。

コメント [y84]: 自信を持つためには、徹底的に調べることが必要です。

2つ目は、匿名や出典の書かれていない情報は信用してはならないということだ。私は、「ウィキペディアは誰でも書いて編集できるもの」だから、これまでの調べ学習でウィキペディアを使用することを勧められなかった。しかし、ほかのネット情報にも匿名であったり、出典が書かれていなかったりするものはたくさんあったはずだ。しかし、私はウィキペディアを使わなければ、他は何でも使っていいと考えていたため、制作者名や出典を見たことはなかった。これからは、制作者名や出典を調べ、信用できる情報を自信を持って書けるようにする。また、統計データや新聞記事のデータが良いと知ったため、それらのデータも使用したい。

「思う」ではなく、「なぜそう考えたのか理由を書く」、文章や技術の出典を明らかにし漠然としたものではなく、具体的な意見や構想を書き上げるのが良いと言うことを学んだ。

しかし、私は「ウィキペディアを信頼できる情報源として用いてはいけない」というところにやや違和感を感じた。

ウィキペディアは不特定多数が編集、添削できるものであるため書いてあるものをそのまま鵜呑みにするのは大きな間違いであるというのはわかる。

しかし、不特定多数が見ているということで「情報の洗練」というのが行われる可能性もある。新たな発見により変化した定説などに柔軟に対応できるというのは良いところである。

もちろんウィキペディアの中の情報は玉石混合であり、レポートや論文に丸々使用するのには言語道断であることに変わりはないが、「一概に全ての使用を禁止してしまう」というのは少し勿体無いのではないだろうか。根拠となる出来事のあらましを調べたり、ちよつとしたエピソードを知るためにウィキを活用するのはむしろ良いことではないだろうか。

コメント [y85]: 授業では、「ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい」と言いました。

コメント [y86]: そう主張する根拠を示してください。

今日の授業で、本の選び方は、まず概説書を読んで、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を読んだり、先生に聞いたりするのが適切である。また、理由や根拠を書かずにごまかしてしまうから「思う」と書いてはいけない。そして、ウェブページの制作者はもう一度検索しなおす必要がある。ということを学んだ。

私は参考文献を探るとき、いつも新しいものから探していて、概説書を読んだり、引用した文献の引用や参考文献を確認したりすることはしていなかった。また、レポートを書くとき、どうしても「思う」という言葉を使ってしまう。「選択したテーマともっとも関連の深い基本文献を見つけて精読し、その引用・参考文献にでてくる文献や資料を集める。」（**関西大学 商学部、論文の書き方ガイド**、http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_com/pdf/H27_kakikata.pdf、4月30日）。「ニュートラルな文体で書くための、大事な点は、できるだけ、『私』を文章中に出さない工夫です。『...だと思ふ。』の表現を使うと、『私』が露骨にでてしまいます。」（金沢大学、レポート作成の手引き、<https://www.kanazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/01/tebiki2.pdf>、4月30日）。

コメント [y87]: せっかく徳島大学総合科学部で『コピペと言われないレポートの書き方』を購入したので、他大学のウェブ情報でなく、そちらもしっかり読みましょう。

よって、参考文献を選ぶときは、新しいものだけでなく、定評のある文献や古典的文献を見る。そして、参考文献の引用・参考文献も集めて確認することが必要である。また、レポートを書くときは、文章中に「私」を出さないようにするために「...だと思ふ。」をつかってはいけない。

「たとえば」、「しかし」、「それゆえ」、「つまり」の接続詞を基本的に使い、起承転結で書く。反対に、「さて」や「ところで」を使うと接続詞が多くなってしまつて何を言いたい

のわからなくなってしまうので使わない。「いろいろ」や「ある程度」などの情報があやふやな言葉も使わない。

情報を得る時に、製作者がきちんと書いてあるものから引用していく。「ウィキペディア」や「Yahoo 知恵袋」は誰でも書き込みができるため出所表記がない。したがって出所表記がないものは誰の情報かわからないので引用には使わない。また、出所表記をしていたとしても、専門知識のない人が書いたものかもしれないので、書いた人の名前をウェブ検索して、その人がどんな人なのかを調べる。信用する順としては、出典が書かれているものから引用する。だからといって、「ウィキペディア」や「Yahoo 知恵袋」を利用してはいけないのではなく、より多くの情報を集めるためのきっかけとして使う。

「学術論文」、「学術雑誌」に記載されている論文は信用できる論文である。日本の論文を調べたいときは『CiNii』を利用し、欧文雑誌論文を調べたいときは『Google Scholar』を利用する。

今回の講義の目的は2つあった。まず1つ目は「文章の構成の仕方」である。「思う」「考える」などの言葉は使わずに理由や根拠を具体的に書くようにする。受身表現も良くない。文章は短く切り、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つを基本とする接続詞でつなく。2つ目は「ウェブページの活用方法」である。匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は信用せずに、制作者の名前を検索したり、出典が書かれていたら、その出典の方を参照する。ウェブ情報はきっかけとして利用し、詳しく調べたいのなら統計データや論文を探す。

【授業内容】

文章は起承転結をしっかりとすることが大切である。起はテーマ、承は例など、転は逆接など、結は結論である。これらやひとつひとつの文を繋ぐ接続詞も適切に使わなければならない。

文章を作るための情報を得ようとする際、インターネットを用いることもあるかもしれないが、そこには嘘が多く含まれている。何故なら発信者は匿名であるなどのことから嘘への責任が問われにくいからだ。また、企業のHPは自社の製品などの宣伝のために客観的に正しいと言えないことを書くこともある。内容が信用できるものかどうかの判定のために、出典があるか、独自研究でないかを確かめ、出典があった場合その参照をすべきだが、それでも間違っていることもあるので、基本的にはウェブでの情報は調べるきっかけとしての利用が好ましい。

他に調べる元として新聞記事があるが、これも無条件に信じてはならない。データなどが記載されている場合、それが正しいかどうか政府や調査機関などによるデータベースで調べてみるべきだ。

情報源として論文は比較的信用できるものであるので積極的に活用すべきだが、それが載っている雑誌にも信用度などの差があるのでそれも考慮した方がよい。

結局のところよりよい論文を作ろうとするなら複数のものを調べることは必須である。

【質問・意見など】

様々な意見・情報などを取り入れることが大事なのはわかったが、様々な対立意見を取り入れ、どちらの側をとるか迷った場合どうすればいいのか。

【質問・意見などをした理由】

たくさんの情報からどれが正しいか取捨選択することは論文作成だけでなく現代社会の日常においても必要な能力だから。

【自分なりの解答】

こればかりは自分で一通り読み通した上での自己判断に任せるしかないのではないだろうか。

コメント [y88]: どちらが正しいか分かるまで調べ続けることです。杞憂を抱くよりは練習しましょう。

今回の授業では前回に引き続きレポートの書き方、そしてウェブ情報の使い方について学んだ。何度も言われている「思う、考える」という言葉は確かに収まりが良く理由や根拠をはっきりしていなくても使うことができる。しかしそれは裏を返せば自分が正しい判断だと言えるほど多くの情報に触れておらず、その意見に不安があるからだ。そうならないためには正しい判断であると言えるだけの根拠を調べる。そうすることで多くの情報を単なる知識として蓄積するのではなく比較による矛盾から「問うべき問い」をつかむことができる。論文を書くときはとにかく根拠を示し考えを具体的に書くことが必要。「いろいろ」や「何となく」などの曖昧な言葉や「聞いたことがある」といった情報源のはっきりしないもの、単なる感想は書いてはいけない。また文章は短く切って「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」といった接続詞でつなぐ。ダラダラと句点でつないだ長い文章や箇条書きはしない。

参考文献については新しものが良いとは限らないので、まずその分野の「定評のある文献」や「古典的文献」を読んでみる。ウェブページではそれが信用できるのかを確認する必要がある。引用をする際にも必要な製作者名が匿名やペンネームを使っているものは要注意。また出典が書かれていないものは信用度が低い。製作者の名前をネットで検索したり出典が書かれているものはその出典の方を参照するなどウェブ情報はきっかけとして利用するのが望ましい。データを調べる時は政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースなどを参照する。言葉だけの記事よりも統計を基にしたデータの方が

信用できる場合がある。

「学術雑誌」に掲載されている「学術論文」は現代社会において信頼性が高いと言われている。雑誌論文は CiNii というサイトから検索できるが、いつでも読める利便性や書き込みができるという点からも自分で買うことが望ましい。また最近では英語論文の質が高まっており、日本語よりも多くの情報が手に入る。

今後私たちが情報収集をする中で本、新聞、ウェブに関わらず信用のできる情報の判別、選択をする機会が多くある。論文を書くだけでなく、そこに至るために信用できる情報を判断することも反復しながら身に着ける必要がある。

今回の講義の要点は2つある。

一つ目は、文章構成の仕方である。ここでは、論文・レポートに不要な言葉と必要な接続詞について学んだ。不要な言葉には、「思う」「考える」「感じる」「印象をもった」がある。これらの言葉を書くと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるからだ。前回の講義でも教わったように、「思い」は「考えの『正しさの根拠』」ではない。

また、主語をはっきりさせたり、考えたことや理解したことを具体的に書いたりする必要がある。さらに、短い文章を「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の接続詞でつなぐことで、文と文の関係がよくわかる読みやすい文章となる。

私が学校で先生に文章を添削していただいたとき、一文が長いと指摘された。一文が長いと読みにくく、意味を理解しにくいとのことだった。確かに「～で、・・・の、～」と続けると、主語や因果関係がわかりにくくなり、読みにくい。また自分の意見を他の人に伝えるには、わかりやすくしなければならない。読みやすくわかりやすいものでなければ、そもそも読み手は読もうと思わないだろう。読み手に読んで理解してもらわなければ論文・レポートの意味がない。意味を持たせるには、まず短い文章を接続詞でつないだ読みやすい文章を書く必要がある。そのために、今回の講義で先生が言っていたような、一文書いた後に何の接続詞がくるか考える、という練習が有効だろう。

二つ目は、ウェブページの活用方法である。出典の書かれている情報を信用し、ウェブ情報はきっかけとして利用する。またウェブ情報は、データを調べたり学術論文を検索したりすることに使うのが良い。ここで、ウェブページのみを見てその情報を鵜呑みにしてはいけない。その情報をもとに、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベース、学術論文を自分で調べたものを扱う必要がある。調べてみると、ウェブページの情報と実際のデータが異なることに気づく。それゆえに、自分で調べ、複数のデータや学術論文を読むことが重要だ。

コメント [y89]: 文章が読みにくいということは、読み手だけでなく、書いている自分自身が一体何を考えているのか自分でよく分かっていないということです。

今回の講義では、ウェブの利用方法について学んだ。どのウェブが信用できるのかの見分け方から出典の有無の違いについて詳しく知ることができた。特に、制作者名が書かれているかいないかで判断し、書かれている場合は製作者を調べればよいということを知れてよかった。このことは、論文やレポートを書くにあたり、正しい情報を得るために必要不可欠なものである。自分が決定したテーマに関して、そのテーマについての自分の意見を裏付ける根拠となるものを記すことは、論文を完成させるのになくしてはならないものだからだ。大学 4 年間でレポートや論文を書く機会は多くあるので、これから活用していきたい。

今回の授業では、句読点とかぎかっこの使い方や、接続詞の解説を受けた。前は思う、考える、感じるといった言葉を使わないよう言われたが、今回はさらに詳しく、曖昧な表現や根拠のない感想の言葉もレポートには使ってはならないと指示された。

さらに、ウェブ情報の利用方法にも注意点がある。前回の要点として、正しく引用することがあったが、加えて信用できる情報を見極めなければならない。

信用できる情報を見極めるために、まずはウェブページの制作者が信用できる人物であるか判断することだ。制作者の名前をウェブページで検索すると、その人物について調べることができる。

次に、インターネット上にある情報の中でも、出典の書かれていない情報を信用しないことだ。もし出典が書かれている場合は、その出典を参照することでより信用できる情報を得ることができる。

最後に、ウェブ情報はあくまでもきっかけとして利用することだ。最終的には学術論文や統計データを利用することがレポートを書くのに必要な正しい情報を得るために必要である。

今日の授業のテーマは、学術的発想と書き方であった。「思う」を使わずに理由や根拠を書き、「いろいろ」や「ある程度」、「聞いたことがある」などの曖昧な言葉ではなく、誰が言っているのか主語をはっきり示して、具体的に書くことが大切。そして、ウェブの情報が信頼できるかどうか確認するには、まず製作者を確認し、出典が書かれているかを調べる。出典が書かれている場合、その出典の方を参照する。また、企業の HP は基本的に広告なので、政府や調査機関の統計データ、新聞記事のデータベース、学術論文を調べるとよいということであった。

論文やレポートは、自分の意見を正しいものとするために客観的な理由や根拠があることが重要である。その理由や根拠は信用できる情報をもとにするが、コピペではなく引用することが大切だとこれまでの授業でやってきた。コピペは不正行為であるが、「解説論文、論文投稿に関わる剽窃等の問題についての考察」によると、不正行為には手段の面と目的の面の両方から捉える必要があるもので、

「1 作家等が自分の作品の質を上げるため、他人の文章の一部を利用する。 2 学生等がレポートを簡単に仕上げるため、意図的にネットワークで得られた他人の文章をコピー&ペーストして使用する。 3 研究者が他人の研究内容を盗用、剽窃する。 4 研究者が同一内容の論文を複数投稿する、いわゆる二重投稿。 5 研究者が研究内容をねつ造する」（酒井義則、鶴原稔也、『解説論文 論文投稿に関わる剽窃等の問題についての考察』、https://www.jstage.jst.go.jp/article/essfr/5/3/5_3_239/_pdf、閲覧日時 2018 年 4 月 30 日）。私にとって今現在大学生の身分であるので、2 のことが該当するが、これは授業でやったとおりにきちんと引用すれば不正行為にはならない。研究論文のなかには、ほとんど引用というものもあり、

「過去の研究論文結果を集約する、単純な分量的にはかなりの部分が『コピペ』で構成されるメタアナリシス(meta-analysis)という研究手法の論文があります。膨大な量の過去の研究結果を紹介し、まとめ上げ、時には統計手法でデータを集約し新しい結論、知見を導き出す集大成的な研究手法です。自分で実験や調査はしません。つまり、『コピペ』と分析解釈だけです。よくできたメタアナリシスは画期的な発見、素晴らしい学術理論を導き出したりもします。文字数的には論文の 9 割は『コピペ』でも、学術分野の金字塔的な論文さえあります」（井上泰浩、『「正しいコピペ」 科学者にとってモラルではなく厳格な戒律』、http://www.huffingtonpost.jp/yasuhiro-inoue/copy-and-paste_b_4968985.html、閲覧日時 2018 年 4 月 30 日）。引用は、自分の意見の正しさの根拠となるものであり、複数の情報から自分で考察し、どの情報を引用するのかを決めることが重要だ。

今回の講義の内容は以前の課題に対する生徒のコメントを例としながらレポート、論文を書く際の注意点や、文献を引用する方法、論文などをインターネットを利用してどのように探すかなどを学んだ。

論文、レポートの基本構成は「起承転結」であり、この中でもっとも書きにくいのは反対意見を書くことの多い「転」の部分だ。自分の考えとは反対の視点に立ち、改めて議論する問題を見直す必要がある。そのため、自分の中の固定概念が残ったままだとしっかりとした反対意見を書くことはできない。前々回の講義でもあったが、物事を多面的にとらえる力を鍛えなければこの「転」を書くことに非常に苦労する。そのためにはやはりより多くの文献を読んで自分の中に知識として蓄える必要がある。

コメント [y90]: どうして必要があるのか、「手段」と「目的」とは具体的にはどういうことなのか、引用文だけからは分かりません。酒井さんらの論文を引用することで、どのようなことを主張したいのか、よくわかりませんでした（=主従関係に問題がある）。

コメント [y91]: 井上さんの論文は、「メタアナリシス」という研究方法について述べています。「引用は、自分の意見の正しさの根拠となる」ということを述べているわけではありません。

「意識的に自分の意見の反対は何かを考え、実はそちらのほうが正しいのではないかと調べてみる」(山口裕之、2017、p52)。~~ことが~~レポートや論文で意見を述べる際にはとても大切になってくる。自分の論文を見るのは自分の意見に賛同してくれる人だけとは限らない。自分とは違った意見を持つ人も読んだとき、その人にもわかってもらえるように書かななくてはならない。一方的な意見だけを書いてしまつては一部の人にしか伝わることのない論文になってしまう。

これに反するのが「コピペ」という行為である。ある課題に対しての正解を検索し、そこに書かれていることを自分の意見かのように書く。それではどう元の文章を改ざんしたところでそれは他人の意見でしかない。誰もがインターネットを気軽に使うことができるようになり、どんな情報も簡単に解決するようになった。しかし、それは「自分自身で考える機会が減った」ということでもある。気になって、検索して、トップに出てきたサイトに書き込みをしている人はその分野に詳しく、本当のことを書いてくれているかもしれないし、実はその分野に対する知識もあまりないのにも関わらず偏ったことを書いている一般人かもしれないのだ。「自分の意見を根拠づけて主張する。これこそが現代の日本において最も必要なはずなのに多くの人が身に着けていないスキル」(山口裕之、2017、p93)である。

グローバル化が進み、世界中の人とかかわることは避けては通れない。世界中すべての人が自分の意見に賛同してくれるとは限らない。すべての問題には2通り以上の考えがあるとも言っている。そんな現代社会において、自分の意見を根拠づけて説明できることは、どんな職種の仕事に就いたとしても必要とされるスキルである。これから先、さらなるグローバル化が進んでいくため、私たち日本国民の**仕事はもちろん、文化などを守っていくためにもこのスキルの必要性は高まっている。**

参考文献一覧

山口裕之、『コピペと言われないレポートの書き方』、新曜社、2017、~~p52~~

~~山口裕之、『コピペと言われないレポートの書き方』、新曜社、2017、p93~~

レポートの参考文献では確かな情報であるものや鮮度の高い情報に優先順位を置くべきだが、新しいほうが良いとは限らない。そのためまずは概説書を読んでその分野の定評のある文献や古典的文献を読むとよい。本の奥付を読みその人がどのような人なのか確認する。信用できる記述は学術論文である。レポートを書くときは文章を短く切って、「たとえば、しかし、それゆえ。つまり」の4つの接続詞を使う。話題の転換の接続詞「また、ところで、さて」はレポートでは長くなりすぎるので使わない。

ネットにはだれが書いたか分からない信用できない情報がたくさんある。そのためウェ

コメント [y92]: 具体的にどのような場面が念頭にあるのですか？

コメント [y93]: 文献表にはページ数を示す必要はありません。

ブの制作者の名前を検索し、信用できるか吟味する。ウェブ情報はきっかけとして利用し、出典の書かれていない情報は信用しない。情報を集めるときは政府や調査機関が行っている統計データ、新聞記事のデータベースを利用する。

ウェブには信用できない情報があるということを常に考えながら情報を集めたい。そして最初は難しそうだと思っていたが情報の幅が広がるので英語の論文も読んでいきたい。

決意表明、しかと承りましたので、実行してください。

大学で論文やレポートを書く際、「～と思う」や、「～と知って驚いた」などの表現を用いてはならない。単なる個人的な感想になってしまうからだ。また、「いろいろ」や「さまざま」などの表現も具体的な根拠に欠けるため使ってはならない。誰が読んでも納得でき誤解を招かないようにする必要がある。そのために自分の意見をだらだらと書くのではなく、的確な接続詞を用い主語を明確にする必要がある。

また引用する際は制作者が明らかである情報を引用しなければならない。さらにその人物が単なる目立ちたがり屋ではない、信用できる人物であるかを検索して確かめることも必要である。このように自分の書いた文章には謝った誤った情報がないということに責任を持たなければならない。1つの情報を正しいと思い込むのではなく、より多くの情報を集めることでより正確な情報を追究する必要がある。

出典が書かれていないが興味深い情報を見つけた場合は、それを根拠づけるような情報源をさらに探すと良いということを学んだ。その時に、政府や調査機関が行っている統計データを参考にすると欲しい情報が見つかりやすい。そこで、実際に政府の統計データを利用してみた。講義では「近年の少年犯罪件数」について取り上げられていたが、私は「近年の全国の自殺者数」について調べてみたところ、「平成 30 年の 3 月までの全国の自殺者数の総数 5143 件のうち男が 3612 件、女が 1531 件である」と記載されており、**男が全体の 7 割**を占めていることが分かった。(警察庁「平成 30 年の月別の自殺者数について」、https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H30/3003jisatu_zantei.pdf, 2018 年 4 月 30 日アクセス)

本の選び方は、まずは概説書を読んでその分野における「定評のある文献、古典的文献」がどのような文献であるかを知る。次に信頼のある情報が書かれているかの判断は、本の最後のページの著者の情報を見て、自分の専門分野についての研究をしている人かを確認するか、あるいは教員に相談してすると良い。

文章を書くのが苦手な人は、文章を具体的に書かないことが原因になっている。「さまざま

コメント [y94]: この年にたまたまそうだったのかもしれませんが、
実は、一般的に自殺者は男が多いのですが、
その事実からどういうことを主張するか、
が論文にとっては重要です。

「まなことが分かった」の「さまざま」や、「考えさせられた」とは何を考えさせられたのかなど、文の内容を具体的に書くことを心がけることが苦手克服につながるということを学んだ。

今回の講義を通してレポートを作成するときに気をつけなければならないことを学んだ。まず、鮮度の高い文献を優先し、その後概説書を読みその分野の定評のある文献や古典的文献などを芋づる式に遡っていくのがよい。表現においては「思う」は消して理由を明記すること。「いろいろ」などの言葉は具体的に書き換えること。聞いたことがあるなどのあいまいな理由には出典を示すことなどを知った。

また、複数の情報源をもつことでより正確になるとおっしゃっており、私もそう思った。ネットで調べ物をする際は複数のサイトで共通してとりあげられているものを選ぶべきだと。高校の授業で習ったからだ。

コメント [y95]: これは学生のコメント。

今回の講義内容はレポートの書き方についてと、ウェブの活用についてだった。まず、書くということにおいて、「思う」という言葉を消し、根拠のある正しい判断に基づき「である」に変えること、「いろいろ」「さまざま」など抽象的な言葉は具体化すること、出典をしっかりと調べること、接続詞を用いて起承転結を構成することが重要である。ウェブを利用することにおいては、制作者名を検索し、統計データや論文検索をすることが大切である。

ウェブ上で出典が明記されていないものは信用してはならない。また、具体的に示されてある場合でも本当に正しいのかどうか、政府などの出所の確かな機関のデータ資料と照らし合わせたり、論文を検索したりすることが重要である。

「起承転結」がしっかりしたレポートを書くためには、具体例、反論、結論客観的な根拠に基づく理由具体的な結論が必要である。今回の講義で学んだ接続詞をしっかりと活用することが今後のレポートに生かされる。

コメント [y96]: 大学の授業で説明したことは、「複数のサイトで共通して取りあげられているものを選ぶ」ということではありませんでした。しっかり復習しておきましょう。

今回は「文章の構成の仕方について」、「ウェブページの活用方法について」の講義があった。特に、ウェブに書かれていることをそのまま信用するのは良くなく、制作者の名前を検索してみるとということが重要だった。なぜなら、その記事が独自研究だったり、正しい情報源ではなく企業の広告だったりするからだ。たとえば、ウェブの制作者がペンネー

ムや匿名になっている場合がある。そういう情報は、誤った情報が書かれていることがあり信用性が低い。それに対し、実名が書かれているものは信用性が高い。しかし、実名を出している目立ちたがりの人が書いているときもある。なので、実名だからと言って一概に信用できるわけではない。それゆえ、情報の信用性があるか確かめるときは、制作者の名前を検索してみることだ。制作者が信用できる人物だとわかれば、その記事を参照することもできる。ウェブ情報はきっかけとして利用するようにし、データを調べたり、論文を検索するときに活用する。つまり、出典があるものは参照し、制作者の名前検索もした上で信用することが大事なのだ。

根拠がある正しい判断なら、「～である」とする。多様な情報を得ることで「問うべき問い」を見つける。定評のある文献や古典的文献から読み始め、関連のある文献を読んでいく。コピペにならないために、複数の情報源を確認、反対判例の意見を常に探す、「論じるべきこと」を見つける。思うは、根拠や理由が必要なくなるので使わない。文章は具体的に書く。出典を調べる。接続詞「たとえば、しかし、それゆえ」を使い箇条書きしない。信用できる文献、ホームページかは製作者を調べる。政府の統計データを参考にする。

書き出しはどのようにしたらよいか。

レポートにおいて一番難儀するのは、書き出しである。先生の講義をきいても、講演会にでも、具体的な書き出しの書き方は説明されていない。そこで、とりあえず書いてはみるがどうもじっくりこず詰まってしまう。どんな言葉で始めるのか、どういう風に本論に入っていくのか、序論で書くことは決まっていますそれを箇条書きのようにいきなり書き始めてもいいのか、などがわからない。書き出しでそのレポートの方向性が決まり、上手な始まりだとその後が続けやすくなるのでぜひ知りたい。

柔らかな表現から入って、自分の意見に持ち込んでいくのが賢い文章であると予想する。

今回の総合科学入門講座では前回の授業レポートを復習した。前回のレポートのほとんどに「思う」といった言葉が記入されていた。

まず、「思う」といった言葉がレポートの大部分で見られたのは、小中高教育が影響している。その理由は、小中高教育ではレポートではなく感想文を書くため、考えではなく思いを書くため、根拠がなく必然的にも「思う」といった言葉が多くなってしまうのだ。言い換えると、レポートを初めて書く学生が多いため、レポート慣れしていないのだ。

つまり、私たちが正しくレポートを書くためには、信ぴょう性のある文献やインターネット上の記事から、根拠や理由を示すことが必要である。また、自身の書いたレポートを

コメント [y97]: この言葉で始めなさい、といった言葉はありません。『コピペと言われないレポートの書き方』79ページのサンプルや、この宿題一覧で他の人が書いていることを読んで、参考になりそうなものを見つけてください。

コメント [y98]: 授業では、どのようにして信憑性を判断するのか、その方法について説明しました。

添削してもらい、改善していくことも重要である。

今回の授業では、まず本の選び方を学んだ。私は今まで、面白そうな題名や帯、あらすじを読んで選んでいた。しかし正しい選び方はそうではなく、概説書を読み、その分野における定評のある文献や古典的文献を知り、選ぶ事である。

また書かなければならない接続詞についても学んだ。起承転結がうまく文書に入るように、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つの接続詞を使わなければならない。テーマ、具体例、反論、結論を綺麗にまとめて入れることで、文章がより良くなる。

ウェブの情報についても学んだ。Wikipediaにおいて、正しい情報かどうか判断する時には、本文を見るだけではなく、出典があるかどうかを確認する必要がある。また、出典があれば、出典の方を参照した方がより正確な情報であると言える。ウェブはきっかけとして利用する方が良い。それに加えて、政府や調査機関が行っている統計データや、新聞記事のデータベース、学術論文を探す事も重要である。

これらの事をすぐに実行しろと言われても難しいかも知れないが、これから自分もレポートや論文を書いていくうえで、少しずつ意識していかなければならない。

コメント [y99]: なぜ難しいのでしょうか？すべて、すぐに実行できる具体的な事柄ばかりですよ。

今回の授業では、「思う」と書きがちなところを「思う」と書くのではなく、根拠がある正しい判断なのだから「~である」と書けば良いことを学んだ。また、レポートを書く際に参考にする本の選び方は、まず概説書を読みその分野の「定評のある文献」や「古典的文献」にすべきである。本の「奥付」を確認したり、教員に聞いてみるのも良い。

次にレポートには書いてはならない言葉がある。それは、「いろいろ」「さまざま」など抽象的な言葉だ。また、「聞いたことがある」という言葉は情報源が分からない為出典を調べるべきだ。大事なことは、何考えたか具体的に書くことなのだ。

反対に書かなければいけない接続詞というのがある。「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」である。話は、あまり変えるべきではないので「さて、ところで」等の接続詞は用いるべきではない。

毎回の授業で述べられている通り、コピペでなく「引用」する。調べたときは必ず出典を書く。ウェブサイトの場合は、「制作者、サイト名、URL、閲覧日」を書きウェブ上では嘘が多いため、制作者は必ず確認する。まず、出典の書いていない情報はそもそも信用すべきではない。もし、出典が書かれていたら、その出典の方を参照する。あくまで、ウェブ情報はきっかけとして利用すべきなのだ。そして、最終的には「学術論文」「学術雑誌」に掲載された論文を利用するのが良い。日本の論文は CiNii、外国の論文は Google Scholar

を使うと多くの良い論文が出てくる。

以上のように、必ず「引用」する際には出典を書き、何を考えたかを具体的に書くことが本当に重要である。

今回の講義では、「思う」を書いてはいけない理由、接続詞の重要性、ウィキペディアの真実について話されていた。

まず、なぜ「思う」を使ってはいけないのかについては「思う」を使ってしまうと、理由や根拠を明示しなくてもよいためであり自分の意見の説明としては不十分なものになってしまうからであると学んだ。

次に、接続詞の重要性については、文章を書くときに接続詞は文章を短く切ってつなぐという大切な役割でありその中でも「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」が重要な接続詞であると学んだ。

最後にウィキペディアについては、ウィキペディアは誰が書いたかわからない情報がたくさんあり、それが事実かどうかかわからないので使ってはならないということ学んだ。また、もし使うなら書いている人物を調べてその人物がその分野に名の通ったひとであるかを確認してから引用することが必要であると学んだ。

私は今回の講義でのウィキペディアは使ってはいけないという意見に賛成だ。

なぜなら、嘘のウィキペディアを信じるより自分で調べた本などの方がより正確であるからだ。

コメント [y100]: そうは言っていません。ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい、と説明しました。

コメント [y101]: ウィキペディアは匿名です。誰が書いているかは分かりません。

レポートは常に理由を書くということを意識し、色々という言葉は避けてどのようなことも具体的に書く。また、聞いたことがあると書くのではなく、どこで知ったのか分かるように出典まで調べる。

基本的に起承転結というまとめ方で書く。まずはテーマを書き、次に、例えば、とテーマに関連する具体例を書く。続いて、しかしと反対の事例を書き、最後に、それゆえと結論を書き、まとめる。

また序論、本論、結論という書き方もできる。

このように、どのような書き方にせよ、そのレポートを読む相手が理解しやすい書き方を心がけるべきだ。

今回の授業では、自分が納得するまで自分の意見の根拠を調べ、正しい判断には「～である」と断言し、続けてその理由、調べた根拠を述べればよいということを学んだ。さらに、具体的に、出典を調べて書くことや、文章を構成するときの基本の接続詞についても学んだ。匿名のウェブページは信用せず、ウェブ情報はきっかけとして使用し、根拠のある引用としては政府や調査機関の統計データや論文を利用すべきであるということも教わった。ウェブページの制作者の名前を検索してみることも引用する際の大切なことである。

ウィキペディアなどの匿名のウェブページはきっかけとして利用すべきと先生はおっしゃっており、『コピペと言われないレポートの書き方教室』にも、『根拠を書いていないが興味深い意見』を見つけたら、それを根拠づけるような情報源をさらに探すということで「す。」とある(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室』新曜社,2013,p30)。そのような意見を見つけて、その根拠づけるような情報も見つけた場合、どのようにレポートに書けばよいのか。匿名のページも引用して、根拠の情報も引用すべきなのか。その場合、匿名のページの制作者名は制作者不明と書けばよいのか。それとも、匿名のページは引用せずに情報源の方のみ記載すべきなのか。もう少し詳しく知りたい。

コメント [y102]: このようにしてください。

コピペではなく「引用」をする。調べた時には出典を書く。ウェブサイトの場合、(制作者、サイト名、URL、閲覧日)の4つの情報が必要。しかし、ウェブにはウソもいっぱいである。制作者を検索して確認した方がよい。書かれている内容が信用できるかどうかは、いくつかのポイントで判断する。出典の書かれていない情報は信用しない、出典が書かれていたらその出典を参照する、ウェブ情報はきっかけとして利用する。政府や調査機関が行なっている統計データや新聞記事のデータベースなど情報のありそうな場所で信頼できるデータを調べる。

私は今までウェブの情報を鵜呑みにしていた。ウソの情報もたくさん流れているということは知っていたが、検索した際に一番上に出てきたサイトは信用しても大丈夫だろうと思っていた。正確にはその情報が本当かどうか確認するために制作者などを検索するのがめんどくさかったのだ。でも今日の授業できちんと情報は調べる必要があるとわかった。日頃からめんどくさがらず毎回確認するように心がけたい。そして卒論の際には自分で情報を見極めて「引用」を上手くできるようになりたい。

レポートでは語尾は「思う」、「感じる」、などではなく、「である」、を使わなければならない。その際は断言できるだけの根拠を用意する。感想では評価することができないのがレポートである。またレポートでは文章を短く切り、「たとえば、しかし、それゆえ、つま

り」といった接続詞で文章を繋げなければならない。レポートを書く際のインターネットの活用法にも注意が必要である。インターネット上の出典の書かれていない情報は信用してはいけない。インターネットの情報はあくまでも契機として利用すべきである。その際は統計データや新聞記事を検索するとよい。

レポートを書くのは、これまでとは違い思ったことを述べて断言しなければいけない点で難しい。インターネットの利用についてインターネットを使って自分の意見を根拠づけることも可能であるが、人間は自分にとって都合のいい情報に惹かれるので、下手をすると持論が間違っていることを裏付けてしまう可能性もある。細部まで気を配って作成しなければいけない。新聞を使って見聞を深めることが有効だとおっしゃっていたが、自分の意見をしっかり持つという点でなにごとにもアンテナを張る必要がある。大学以前から「調べ学習」ではなく「レポート」の書き方を推奨すべきという意見があったが、それは難しいと私は考える。私自身も小学校の時インターネットを使った調べ学習をしたことがあったが、ある一つのサイトの意見を全体の意見として扱ってしまったことがあった。情報を集め、選別し、見極めるという工程を経て初めてレポートを書くことが可能になる。

要点

句点の打つ位置にきお気をつける

参考文献でもより確かな鮮度の高い情報に重きを置く

意見

参考文献ならなんでもよいとおもっていた。

これからは情報の鮮度に気を付ける。

本当に気を付けなければならないことは何だったか、もういちど復習しておきましょう。

コメント [y103]: これは学生のコメント。

1. 今回の授業の要点は2つある。

1つ目は論文の書き方についてである。

まず、「〜だと思ふ。」という書き方ではなく、しっかりとした理由を書くべきである。そうすることによって自分の主張が説得力のあるものになる。更に、正しい接続詞で文章を構成し、具体的に書くことにより、更に説得力が生まれる。

2つ目はウェブの利用上の注意点についてだ。

匿名のウェブページを安易に信用してはいけない。それゆえ実際に制作者の名前を検索してみるのが良い。また、出典の書かれていない情報を信じてはいけない。もし出典が表

記されているページがあるならば、そちらを優先して参照する。その方が信憑性が高い。そしてウェブ情報の検索については、統計データを調べてみると良い。

2. 授業でも扱っていたが、私 (たち?) はなにか自分の調べたいことを参照するときには本の裏ページにある著者の名前から検索して調べていくべきである。

3. 自分の興味のある本を書いている著者ということは、その分野において長年研究しているため、制作者のわからないウェブページの情報よりも何百倍も信憑性があるからだ。

コメント [y104]: 名前だけでなく経歴や肩書、これまでに書いた本や論文が記されているはず。

私たちが論文やレポートを書く際に陥りがちなミスに、代表的な二つのものがある。ひとつが、「文章の構成についてのミス」だ。論文やレポートなどを書く際には、書いてはいけない言葉というものがある。

その際たるものが、「思う」だ。この言葉は非常に便利なもので、論じている事柄についての正当な理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。しかしそれでは感想文になってしまう。単なる感想というものは評価することができない。そうすると、「正しいことを主張する」という本来の論文やレポートの意義からかけ離れてしまうのだ。

では、「思う」を言い換えてしまうと問題は解決するのか。答えは否だ。「考える」「感じる」「印象を持った」などの言い換えはどれも「思う」と同義であり、根本的解決に至っていない。かといって、「それはよくないと思う」を「それはよくない」と言い切った場合には文章のまとまりが悪くなる。

それではどうすればいいのか。答えはシンプルだ。これらの問題を解決する方法は、『思う』の代わりに『理由や根拠』を考えて書く」というものだ。そうすれば内容も明確になり、書きやすくなる。おまけに、そうすることで「いろいろ・さまざま」などの、私たちが書いてしまいがちな曖昧な表現も具体的に書くことが容易になる。

また、書いてはいけない言葉がある一方で、絶対に書かなくてはならない言葉というものも存在する。接続詞だ。もしもこれらが文章中にないとすると、どうしても箇条書きのような論文やレポートになってしまう。そのほか、文章がダラダラと長く続く読みづらいものになりがちだという点もある。読みやすい文章とは、簡潔で明確な文章である。そのような文章にするためには、文章を短く切って接続詞でつなぐという文の構成を心がけることが不可欠だ。そうすることで、まとまりがあり、起承転結のはっきりとした明快な文章が書けるようになる。

ふたつめが、「誤った Web ページの活用方法をしてしまうこと」だ。高校までの調べ学習等では、Web 上の情報をそっくりそのまま活用しても特に問題のない場合もあった。しかし、大学からはそうはいかなくなる。そうしてしまうとコピー行為となる上に、情報が不正確である場合も多いからだ。

では、どうすれば Web 上の情報の内容が信用できるものなのか判定できるのか。そのポ

イントは大きく分けてふたつある。ひとつは、出典の書かれていない情報は信用しないこと。もうひとつは、出典が書かれていたらそう出典の方を参照することだ。

しかし、これらには注意しなければならない点がいくつかある。まず、ペンネームを使用して Web ページの作者をかたっている場合は、匿名で情報を提供していることと変わらないことを理解する必要がある。そして、企業のホームページ上の情報は、基本的に広告としての情報発信を目的としたものだということだ。それらは、客観的な情報ではなく、自社に都合の良い情報であることが多い。また、ときたま「実名を出して情報発信をする目立ちがりの人」もいる。この場合、そのひとの名前を Web で検索して経歴を調べることが信用できる情報なのかを見極めることができる。どこにもヒットしない人物であれば、知識体系のない「普通の人」である。

それでは、失敗しない Web 情報の使い方とは何か。それには大まかに分けてふたつの方法がある。ひとつは、正しい情報のありそうな場所からデータを得ることだ。有効なのが、政府や公的な調査機関が行なっている統計データや、新聞記事などのデータベースである。特に政府の統計は具体的で、大抵のデータであれば存在するので、活用すべきである。もうひとつが、学術論文を検索し活用することだ。現代社会において、「信用できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。「学術雑誌」に掲載されたものであればなお良い。近年では、GoogleScholar で欧文雑誌論文を無料で検索することもできるので私たちはそういったツールを積極的に活用すべきである。

私たちは、常日頃から Web 情報を活用しているため、論文やレポートを書く際も軽率にそれらを活用しがちだ。しかし、Web 情報はきっかけとして利用することが望ましい。そして、データが必要な際は然るべき情報源から正しく活用することが不可欠なのだ。

コメント [y105]: いきなり失敗なし、ということはないかもしれませんが。失敗を重ねて情報リテラシーの力を鍛えてください。

今日の講義ではレポートの書き方の中でも大きく三つのことについて学んだ。

一つ目はレポートを書く際に参考にする文献についてである。

レポートの参考文献にする本は必ずしも新しい方が良いというわけではない。

まずは概説書を読んでその分野における定評のある文献や古典的文献を読むのが良い。

二つ目はレポートの中で使うべき接続語についてである。

レポート内では文章は短く切って接続詞でつなぐ。

基本となる四つは「例えば、しかし、それゆえ、つまり」である。

起でレポートのテーマをあげ、承で例えば、を使いテーマの具体例を挙げる。

転でしかしと反対の事例を取り上げて検討する。最後に結でそれゆえ、と結論を書き、つまり、で最後のまとめを書く。

三つ目は前回に続き、引用についてである。

誰が書いたかわからない情報は信用できないから使ってはいけない。

ペンネームも匿名である。

企業のホームページは基本的に広告。

しかし、実名を出していてもただ目立ちたいだけの人もいる。

そういう人を見分けるにはその製作者の名前をウェブで検索してみる。

出典が書かれていない情報は信用しない。

出典が書かれていたら出典の方を参考にする。ウェブ情報はきっかけとして利用し、統計データを探したり、論文を検索するのが良い。

箇条書き風です。

今回の講義では、前回に続きレポートの書き方について学んだ。論理的で説得力のある文章を書くためには根拠が必要不可欠である。根拠を示す際、文献やウェブサイトから引用するが、何でも好きなものを選んでいいというわけではない。ウェブサイトは簡単に調べることができ便利だが、匿名性が高いため、記事を書いた人の詳細や信用出来る情報を探すが大切である。文献も、より確かな情報を得るために定評のあるものや古典的なものを選ぶ必要がある。著者について調べたり、複数のウェブサイトや文献を参考にする、間違った情報でレポートを書くことが防げる。

より良いレポートを書くために、多面的な思考力や文章を書く力は必要不可欠だが、曖昧な情報に振り回されず正しいものを選択する力を養うことも大切だ。

第三回総合科学入門講座は、前回同様論文の書き方についての授業であった。かぎかつこの中に句点を使うのではなく、かぎかつこの後ろにある文の最後に句点を使うのが作法だと分かり、また見にくいという理由から使われていないとも知ることが出来た。前回の授業では出てこなかった接続詞についても今回の授業では触れ、たとえば、しかし、それゆえ、つまりの四つは書かなければいけない接続詞であり、これらが論文の起承転結を作る上での基本になる重要な言葉であると分かった。起では論じるべきテーマをあげ、承はたとえばを用いてテーマに関する具体例をあげる。転ではしかしで反対意見を取り上げ、結でそれゆえとつまりを使い結論とまとめをする。これらの四つの接続詞の使い方は非常に分かりやすくこれから論文を作る上で必ず使用するものであるが、私は「もし」という接続詞を使ってはダメなのだろうかという疑問を持った。というのも、もしという言葉は仮説の接続詞であり、論文も仮説を立ててそれを検証していくものであり、論文の最中に仮説が重複してもその仮説を一つずつ根拠を示して検証すれば一つの仮説を用いる論文とやっていることはなんら変わりはないからである。このような理由から接続詞の「もし」

コメント [y106]: 授業では、具体的にどうやって探せばよいかについて説明しました。理解しましたか？

コメント [y107]: 「もし」は、基本的に「反実仮想」です。論文で仮定の話をしてもし方がないので、あまり使わない方がよいでしょう（「絶対使ってはいけない」というわけではありませんが）。

について質問したい。

今回の授業では、大きく分けて2つのことを学んだ。

1つ目はレポートを書く上で、「。」を打つ場所や「いろいろ」「ある程度」「考えさせられた」「言われている」「～だと知って驚いた」などの言葉は避け、理由や根拠、具体例、接続詞を書くこと。また2つ目に「引用」をする際の信頼できる情報の探し方を学んだ。

この2つの中で私が特に大切だと考えたのは、ネットにある情報を見ただけで鵜呑みにするのではなく、事実関係の確認のために、政府や調査機関が行なっている統計データや事実関係の確認のために、新聞記事のデータベースを調べるべきだという点である。

授業中には「少年の凶悪犯罪が増加している」という提言主張が警視庁の統計データを見てみるとむしろ減少していて間違いであるという例が挙げられていた。誰が書いたのかわからないような情報は信頼すべきでないのである。

しかし、ウェブ情報は正しい情報を自分で探すためのきっかけになりうるという側面も存在するのだ。

つまりレポートを書く際にはこれらのことに留意しながら書かなければいけないのだ。

コメント [y108]: このような主張をしている「識者」もいますから、匿名でないから大丈夫、ということではありません。

今回の授業では、参考文献を探したり選んだりする方法や書いてはならない言葉について、また、書かなければならない接続詞が「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」で、起承転結をつけるということについてを学んだ。

参考文献は、まず概説書を読み、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を読むのがよい。信用できる本を選ぶ際には、大学の教員に直接相談するか、大学の教員が自分の専門分野について書いているものを選ぶ。ただし、学術雑誌に掲載されている文献にも情報が不確かなものがあるため、その判断ができないうちは教員に相談するのが一番の方法だろう。また、ウェブ上の情報において、匿名のものやペンネームが書かれたものは信用してはならない。制作者が示されている場合は、その名前を検索し、信用できるか判断する必要がある。内容については、出典の明記されている情報を信用し、出典の方を参照するのがよい。文献は自分の意見に近いものと自分とは反対の意見のものを読み、比較して考えることで、より意見に説得力を持たせる根拠や理由を書くことができる。そのため、「思う」「感じる」「考える」「印象をもった」という言葉を使わなくても自分の意見を主張できるはずだ。

私は、これまでこれらの言葉や「いろいろ」「さまざま」といったあいまいな言葉をよく使い、具体的に書くということを怠っていた。そのため、授業でもあったように、私は文

章を書くのが苦手である。しかし、自分をごまかして書いたことを他人が見て理解できるはずがない。それゆえ、具体的に書くことは、レポートや論文に限らず、文章を書くときはどの場合でも重要である。さらに、具体的に書くことで、内容が明白になるうえに、自分自身が研究対象により理解を得られるのではないだろうか。

本の選び方は新しい方がよいとは限らず、概説書を読み、定評のある文献^みを知ることが重要だ。文章を書くことを上達させるには具体的に書くことから始めればよい。また書かなければならない接続詞は「たとえば、それゆえ、しかし、つまり」の4つが基本となる。情報集めの手段としては本やウェブがある。しかしウェブにはウソがいっぱいなのだ。特にウィキペディアはあまり使わない方がよい。理由は誰が書いたか分からない情報の集まりだからだ。そこで大切になってくるのが「制作者を確認する、ウェブ検索する」ということだ。ポイントは出典の書かれていない情報は信用せず、もし出典が書かれていたほうがあれば必ずそちらを参照するべきだ。ウェブ自体をきっかけとして利用し、きちんとした正しいデータなどがほしいときは政府や調査機関が行っている統計データを参考することが1番よい。

今回の総合科学入門講座では、レポートの書き方とウェブの利用方法について学んだ。理由や根拠を必要としない「思う」「考える」や、具体的に欠ける「さまざま」「考えさせられた」「聞いたことがある」、単なる感想である「~と知って驚いた」などの語は書いてはならない。また、文章は短く切って基本的な「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などの語を用いて書き、箇条書きは避ける。

さらに、レポートを書く際に参考とする本の選び方は、新しい情報がよいとは限らないので、まずは概説書を読んでその分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を読むのがよい。本の奥付を確認したり教員に相談したりするのもよい。また、「出所表記」に示すべき情報の中に制作者があるように、誰が書いたか分からない情報は信用できないので、匿名のウェブページは信用してはいけない。そして、出典の書かれていない情報は信用せず、もし書かれていたらその出典のほうを参照するのがよい。すなわちウェブ情報はきっかけとして利用するべきである。データを調べるときは、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを参考にするのがよい。

現在膨大な数の情報がネットに出回っている。気軽に調べられるという利便性から、多くの人がそこから情報を得ている。しかしそれらはすべて正しいものとは言い切れない。それゆえ、正しくない情報が世間に正しいものであるかのように存在する。ニーチェが「事

コメント [y109]: 出典を示してください。

実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである。」と述べるように、自分の持つ知恵や経験を駆使して情報をかみ砕き、基本的知識はもちろん世間一般に当然だと思われる考え方・事実に疑問を呈する力をつけてこそ、情報が正しいかを見極めることができる大きな一歩となるのである。

今回、講義で重要だったのは、『『思う』と書くときは具体的な理由や根拠を「**かく書く**」ということ、「web 情報はきっかけとして利用する」ということである。また、**この授業で**「さまざま」「いわれている」「聞いたことがある」はレポートを書く際には**使うべきでない**言葉であることを学んだ。

今まで「思う」と書いてしまった所は、そのまま断言の形に言い直していたので、それが間違いだと気づけたことは大きい。

また、これまで、web の情報は全てを信じることができないと信じており、web の情報を引用するときには、そのサイトの情報を信じ切ることができないので、**引用なしで乗り切ろう**としている部分があったので、**web の上手な使い方**を知れたことも大きい。多くの情報に触れ、不確実な情報は重ねて検索をかけるという方法をとるべきだ。

良い情報を手に入れるためには、学術論文であれ良し悪しがあるということを頭に入れ、しっかりと**かんがえ**判断すべきである。

レポートの参考文献を選ぶときは、まずは概説書を読み、その分野における定評のある文献や古典的文献がどのような文献かを知り、それらを読むのが良い。新しいものが良いとは限らない。また、本の奥付を確認し、著者が何者か知ることや、教員に相談することも効果的だ。レポートを書く際の注意点として書いてはいけない言葉がある。例えば、「思う」という言葉だ。それを書くと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまうからだ。もし、「思う」と書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えなければならない。他にも、「いろいろ」「ある程度」「聞いたことがある」など具体性を欠く表現は使ってはいけない。

それとは逆に、書かなければならない接続詞がある。文章は短く切って接続詞でつなぐのが基本であり、起承転結のある文章はまとまりがある。例を挙げると、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などである。

そして、レポートを書くときに必須であるのが引用である。前回、学んだように引用とは一定の条件を満たさないとコピーになってしまう。たとえば、ウェブサイトの場合、制作者・ページのタイトル・URL・閲覧日時を記載しなければならない。しかし、ウェブは

コメント [y110]: なぜ使うべきでないか、理由を書いてください。

コメント [y111]: 具体的にどのようにしていたのですか？

コメント [y112]: 具体的にどのような方法を知ったのか、書いてください。

コメント [y113]: 具体的にどのようなことを考えるのか、書いてください。

誰でも簡単に匿名で書き込めるため、誤った情報もたくさんあり、信用できるか見極める必要がある。そのためには、ペンネームは匿名と同じであること、企業の HP は広告であることを念頭に置いておくことが重要だ。見極めるポイントとしては、出典の書かれていない情報は信用しないこと、出典が書かれていたらその出典の方を参照すること、ウェブ情報はきっかけとして利用することなどが挙げられる。制作者の名前を検索するのもひとつの手である。

また、データを調べるときは「孫引き」するのではなく、統計データを調べるのが良い。論文を検索するとき、現代社会において、「信用できる記述」は最終的には学術論文に至る。もちろん、論文が絶対に正しいとは限らないので、複数のものを調べ、知識を体系化すると良い。雑誌論文を探すときは「CiNii」を、欧文雑誌論文を探すときは「Google Scholar」を利用できる。

論文・レポートを書く際に、書いてはならない魔法の言葉として「思う」「いろいろ・さまざま」「聞いたことがある」が挙げられる。これらは、すべて抽象的であるから、具体的に理由・根拠を書き、出典を調べる必要がある。一方、書かなければいけない言葉として文と文の関係を明確にする接続詞が挙げられる。文章は短く切って「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つを基本につないでいく。

また、参考文献を選ぶ際には、教員に相談したり概説書を読んだり奥付を確認したりして、定評のある文献や古典的文献を知る必要がある。その中から「問うべき問い」を見つけるためには多くの情報を得なければならない。そのきっかけとしてウェブ情報を利用するときは、匿名でないことや出典の有無を確認することを忘れてはならない。論理的な文章を書くためには信頼できる情報を見極める力を身につけ、自分の主張の理由や根拠を裏付ける材料として断定できるまで調べることが大事である。

内容的にはよくまとまっているのですが、もとの文章は段落がほとんど切られていませんでした。私の方で、内容に即して段落に分けました。参考にして、今後は自分で段落に分けるようにしてください。

本日の講義では、論文の書き方とウェブの利用について教わった。

書き方として、まず大切なことは、「思う」「考える」といった表現を使ってしまうのは調べていないからである、ということだ。すなわち、そういった表現を使いたくなる時こそ、調べて知識を取り入れるチャンスである。自分の意見を「~である」と断定することができるようになるまで、知識を取り入れるべきだ**と言う**。

さらに、まずは概説書を読み、定評のあるもしくは古典的な文献について知り、それらを読むと良いようだ。しかしここで、定評があり古典的な文献は**難しくて読むことには、長い時間が必要**となるだろう。そのため、様々なことに興味を持つ私は、分野を絞る必要

コメント [y114]: 杞憂を抱くよりはまず読んでみよう。

が出てくるのだろうか。私自身、絞って選んだ分野を深く、より深く、追究すべきだと考える。しかし、分野を絞るのは、迷いも生じ、気が進むことではない。

ウェブの利用においては、**出典出典**の書かれていない情報は信用すべきではないということが重要である。また、出典の方を参照とすべきだと言う。そうして最終的には、信用できる記述として、統計や学術雑誌に掲載された論文を参照することになるようだ。

本日は CiNii の情報をいただけたことを有難く思う。今まで書籍やウェブページで調べても限界があったことが、CiNii をのぞいたところ**膨大**にあった。ぜひ今後は、その他の情報源とともに利用したい。

コメント [y115]: 授業でも言いましたが、CiNii では英語の文献が探せません。英語の文献を探せば、日本語の数百倍の文献があります。

今回は、文章の構成の仕方とウェブページの活用についての講義だった。

まず、文章の構成についてである。一文は短く切り、接続詞で繋ぐ必要がある。論文やレポートでは、箇条書きではなく、接続詞を使ってきちんとした文章にしなければならない。

次にウェブページの活用についてだが、調べた際は必ず出典を明記する必要がある。ネットでは匿名の記事が多く、誰が書いたか分からない情報は信用できない。そのため、制作者が分かる記事を選ばなければならないが、中には実名を出しただけの一般人も紛れている。そこで、制作者の名前をウェブで検索する必要がある。

出典に関するポイントは、出典の書かれていない情報は信用しないようにすること、また、もし出典が書かれていたら、その書かれている出典の方を参照することである。

更に、ウェブ情報の使い方についてだが、データや論文を調べるとよい。ウェブ情報は簡単に信用できない場合が多いが、きっかけとして利用するのがよい。また、意見を述べる前に、政府や調査機関が関わっている統計データや、大学教授などの論文を参考にするなどして、複数の情報源を見ることが大切である。

引用の際に、制作者名が明らかにペンネームなら信用できないというのはわかっていたが、実名のものであっても、それは一般人の場合もあるというのは納得した。確かに、それらしい名前が書かれていても、信用できるとは限らない。そのため、制作者が信用できる人物かどうかを調べないといけないのだ。このことを聞いていなければ、私は、制作者名がそれらしい名前であれば、信用できると思い込んでいただろう。制作者がわかるからといってそのまま書き写してはいけない。もしかすると、一般人が自分にとって都合のいい内容に書いている可能性もあるのである。それを見極めるために、制作者の名前をウェブで検索することが必要となるのである。

今回の授業の内容はレポート・論文の書き方とウェブの利用についてだった。書き方の方については、思う、いろいろ、聞いたことがあるといった不正確であやふやな文言の使用を避け、理由や出典を明示し、なおかつ具体的な論理展開にすること。むやみに文を連結せず、接続詞を活用し読みやすい文章にすることを学んだ。ウェブの利用については、匿名のサイトを利用するのは避け、信頼のおける制作者が作ったサイトを利用する、サイト内で出典が書かれていたらその出典のほうを利用する。そして、統計データを利用し、論文を検索することも有用だと教えられた。

授業を**見て受けて**疑問に思ったことがいくつかあった。一つ目に、今回の授業では制作者のよくわからないサイトは使わない、例えばウィキペディアのようなサイトはできるだけ引用に利用するなどということだったが、2回ほど前の授業で例としてウィキペディアの内容を引用した文が出てきた。あれはどういうことなのか。制作者の不明瞭なものでも軽い引用程度なら使ってもいいということだろうか。

二つ目に文献引用に書籍や論文を利用するべきとの話の中で、本を数十冊単位で読んだ方がよいということができたが、本当にそんなに読むことができるものなのだろうか。流し読みをすればそんなに時間はかからないだろうということだったが、僕自身字を読むことにそんなに抵抗感を感じないが、いかんせん流し読みということができず、一言一句懇切丁寧に読んでしまうので、遅々として読書が進まないのである。流し読みをすとなにか大切な部分を読み落としているのではないかと不安なるからである。読むのが早い人はパッパッと単語を拾って内容を考えながらまとめだけ読んでいるということだろうか。**速読のコツを**教えてほしい。

授業の内容から離れてしまうが、二点質問がある。一点目、この課題は毎週月曜ないし火曜の17時提出とパワーポイントにはあるが、manaba上では**19:10**まで提出可能とあるどちらが正しいのか。二点目、この課題の作製ページについての要望だが、どうやら授業コメントを書いた状態で提出確認をせずにページを移動してしまうと、書いていたことがすっかり消えてしまうようである。この仕様のために、これまで二回ほど、時間をかけて打ち込んだコメントが綺麗に消えてしまったことがあった。できれば**Wordのような一時保存機能のようなものを追加**していただけると嬉しい。

今回はレポートで書いてはいけない言葉とレポートにおける参考文献の選び方について学んだ。

「いろいろ」、「さまざま」という言葉は使わず、具体的にどんなものかを書く。

「聞いたことがある」、「言われている」だと、どこの誰が言ったことか分からず信憑性がないので、出典を調べる。

「楽しかった」や、「~と知って驚いた」は、ただの感想になるので使わない。

コメント [y116]: 時間がかかってもよいです。毎日少しずつでも読み進めていくことが大切です。一日10ページしか読めなくても、10日で100ページ、たいていの本は300ページぐらいなので、そのペースでも1か月に1冊、一年に12冊、卒業までに48冊読めます。実際には、たいていの本なら一日30ページぐらいは読めるでしょう。

コメント [y117]: Manabaの提出締め切りを17時ちょうどにしたら、17時1分でもアウトになります。多少遅れても提出することの方が大切なので、遅刻しても出せるようにmanabaの締め切りを19時ごろにしています。なお、manabaでは提出時間が記録されるので、遅れて出した人が誰なのかは把握しています。

コメント [y118]: Manabaは大学が要れているシステムなので、私の方で仕様変更することはできません。ワードなどで下書きしてから貼り付けたらよいのではないのでしょうか。

レポートは一つの話題から逸れないように話題転換の「ところで」は使わない。文章は短く切って、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の基本の四つの接続詞でつなぐ。

レポートにおける参考文献は、より確かな情報をえるため、**出版年が最近で、鮮度の高い情報に優先を置く**。まず概説書を読み、その分野の定評のある文献や古典の文献がどんなものかを知る。また、その分野の教員に相談するのも良い。

Web からの出典は誰が書いたかわからないと信用できないので、必ず「制作者」が載っているものを使用し、Web でその名前を検索して確認する。企業の HP は基本的に広告なので客観的でなく、正しい情報ではないので使用しない。

また、内容が信用できるものかを判定するには出典がついているか確認することが重要。出典がついていれば、その出典の方を参照する。

データを調べる際は、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを利用する。

現代社会において「信用できる記述」は最終的に学术论文や、学術雑誌に掲載された論文に至る。

質問があるのですが、授業で**英語の論文**を探せば日本語とは比べものにならないくらい情報が手に入ると言っていました、それはなぜですか。

私は、英語は世界共通語なので、英語で論文を書く人が多いからだ**思います**。英語で書くと、他の何語で書くよりも多くの人が読めると**思うから**です。

今回の講義は、レポートの書き方及び正しい情報を得る方法を学びました。

書き方については、今までの講義でも何度も仰**られっ**ていた「思う、考える」がなぜダメなのかということがよく分かりました。高校までは多くの場面で「感想文」を書かされました。「思う、考える」のオンパレードでしたが途中でだんだん書くことも無くなり、書いたら書いたで内容が薄くなった記憶があります。レポートでこんなことがあってはならないので、ここに理由や具体的な話を入れてしっかりした内容にするべきなのですね。また、講義の中で出てきた「4つの接続後」も上手く運用できれば話に広まりが出てより深い内容のものになるのは間違いありません。

正しい情報の得方に関して、これは今後論文などを書いていくであろう我々にとって大変参考になりました。駄文を回避するための判断力を養うためにしっかりと知識体系を作らなければならないということも今更ながら理解できました。

質問なのですが、本講義の中で先生は「Twitter などの引用は匿名性が高いからよくない」と仰っていました。情報ソースとしての Twitter は確かに信用性に欠けると私も**思いました**。しかし、意見や出来事の規模や話題性の裏付けとして利用する分には有効打なのではないでしょうか?例えば、先週あたり高校までの**小論文教育を批判**するツイート

コメント [y119]: これは学生のコメント。

コメント [y120]: 授業で、「現在、学术论文は英語で書くのが普通になっているから」と説明しました。

コメント [y121]: 私の『大学改革という病』(明石書店) 190 ページあたりに書いてありますから、読んでみてください。

(<https://twitter.com/marxindo/status/988655731351040000?s=21>)

がありました。見ていただいたら分かるように RT5000 弱、いいね 1 万超えです。これは沢山の人が賛同しているということになり、多くの人が同じように考えているという証拠になります。また、「トレンド」という機能を見るとリアルタイムで世の中の人が何に興味を示しているのかということが分かります。

以上のことより、Twitter に限らず SNS は使い方によって強力な情報源になるのではないのでしょうか？

私は今回の講座でまず、文献を引用する際の句点の打ち方を学んだ。

「句点は、この例文のどこに打てばよいでしょうか」(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室』新曜社、2013 年、6 ページ)。

このように句点は、引用した文献の出所表示まで書き込んだあとに打つのが自然である。また、レポート作成時などに参考文献となる本の選び方についても学習した。

出版年が最近で、鮮度の高い情報を用いるのがよいが、必ずしも新しいものが良いとは限らない。そのため、参考文献を選ぶ際には、調べる分野で定評のある古典的文献がどのようなものかを知り、読んでみるのが大切であると学んだ。

前回に引き続き、レポートの書き方について。

参考にしたい本を選ぶ時はすぐにこれと選ばないようにする。より確かな情報を得るために、まず出版年が最近のものである鮮度の高い情報に優先度を置く。しかし新しい方が必ずしも良いとは限らない。

そして調べている分野における「定評のある」「古典的文献」がどのようなものかを知り、それらを読むようにする。

そして書いてはいけない魔法の言葉というものが存在する。例えば「思う」。これを使ってしまうと根拠や理由を示さなくても文を完結させてしまい、レポートとして相応しくない。

もう一つの例として「考えさせられた」。これでは何を考えたのかわからない。何をどのように考えたのかを具体的に示すべきである。

また文を構成する上で、重要なのは接続詞である。なるべく文章は短めに切り、接続詞で繋げると良い。

ネットを利用して調べる時は、なるべくたくさんの記事を見る。ウェブにはデマが横行しており、学生がよく利用する「wikipedia」もすべて正しい情報とは限らない。出所表示

コメント [y122]: 日本には 1 億 2 千万ぐらいの人間がいますから、賛同した人は 1 万人に 1 人もいないということです。また、ツイッターには「ダメだね」ボタンがないので、その意見に賛同しない人の数は分かりません。リツイートや「いいね」が多いツイッターの内容は、「今これがツイッターで話題になっている」という事実を示すにはよいでしょうが、その話題になっていることが「正しい」かどうかは、賛同者が多いかどうかということと関係ありません。

コメント [y123]: これは学生のコメント。

コメント [y124]: これは学生のコメント。

を確認し、その人物がどのような人なのかを調べる必要がある。

文章の展開を考え、起承転結の進め方を心がける。また、参考にする文献やデータは熟考して引用し、説得力のある文に仕上げる。

今回の授業では、コメントの注意事項や本の選び方、書いてはならない魔法の言葉、「引用」の詳しい情報を示すことだった。

コメントの注意事項では、「。」ということを知った。以前から会話文のように「。」の形で定着していたため、違和感があった。また、コメントの書き方として、自分の考えることすべてを傾けて書くようにし、自分が正しいと思わせる書き方をしなければいけない。

コメント [y125]: どういう意味ですか？

本の選び方について、根拠、理由を述べるには多くの知識が必要であり、本をできるだけ多く読まなければならない。本の中でも最近のものである鮮度の高い情報に目を向ける。本の「奥付」を学習すべし。

コメント [y126]: これは学生のコメント。

書いてはならない魔法の言葉については、多くの例を見る限り、どれの何を理解したのか、具体的に書くことを勧めている。また、接続詞の「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」がどういう位置付けなのか考えなければならない。

「引用」について、ウェブページ、本、論文の内容が引用されるが、ウェブページには正しいことだけとは限らないため、誰が書いたか特定できない場合、制作者の名前を検索することが必要だ。

ウェブを信用できるかできないかのポイントとして、「出典の書かれていない情報は信用しない」、「出典が書かれていたら出典の方を参照する」が挙げられる。

ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。特に統計データを調べることや、論文を検索するのに適している。

本日の授業のテーマは、本の選び方とレポートの書き方のルール、ウェブの利用の仕方を学んだ。

本の選び方では、学ぶ分野の概説書を読んで、その分野における「定評のある文献」や「古典的文献」を選ぶのが良いということを学んだ。

レポートの書き方のルールでは、「思う」を使ってしまったらそれを消して理由、根拠を書くこと、「色々・様々」を使ってしまったらそれを消して舞台具体的なことを書くこと、「聞いたことがある」を消して出典を記入する、最後に接続詞で文章を構成していくということを学んだ。

ウェブの利用の仕方では、匿名のウェブページを利用しない、出典の書かれていない情報は信用しない。Web ページはきっかけとして利用するということを学んだ。

現代では、インターネットの情報をコピーアンドペーストして楽にレポートを仕上げようとする人が少なからずいると山口教授はおっしゃっていた。確かに、インターネットの情報をコピーしてそのまま使えば簡単にレポートは仕上がる。しかし、そんなことは許されないことである。なぜならば、まず他人の情報をそのまま利用することは書いた本人の著作権を侵害している。さらに、インターネットの情報は良い情報も悪い情報も玉石混合で混ざっているため、誤った情報でレポートを公の場に出せば信用を失いかねないという危機が発生する。こうした理由から、インターネットの情報はあまり過信しすぎないことが大切である。

しかし、インターネットの情報を活用した方が良い場合もある。例えば、政府機関が出している統計データなどは信頼性が高く、見つけやすいこともあって便利である。また、知識の体系化が進めば、良い情報を見つけて出すこともできるので、見つけたい情報を早急に探したいときはインターネットを利用するのは良いことである。

以上から、インターネットをいかに使いこなしていくかが私の大学生活での課題である。

コメント [y127]: 授業で述べた方法を常に意識して実践してください。

授業内容の要点

- ・匿名の web ページは信用しない
- ・出典の書かれていない情報は信用しない。
- ・web での情報はきっかけとして利用する。

この授業を受けて

Web での情報を さんこう参考 にする際には必ず出典の明記を確認するべきである。

なぜなら、私はこれまでネットで情報を集めるとき、出典などあまり意識せずにみていたが、今回の授業を通してネットの情報には嘘もたくさんあり、その情報を全て鵜呑みにしてしまっただけでは正しい理解や答えを見つけ出すことができないということが分かったからだ。

情報は自分できちんと吟味して取捨選択すべきである。

箇条書きはやめましょう。

レポートを書くためにウェブを利用することは必要だが、ネット上の嘘情報に惑わされる危険があるため、きっかけとして使用することが望ましい。ただし、政府や調査機関による統計や論文の検索にネットは大いに役立つ。また、製作者の名前がわからないウェブ

ページは信用してはならない。論文を書く際に「思う」「感じる」「いろいろ」「言われている」などとは書いてはならない。とにかく具体的に根拠や理由を述べて説明するべきである。

本は買うべきであるという主張はもともとだが、学生の手で数千円の本を購入することは(その本一冊にかけられた労力や時間が非常に膨大であることを理解していても)容易ではない。無料で利用できる図書館をより活用すべきだ。

コメント [y128]: 飲み会一回分、スマホ一月分ぐらいではないですか。自分の力を高めるための投資をケチる者に成長はありません。

「思う」、「考える」がだめだとすると「～である」と根拠を持って断言すれば良い。単なる感想は書かないで具体的に書く。テーマを書いて、「たとえば」、とテーマに関連する具体例を挙げ、「しかし」、と反対の事例を取り上げて検討し、「それゆえ」、と結論を導き、「つまり」、と最後のまとめとする。ウィキペディアは便利であるが、誰が書いたかわからない情報なので確証がなく信用できないから参考にしない。出典の出典の書かれていない情報は信用しないで、出典の方を参照すべき。

意見;ほとんど情報を得るためにウィキペディアばかりに頼っていたが、今回を通して確かに信用し難いと思い利用を控える。

コメント [y129]: ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい、と説明しました。

自分の意見に自信が持てず、今までは「思う」などを使って逃げていたが、それがダメだと知り、しっかり根拠づけをして自分の意見を言う。

やはり言い切った方が締りが良く、説得力があるように感じるが、今まで染み付いてきた癖を直すのは少し難しい。

コメント [y130]: 難しいからこそやりがいがあるのです。誰でも容易にできることができて、何の足しにもなりませんよ。

今回の講義では、大きく分けてレポート・論文の書き方、ウェブの利用の2つについて学んだ。

まず最初に、レポート・論文の書き方として、書いてはならない言葉がある。たとえば、「思う」を消して、理由や根拠を書く。他にも「いろいろ・さまざま」「ある程度・何となく」「考えさせられた」は消し、具体的に書く。さらに「聞いたことがある・言われている」ではなく、出典を表示し、誰が言っているのか主語をはっきりとさせる。「楽しかった・～と知って驚いた」など単なる感想は、評価できないので書かない。続いて、書かなければならない言葉として、接続詞がある。基本的には、起承転結に合わせて「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つを使い、文章を構成する。

次に、ウェブの利用について。ウェブには嘘がはびこっている。たとえば、ウィキペディアは誰でも編集できるので、真実ではない情報が掲載されていることも多い。それゆえ、「ウィキペディアは使ってはならない」と言う人がいる。しかし、ウィキペディアだから

ダメなのではなく、誰が書いたか分からない情報は信用できないから、使ってはいけないのだ。信用できる情報を見分けるには、制作者を確認することが大切だ。ペンネームは匿名と同じなので、制作者としてふさわしくない。制作者が掲載されている場合、その制作者の名前をウェブで検索する。しかし、制作者が確認できても、内容が信用できるとは限らない。それゆえ、出典の書かれていない情報は信用せず、出典が書かれている場合、その出典を確認する。つまり、ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。そして、ウェブ情報をきっかけにして政府や調査機関が行っている統計データや、論文を検索し引用する。

今回の講義を聴いて、自分の前回の授業コメントで、接続詞をほとんど使っておらず、箇条書きのようになっていたことに気が付いた。今後レポートを書くときは、改善しなければならない。

少し改善しているようです。この調子で頑張ってください。

今回の講義では、まず、一般的な注意事項を学んだ。具体的には、名前や学生番号は不要であることや、適当に段落で区切ること、具体的な文章を書くことである。

また、書いてはならない魔法の言葉として、「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」があると、前回の授業に引き続き学んだ。「思う」は確かに自分の意見などを書く上で便利な言葉ではあるが、それを使うことによって理由や根拠を書く必要がなくなり、論理的な文章を書くことができなくなってしまう。そうならないためには、自分の考えに自信が持て、はっきりと「～である」と断言できるほど、根拠となる情報を調べていくことが重要になってくる。

さらに、書いてはならない言葉として新しく学んだのが、「言われている」「聞いたことがある」などの表現である。書いてはならない理由は、情報源が疑わしく、実際に聞いたことがあるのかもしれないが、人の記憶というものは曖昧であるため、確信的な証拠にはならないからである。たしかに、これは受け身的な表現であり、主語がはっきりしていない。そのため客観性に欠け、根拠のある表現になっていないのだ。これを回避する方法として、ウィキペディアなどの情報を引用しないということがある。ウィキペディアは誰もが自由に書き込めるサイトであるため、情報の制作者がわからず信頼できないからである。そして、信頼できる情報の見分け方のポイントとして、出典の書かれていない情報は信用しないことや、出典が書かれていたらその出典のほうを参照すること、ウェブ情報を鵜呑みにするのではなくきっかけとして利用することなどがある。

これらのことから、この先論文を書く上で、もちろん論文の中身も重要だが、引用の出所表記の仕方や、言葉や接続詞の使い方、信頼できる情報を見分け、客観的に書くことなど、基礎的なことを反復練習していくことが最も大切になってくるのである。

今回の授業の内容は以下のことである。参考文献を選ぶ際には、まず概説書を読み、そこで触れられている、その分野で定評のある文献や古典的文献を読んでみるのが良い。また、ウェブページも、そこに書かれた情報の出典を見ることで、文献選びの参考になる。

もし、そのウェブページの情報を直接引用したい場合は、必ず出典があるか確認し、制作者、ページのタイトル、URL、閲覧日時を出所表記に示さなければならない。信用のできない情報を使用すると根拠のない主張になってしまう。ウェブページには基本的に根拠のないウソが多いため、文献選び **(探し)** のきっかけとして利用するのが好ましい。

また、政府や調査機関の統計データや、新聞記事のデータベースなども利用できる。

論文を書くには、授業で学んだこれらの方法で多くの情報を手に入れ、多角的に主張をまとめることが大切なのだ。

今回の授業は、まずは本の選び方について基本的に **新しいものから優先的に**、はじめは定評のある概説書や古典的文献から読み始める、ということだった。次に、文章の構成の仕方を聞いた。文は具体的に書き、受け身形の文や感想は書かず、意見の根拠や理由をしっかりと述べること、文が長くなりすぎないように接続詞を活用することがポイントである、ということだった。そして最後は、信用できる情報の見分け方でした。まず、企業の HP は広告なので基本的に参考にしないということ、情報の根拠となる出典を見て、出典がなければ信用しないこと、出典があれば出典を参照し吟味することが肝要である。それが信用できるものであれば、それは学術論文である。根拠の乏しいウェブサイトであっても、きっかけとして利用するぶんには利用できる。ほか参考にできるデータとしては、政府の統計などがある。

信用できる情報源から得た知識は、自分の主張を根拠づけてくれるので、自信を持って主張することができる。それに、普段から正しい学術論文を読んでいると、知識が増えるだけでなく文章の書き方などの参考にもなる。なぜなら学術雑誌に載るような学術論文は、ある程度地位や知名度のある研究者がきちんとした施設で研究した結果を述べているからである。同様に新聞なども活用して読むのがよい。なぜなら社会のことを知ることができるだけでなく、社会や研究について疑問を持ったり考えたりすることで、知識体系を増やす一助となるからである。

コメント [y131]: これは学生のコメント。

今回の講義はレポートを書くときの文章の構成の仕方とウェブページの活用方法についての講義だった。レポート作成においては、「思う、いろいろ、聞いたことがある」のような書いてはいけない言葉があり、そのような言葉を用いず「理由、具体、出典」を書くということ。また、文章を短く切って接続詞を用いて文章を構成するということが話されていた。ウェブページの活用については、匿名のウェブページや出典が書かれていない情報は信用せず、情報については政府などが行っている統計データや論文を検索して調べることだった。

インターネットが普及し誰でも簡単に情報を手に入れることが出来るようになった一方で、誰でも簡単に情報を発信できるようになった。もちろん正しい情報も存在する。しかし個人の好き嫌いや憶測に基づいて発信した情報もある。だから利便性だけに目を向けるのではなく、情報の信憑性の低さも理解したうえで活用していかなければならない。

しかしながら情報の信憑性は制作者が匿名かどうかであることや出典の有無だけで判断しきれぬのだろうか。講義の中で、現代社会において信用できる記述は最終的に学術論文に至る。だが論文もすべてが絶対に正しいわけではないとの話があった。制作者が明確で出典も示されている論文ですら信憑性の低いものがあるのならばウェブページの情報なども例えたとえ（あえて漢字で書くなら「仮令」）制作者や情報の出典が明記されていても、それだけの理由で安易に信用できないし、記されている出典の方を参照したところでそれ自体も信用できるかわからない。かと言って情報を活用せずに主張を繰り返したり、自らの意見を述べただけのレポートというのもよいものではない。それゆえに私たちは、情報を安易に信用しないことも大事だが、好き嫌いや個人の感情に基づいて書かれているといったような明らかに信憑性が低い情報を除いてはむやみに疑うことをせずに信用して利用するというのも大事だろう。

コメント [y132]: 大切なことは、信用できる記述かどうかを判断できる力を養うことです。そのためには、たくさんの文献を読むことが必要です。

今回の授業は、主に引用の出典の書き方だった。まず、ウェブサイトから引用する場合。そのページを書いた人が匿名であったりペンネームだったりすれば引用は出来ず、本名であってもその名前を検索して人物の来歴などをみて人物像を把握してから引用するべきだということ。次に、本からの出典の明記の仕方だが、句点の使い方は「～である。」（～『～』～）ではなく、「～である」（～『～』～）。が正しいということ。他には使うべき、接続詞や使ってはいけない接続詞も学んだ。

引用のルールや明記の仕方にも正しい作法があった。間違えた使い方では、読む人も引用先を把握できず、検索しにくくなってしまふ。接続詞に関しても、使い方を誤ると論文の内容の方向性がぶれたり、論理的な文が破綻してしまう恐れもあること。そして、正しい接続詞は良い論文の起承転結になり、まとめやすくなると知った。

コメント [y133]: 具体的にどのような作法化、書いてください。

匿名のウェブページは信用しない、出典の書かれていない情報は信用しない、ウェブ情報はきっかけとして利用することが大切である。また、「思う」と書くことは避けるべきである。「思う」と書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えるべきだ。また、「考える」「感じる」「印象をもった」も使用を避けるべき言葉である。ウェブページは信憑性が低いからと言って全く使用してはいけないということではない。政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを得る時にウェブページを使用すると効果的である。私は家庭にネット環境があることが普通である時代に生まれたため、ウェブページはとて身近な存在であり、なんでもネットの情報を丸呑みしてしまう。だから意識して気をつけていないとそこからの自分の意見を見いだせなくなる。多面的思考力をつけるためにもウェブページは参考程度できっかけとして使用していくべきだ。

今回の総合科学入門講座ではまず最初に、具体的に書くことをしないから文章を書くのが苦手になってしまうということを学んだ。具体的に書く力は日々の練習の積み重ねや多くの経験によって培われていく。また、文章で大切な役割を果たす「起承転結」の意味を持つ接続詞が無いという理由で、箇条書きは不可である。

二つ目は、「匿名の情報は信じてはいけない」という考えについてだ。世の中には実名を出している目立ちたがり屋もいるので、この考え方は誤りである。

最後に、たとえウェブサイトの記事に出典の情報が書いてあったとしても出典の方を参照しなければならないということだ。こうすることにより、より正確な情報に近づくことができるからである。ちなみに、現代社会において、信用できる記述は最終的には「学術論文」に至るが、それも必ずしも正しいとは限らない。そのため、複数の論文を参照することが最重要事項である。

私はこれらのことから、「過剰に深く正確性に固執することにより完成が遅れる」か「妥協点を見つけて多くの論文を完成させる」かどちらが良いのかということに疑問に思った。何故なら、「誰のどの論文が絶対に正しい」ということは誰にもわからないはずだからである。

論文やレポートを書くときには、ウェブや本といった文献から調べ、自分の主張の根拠とするために引用することが重要である。しかし、どんな本やウェブ情報でも良いというわけではない。なぜなら、特にウェブ上に書かれているものに関して、嘘や誤った情報が

コメント [y134]: どの点がどうして間違っているのか説明してください。

コメント [y135]: まだ大学一年生なのだから、卒業までの四年間を活用して力を身につけてください。

コメント [y136]: そんなことはありません。しっかり判断力を身につければ分かるようになります。私には(たぶん他の先生方も)たいていの論文の正しさが一目でわかります。

書かれている場合も多く、信憑性に欠けるからである。それゆえ、利用する本やウェブ情報が適切であり信頼できるものであるのか、ということに注意して選択していかなければならない。

例えば、本を選ぶときには、まず概説書を読み、その分野における定評のある文献や古典的文献がどのような文献かを知り、それらを読んでいくのが良い。そして、著者の紹介を読んだり、著者について調べたりするべきだ。また、ウェブ情報を引用する際には、まず匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は信用せず、ウェブ情報はきっかけとして利用するのが良い。ペンネームも匿名と同じであり、信用してならない。本の際と同様に、制作者を検索して信用できる人物であるのか確認をするべきだ。また、学術論文や学術雑誌に掲載された論文を利用したり、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを活用したりするべきだ。雑誌論文には CiNii や欧米雑誌論文には Google Scholar というサイトを利用するのもよい。また、徳島大学の図書館のサイトでは、朝日新聞のデータベースを見ることができる。そして、信用できる情報を上手に引用することによって、自分の根拠を明確に述べるようになる。

今回の講義では、主に三つのテーマを取り扱った。

最初に取り扱ったのは、前回の講義の趣旨についてである。ここでは、前回の講義で重要とされた論文・レポートを書く際の三つの注意点、そしてコピーと引用の違いの再確認をした。また、前回の講義を基に、論文・レポートを書く際の注意点の説明も行われた。ここでは、一般的な注意事項と題して、論文・レポートを書く際に意識すべきことを教示された。例えば、適度に段落を区切ることや、具体的に書くこと等である。他にも「。」の打つ位置、引用の際の心構え、そして参考文献の選び方といったことである。

これらのことは、全て『コピーと言われないレポートの書き方教室』に言及されていることなので、当書は論文・レポートを書く際の、きわめて重要な指南書である。

次に取り扱ったのは、今回の講義の目的の一つである文章の構成の仕方についてだ。その内容は大きく分けて二つであり、まず、書いてはならない魔法の言葉と題して論文・レポートを書く際に使用を避けるべき語句を取り挙げた。例えば、「楽しかった」「~と知って驚いた」といった語句だ。何故これらの語句を論文・レポートを書く際に使用すべきではないかという、これらの言葉で締められた文はただの感想文に過ぎず、そのため客観性や論理的明瞭性が求められる論文・レポートには向かないからである。

そして、使用することで論文・レポートをより高等なものとする接続詞についても取り挙げた。それらは、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」で、これらを用いることで、文章に起承転結の流れを生み、論文・レポートに書かれた主張の因果関係を分かりやすくすることが出来る。

最後に取り扱ったのは、ウェブページの活用方法についてである。ここでは、先ず前回の講義内容と絡めて、出所表記(製作者、・ ページタイトル・ URL・ 閲覧日時)を参照することが、説得力のある論文・ レポートを書くためには必要であるということを改めて教示された。他にも、ウェブ情報が信用できるかどうかを確認するためには、その記事の出典を参照することが良いということを教示された。

次にウェブ情報の使い方と題して信用できるデータのありそうな場所、例えば政府や調査機関が行っている統計データや、新聞記事のデータベースの有用性について説かれた。

最後は論文の探し方についてである。ここでは、信用度の高い論文の探し方について学んだ。これらは以後の論文・ レポート作成の際に役立つ情報であった。

ところで、私は今回の講義を入れて三回目となった総合**化学科学**入門講座を通して疑問に思ったことが一つある。それは、ある情報を取り扱おうとしたとき、それについての客観的根拠の記載有無は、なにを基準に決めればよいのかということである。私は、今まで自明の理であるもの、つまり社会通念ならば出典は必要なく、反対に独自性のあるものはその根拠となる出典を必要とするべきだとしていたが、この判断でよいのかどうか、そして、若しこの基準が誤りならば、新たな基準を教示して頂きたい。

以上で当レポートを締める。

レポートを書く時は、基本は「たとえば・ しかし・ それゆえ・ つまり」の 4 つの接続詞を入れる。思うという言葉は使わず、理由を書く。いろいろ、さまざまという言葉も使わず具体的に書く。そして、制作者を確認し出典の書かれていない情報は信用しない。また、「学術論文」、「学術雑誌」で検索するのが良い。新しい本が良いとは限らず、「定評のある文献」や「古典的文献」を読み、本を選ぶ時は、本の「奥付」を確認したり、教員に相談する。ウェブ情報は統計データを調べる。ウェブ情報はきっかけとして利用する。

今日の授業で、情報のありそうな場所に新聞記事のデータベースとあったように、新聞から正確な情報を得ることが出来る。しかし、ただ、レポートを書くためだけに、その時だけ、新聞の記事から特定のデータを探すのではなく、毎日読んでいく中で、自分から話題を発見し理解することが必要だ。つまり、新聞を読む習慣をつけるべきである。これが、自分の「知識の体系」を育て、「知恵ある者」になるということにつながるからだ。

もう新聞は取りましたか?ぜひ実践してください。

「思う」「考える」は使ってはいけない。前日も言われたが、今回も口を酸っぱくして言われた。ほかにも「感じる」「印象を持った」と個人的な意見を述べているだけかのような言

コメント [y137]: 具体的に情報を示したうえで「この情報は根拠として信用できますか」という質問には答えられますが、「一般論としてどのような基準があるのか」と聞かれても答えられません。

葉は使ってはいけない。このような言葉を使いたくなるのは、根拠を述べていないからだ。具体的な根拠を示していれば、曖昧な表現で逃げる必要もなく、文章に説得力が生まれ、ある程度の分量になる。しかし、だからといって、どこかで小耳にはさんだ情報を「~と聞いたことがある」と根拠にするのはしてはいけない。文献にあることを確認し、出典を明記して引用すべきである。

また、文章は短く切り、接続詞を使ってつなぐのが好ましい。「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つが基本である。

ウェブの情報は玉石混交であるが、より分けることができれば有用な情報源である。例えば、政府や調査機関の統計データや新聞記事のデータベースは信用できる情報源である。また、ウィキペディアであっても出典が明確に示されているものについては、出典にある文献をあたってそこから引用するのは問題ない。ただし、出所表示など忘れてはいけない。

ウェブ上では論文を検索することもできる。雑誌論文は「CiNii」、欧文雑誌論文は「Google Scholar」を使って検索するとよい。

以上を踏まえて書かれたレポートであれば、形式面では問題のないレポートである。

英語版の Wikipedia は学者たちの間で正しい情報を載せようという動きもあって、だいぶ信用できるようになったとの話があった。なぜ英語なのかといえば、世界の広い地域で使われているし、論文は英語で書くことが多いからだろう。これは喜ぶべきことだ。私たちは中学・高校と英語を学び、そして今も学んでいる甲斐あって辞書を片手にすれば大抵の文章はまず理解できるからだ。また、インターネットは最も手軽に情報を手に入れられる場であることもメリットのひとつだ。さらには、どの情報が正しいのかより分ける訓練にもなるし、英語学習の一助にもなる。よって、英語版 Wikipedia を積極的に利用すべきだ。

コメント [y138]: できれば、英語の論文を利用しましょう。

今回の授業では具体的に書くことが文章を書く時の第一歩だということを学んだ。さらに接続詞をつけて文をかくことにより文と文の論理構造を理解しやすくなるということも学んだ。さらにペンネームは匿名と同じことで著者の名前は一度検索してどんな人か確かめる必要があることを学んだ。さらに新聞(特に特集やテーマ別のもの)を毎日読むことは就職するときに有利になることを学んだ。さらに政府(警視庁や文部科学省、厚生労働省など)の統計データを調べて自分でグラフを作成してみることで真偽を判定することもできると学んだ。さらに英語の論文のほうが日本語の論文より情報量が多いと学んだ。

その中でも私が特に重要だと思ったのは、接続詞を正しく使うことである

授業の中で「企業の HP は、客観的に正しい情報源ではなく、基本的に広告」という話に納得した。私は「科学情報に惑わされないための基礎知識」の授業をとっている。そして小山先生の話の中で「研究者は論文によって評価される。そのため 5 年ほどの短い期間の中でどれほど重要な論文を残せるか、またどれほど多くの論文を世に出しているかによ

って評価されることになる。そして評価されなければ自分の研究費を確保することができない。だから「研究者はたいして意味のない研究でも、いかにも重要であるかのように書く」というものがあつた。これは企業が自分の商品のいいところを書くというのに似ている。もし企業が自分の商品は割高なのにすぐ壊れるし腐った牛乳のようなおいがする、といってしまうと買う人が減ってしまうだろう。したがって企業の HP は、客観的に正しい情報源ではなく、基本的に広告である。

コメント [y139]: 実際問題、研究者同士であれば、重要かどうかは内容でわかります。

コメント [y140]: 仮定だけでは、根拠として不十分です。

今回の講義では、基本的な文章の書き方の注意事項・文献やウェブページの選び方を学んだ。

まず、基本的な文章の書き方としては「。」を打つ場所を注意すること。カギかっこの後ろに引用文献などが書かれている場合も、そうでない場合も一番最後に句点を打つ。ただ、カギかっこの中にいくつかの文があつて、そこで句点が必要になった際はきちんとつける。

次に書いてはいけない言葉と、書くべき接続詞について。最初の講義から言われているように、「思う」という言葉を書くのは厳禁である。「思う」を書かないと不安な気持ちになるのは、その文章に理由や根拠が足りないからだ。なので「思う」を書く代わりに理由・根拠を考えてそれを書くようにする。また、文章は短く切って読みやすいように「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」などの接続詞でつなぐ。

そして、文献やウェブページの選び方のポイントはページの制作者を確認することと、出典の書かれていない情報は信用しないことだ。あくまでウェブ情報はきっかけとして利用して、出典が書かれているようならその出典の方を調べてみるのがいい。

その他にも、考えたことを具体的に書くことや、文の主述関係を明確にするためにも、主語を書かなくてよくなる受身形の文章はやめることなどがあつた。

講義の中でも特に重要なのが、思考するとは文を手で書きそれを見て書き直すこと。つまり文章を書く練習の繰り返しで思考力が鍛えられるということだ。それはこの先のレポート・論文作成に必須のことであるし、この講義を学ぶ意義にも論理的な思考力の養成は含まれているため、重要である。

レポートの「書き方」は、「思う」や「色々、さまざま」、「聞いたことがある」を消して、それぞれ理由や具体的に書いたり、出典を書く。また、「例えば、しかし、それゆえ、つまり」といった接続詞を使って文章を構成する。また、レポートにおける「ウェブの利用方法」は、匿名のウェブページは信用せず、制作者の名前を検索し、出典の書かれていない情報は信用せず、出典が書かれていたら、出典の方を参照する。しかし、ウェブを全く利

用しないのではなく、例えば統計データを探したり、論文を検索したりして、ウェブ情報はきっかけとして利用する。

今回の授業の要点は、レポートや論文を書く際には理由を具体的に書き、例えば・しかし・それゆえ・つまりの4つを中心に接続詞を用いるべきだということだ。また、webを利用する際には、あくまでもきっかけとして使用するべきであり、数ある情報の中でも特に政府機関が作成した統計データの信頼度が高いということだ。更に、論文を検索する際の手段としても非常に有効であるということだ。

この通り、インターネット検索を利用する際は、書かれてある情報を鵜呑みにしてはならない。なぜなら、ネット上には1つの事柄に対して幾つものサイトが存在しており、正に情報が氾濫しているといえるからだ。実際、あるテレビ局がインターネットの情報をもとに番組を作成したところ、事実に反する内容や実在しない商品を紹介してしまうといったミスをした。これは、番組作成側が事の実偽をきちんと確かめなかったことによるものである。

このように、ネット上の情報を鵜呑みにすると、大勢の人に更に誤った情報を広めることになりかねない。それゆえ、インターネット上の情報をすぐに信頼するのではなく、きっかけとしての利用に留めるべきなのだ。

参考文献

・JAPAN 芸能カルチャー研究所 ネットのフェイク情報に踊らされるテレビ業界 リサーチは“裏取り”が命

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20170609-00000002-wordleaf-ent&p> 4月28日 "

論文・レポートを書く際に、書いてはならない言葉がいくつかある。

代表的なものは「思う」という言葉である。論文・レポートは根拠や理由を示しながら誰もが理解できるように自分の主張をするものであるのに、「思う」を使えば、理由や根拠を示さず論を進めることになるので、それではまずいからだ。同時に「考える」「感じる」「印象を持った」というのも、同様の理由から書かないほうが良い。

他にも「いろいろ」「さまざま」「ある程度」などは具体的に書かれておらず、ごまかしている表現だから書いてはいけない。

反対に書くべき言葉というものもある。それは接続詞だ。「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の4つが基本である。これらがなければただの箇条書きになってしまう。文章として成立させるには、主語→目的語→述語→接続詞→主語→.....というような順番で接

コメント [y141]: どういうことですか？

コメント [y142]: 明瞭区分性が満たされていません。

コメント [y143]: これは「匿名」では？

続詞を上手く使っていかなければならない。

また、論文やレポートを書くには本や論文などを予め読んでおく必要がある。そこで、本の選び方についてだが、基本的にはより確かな情報の得られる出版年が最近のものを選ぶのが良い。しかし、新しいものが必ずしも良いとは限らないので、まずは先生に聞くか、概説書を読むかして定評のある文献を知りそれを読むと良い。

コメント [y144]: これは学生のコメント。

今回の授業では、文章の作り方の作法を学んだ。学んだことの一つとして、レポートなどで「思う」、「考える」と書くのは根拠・理由を明確に示せていないからである、ということ。自分がこのように思うからだ、と理由を示すことができれば文末は断定表現で書くことができる。さらに、レポートを書く際、ウェブページで調べるときに注意しなければいけないことも学んだ。それは、ウェブページの制作者の本名が載っていないこと(ペンネームも含む)、参照するウェブページ・文献が一つだけではいけないこと。いくつかの文献やウェブページを参照する中で矛盾を見つけたときは、どちらの情報が正しいのかを自分で考え答えを作り出すことが重要である。

しかし、ネットの書き込みは誰でもできる世の中で、ウェブページの情報は本当に信用できるのだろうか。制作者の本名が明記されているからと言ってその情報を鵜呑みにしてもいいのだろうか。制作者の名前が書いてあるからと言って信用しすぐに引用してはならない。実名が書かれている場合は、そのウェブページの情報に出典があるかどうかを確認するのがよい。書かれていないときは信用に欠けると言ってもいい。出典が書かれているときはその出典のほうを参照するのがよい。